

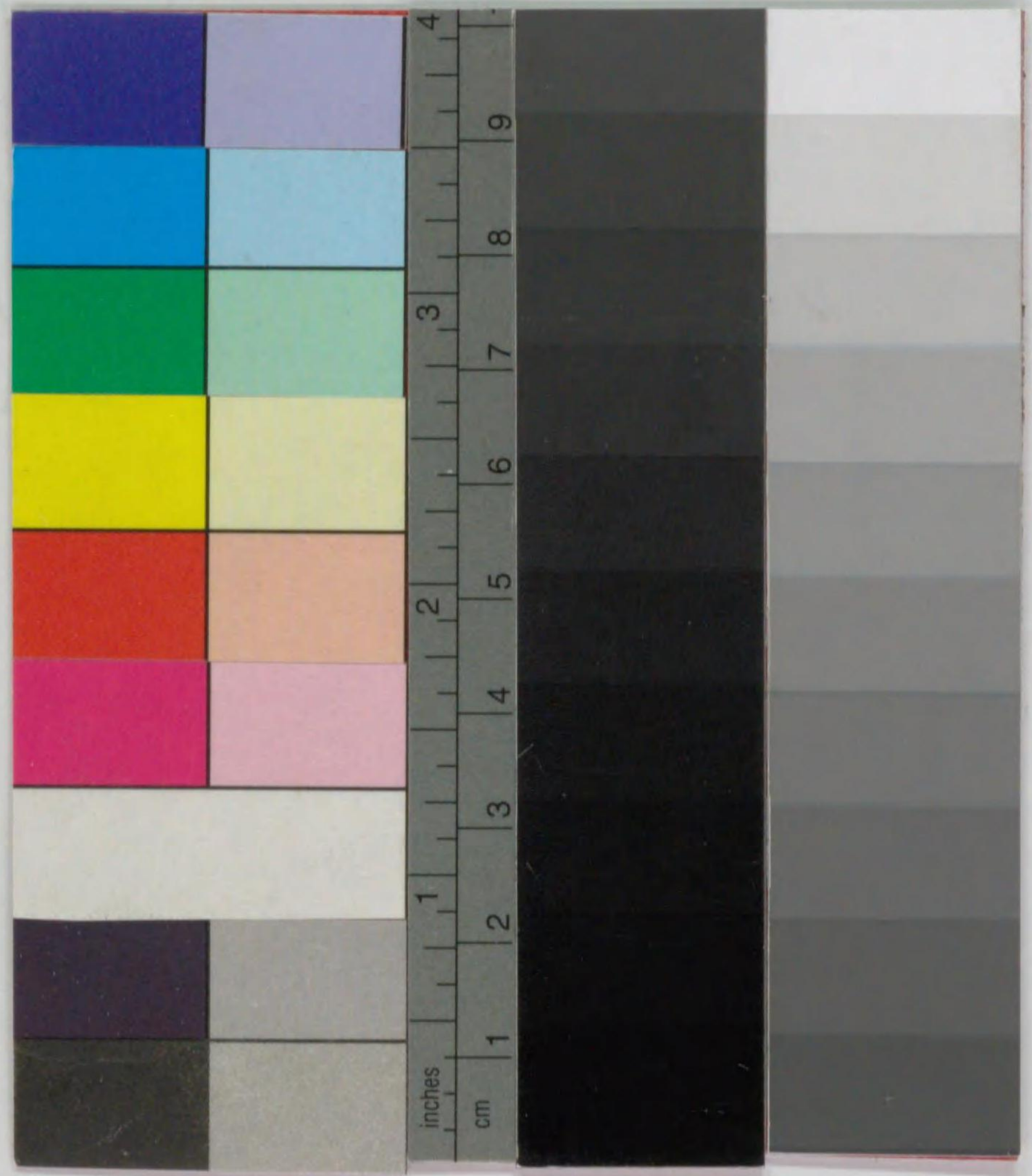
578-36



1200501520521

578

36





8.4.12



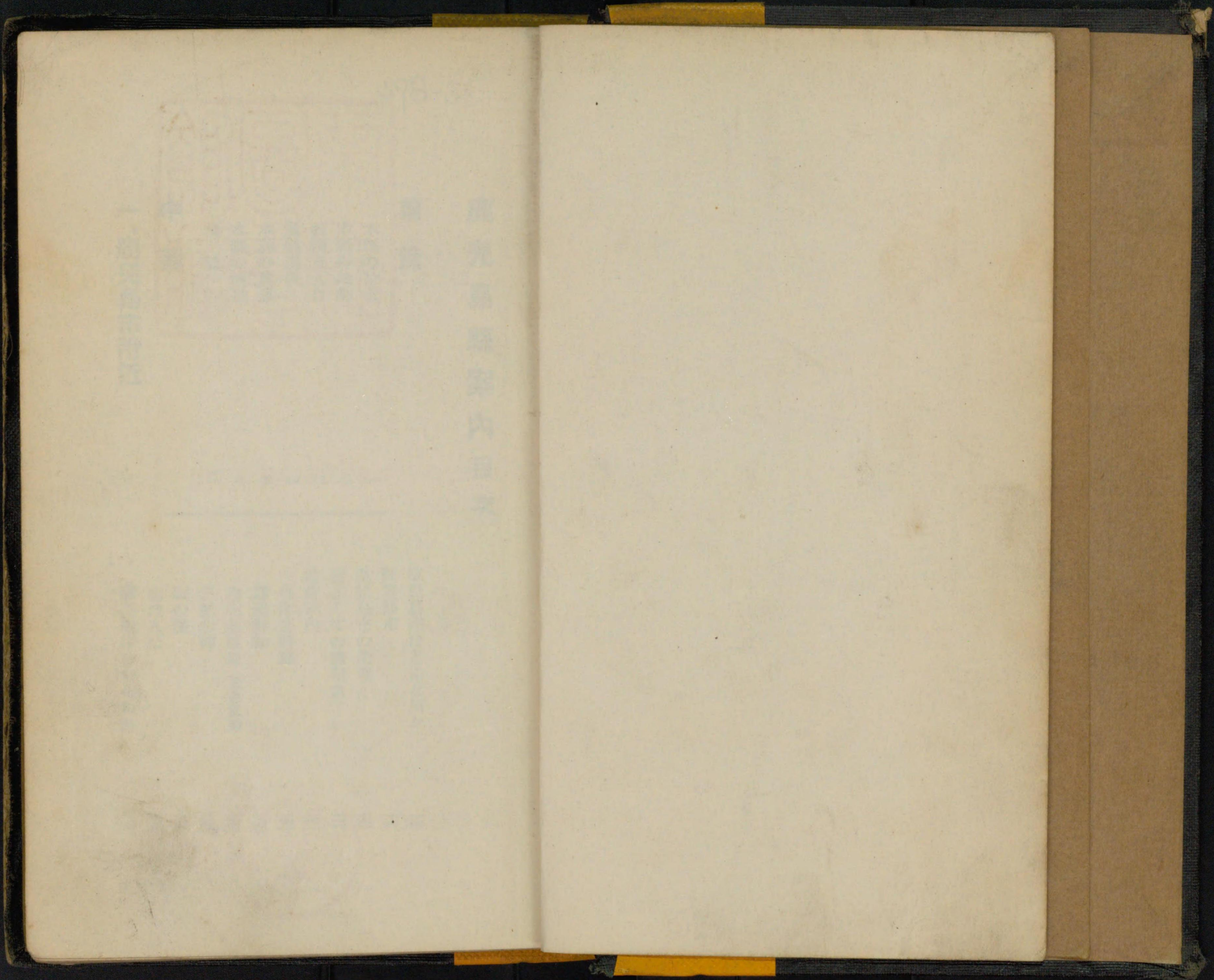


# 鹿兒島縣案內



鹿兒島縣教育會編纂



















松轟の瀧  
八瀬尾の瀧  
蟹が地獄

萬世町

竹屋神社  
大浦瀉  
片浦港  
野間岳

枕崎町

無限の寶庫  
耳取峠  
坊之津  
泊浦  
久志港

西國分村

官幣大社鹿兒島神宮  
奈牙木杜  
隼人塚  
隼人畧記

國分町

日當山温泉  
隼人城  
大隅國分寺趾  
官幣大社霧島神宮  
天孫降臨の靈峯  
韓國岳  
温泉案内  
硫黄谷温泉  
明礬湯

七、肥薩線附近

南洲翁と月照上人

平松神社

帖佐村

寺師の梅  
米山薬師  
古帖佐屋敷

蒲生村

日本一の大樟

加治木町

精矛神社  
龍門瀧  
文之和尙の墓  
文之和尙小傳

榮之尾温泉

新湯

ラムネ温泉

鹽浸温泉

山之湯温泉

安樂温泉

高屋山陵

栗野村

松尾城と栗野踊

研欲踊

栗野岳温泉

吉松驛

八、山野線附近

湯之尾温泉



大口町

大口城趾

忠元神社

新納忠元小傳

西太良村

天堂ヶ尾關白陣趾

曾木の瀧

山野村

九、鹿兒島灣沿岸

喜入村

瀬々串

喜入濱

今和泉村

一七三

一七三

一七三

一七四

一七五

一七五

一七六

一八〇

一八〇

一八〇

池田湖

指宿村

宮ヶ濱

指宿温泉

紫立温泉

二月田温泉

朝日温泉

村之湯温泉

彌次ヶ湯温泉

瀧口温泉

摺の濱温泉

石器時代遺物包含層

多良濱

山川港

龍眼肉

一八一

一八一

一八一

一八三

一八四

一八四

一八四

一八五

一八五

一八五

一八六

一八六

一八九

一八九

一九〇

一〇、大隅鐵道附近

鹿屋町

笠之原

給良村

吾平山陵

館屋敷の傳説

高山村

肝付氏の勤王

内之浦村

串良村

群集古墳

肝付川

一一、志布志線附近

一一三

一一四

一一五

一一五

一一七

一一八

一一九

一二〇

一二〇

一二〇

一二二

一二三

山川村の温泉  
甘諸の元祖

願娃村

開闢岳

牧聞神社

川尻浦

郡と石垣

小根占

花瀬川

小川瀧

佐多岬

高須港

古江港

垂水町

一九二

一九三

一九三

一九三

一九五

一九六

一九六

一九七

一九七

一九八

一九九

二〇〇

二〇一

二〇二



末吉町

中津瀬

憶が原

小戸の池

柄基

櫻谷

岩川町

彌五郎さん

財部町

松山村

志布志町

檳榔島

大慈寺

大崎村

二五

二〇五

二六

二六

二七

二七

二七

二八

二九

三〇

三〇

三一

三一

三三

横瀬の古墳

二二、種子島・屋久島附近

種子島

鐵砲傳來の歴史

甘藷傳來の歴史

西之表町

山口踊

熊野浦

馬毛島

屋久島

八重岳

神代杉

如竹翁、ヨハンシロテ記念碑

如竹翁小傳

三四

三六

三六

三七

三八

三九

三九

四〇

四〇

四〇

四一

四一

一三三、大島諸島附近

大島諸島

砂糖

大島紬

大島の豚

豊かな水産

名瀬港

飯匙蛇

西郷隆盛謫居の地

終篇

年中行事

初市

三三

三三

三三

三三

三三

三三

三三

三三

三三

三三

木市

曾我傘焼

六月燈

心岳寺詣

祇園祭

精靈流し

十五夜綱引

義臣傳輪讀會

妙圓寺詣

栗野研欲踊

加世田踊

出水稚兒請

彌五郎どん

太鼓踊

棒踊

四二

四二

四二

四二

四二

四二

四二

四二

四二

四二

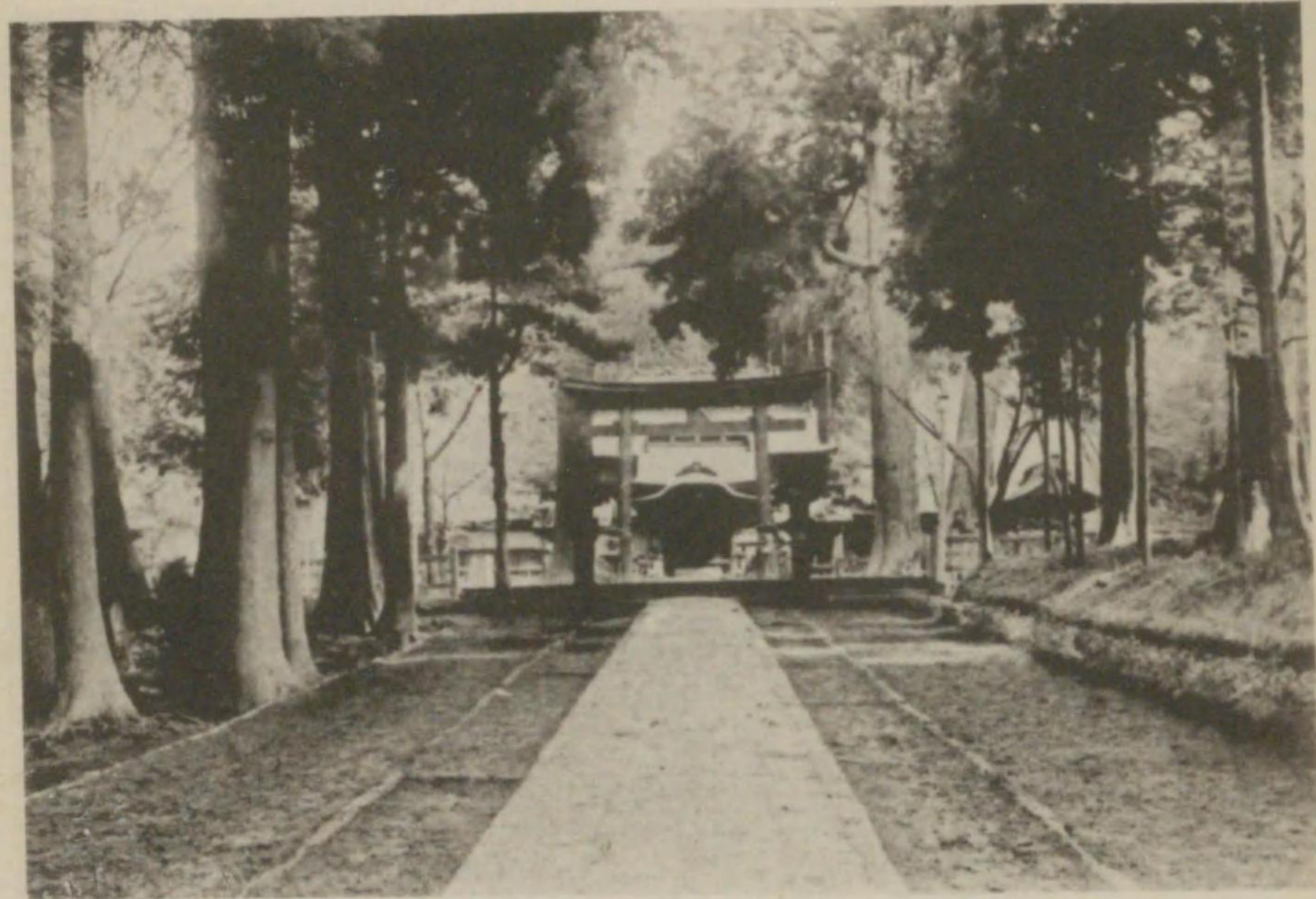
四二

四二

四二

四二





霧 島 神 社



高 千 穂 の 峯 全 景

鈴懸馬

縣民の娛樂

興業場

薩摩琵琶

本縣の特産

薩摩焼

錫器

大島紬

薩摩上布

薩摩緋

竹器

薩摩煙草

砂糖

二五

二七

二五

二五

二五

二五

二五

二五

二五

二五

本縣の名物

饅節

焼酎

櫻島大根

櫻島蜜柑

文且漬

輕羹

俗 謠

オハラ節

ハンヤ節

シヨンガ節

視察便覽

縣立學校案内

優良小學校案内

二五

二五

二五

二五

二五

二五

二五

二五

二五

二五

二五

二五

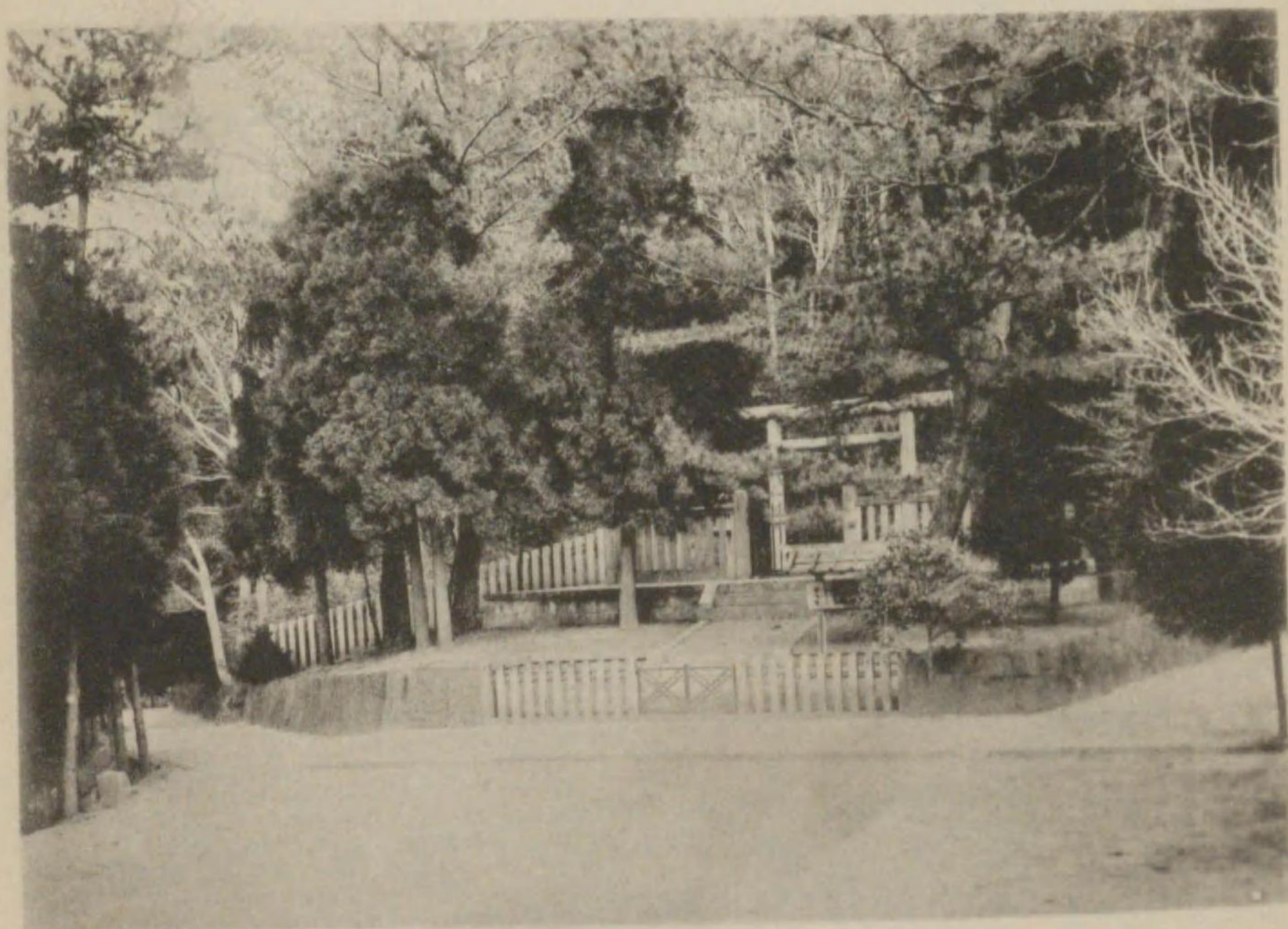
二五

二五





鹿兒島神宮

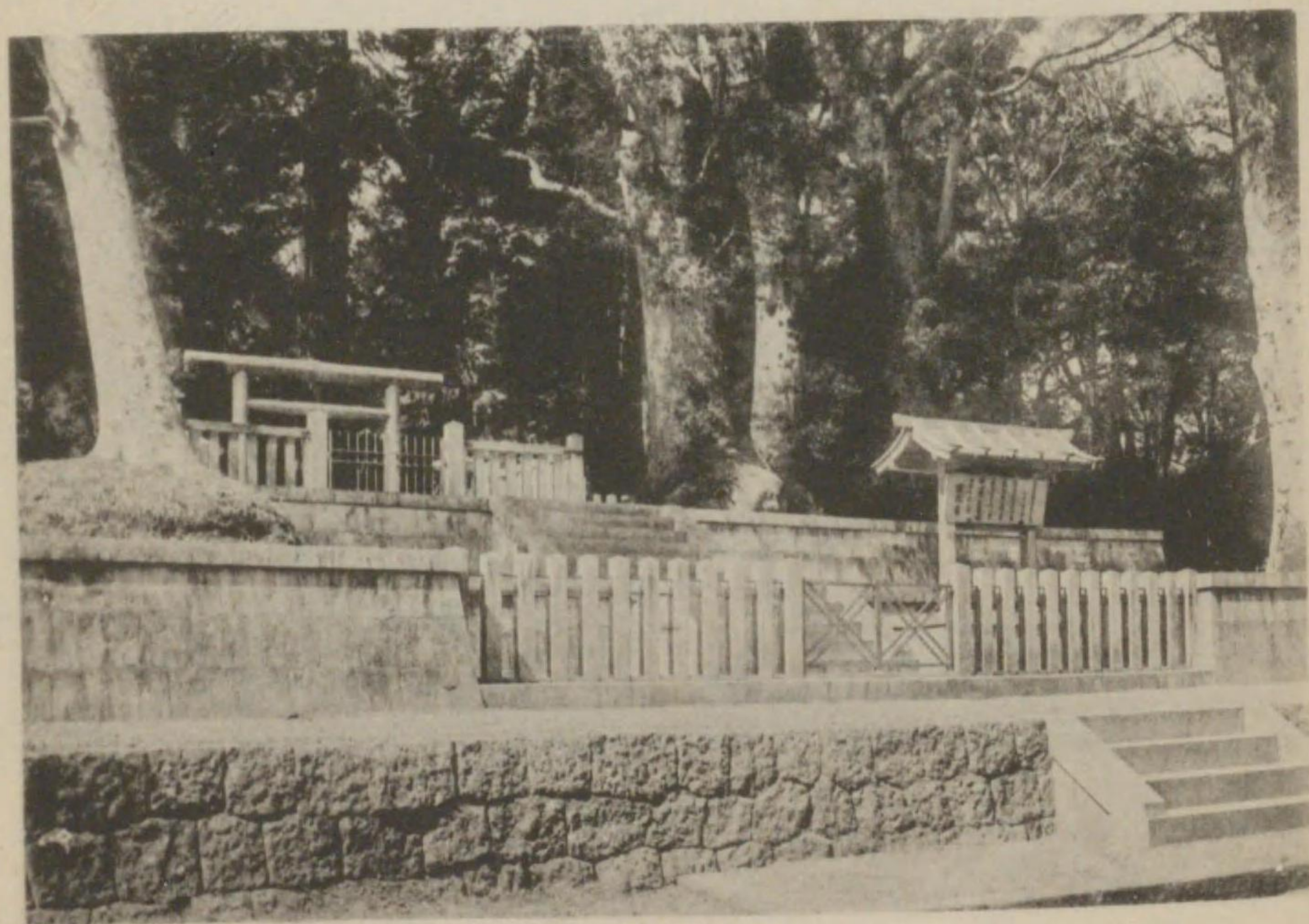


高屋山上陵



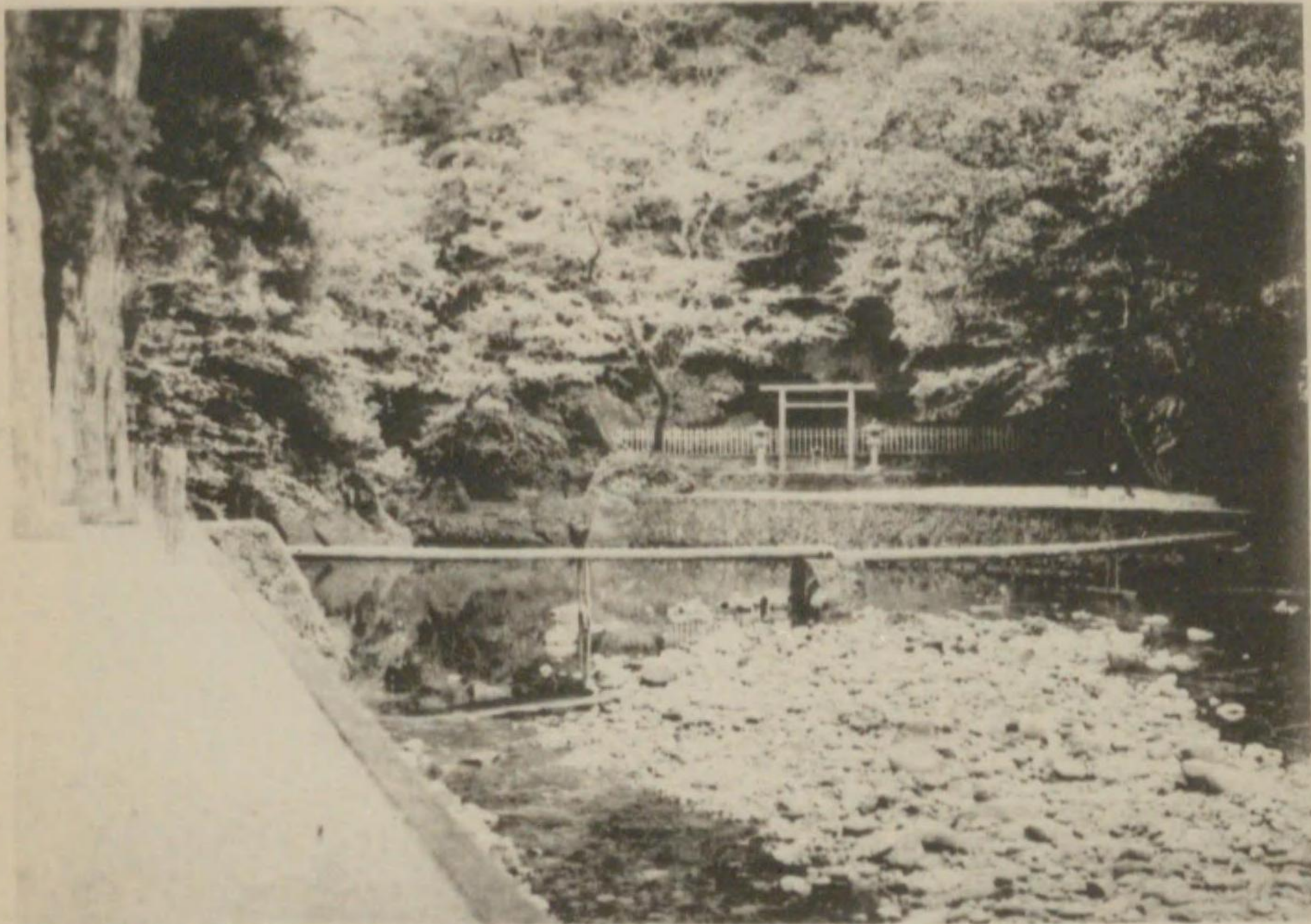


新田神社

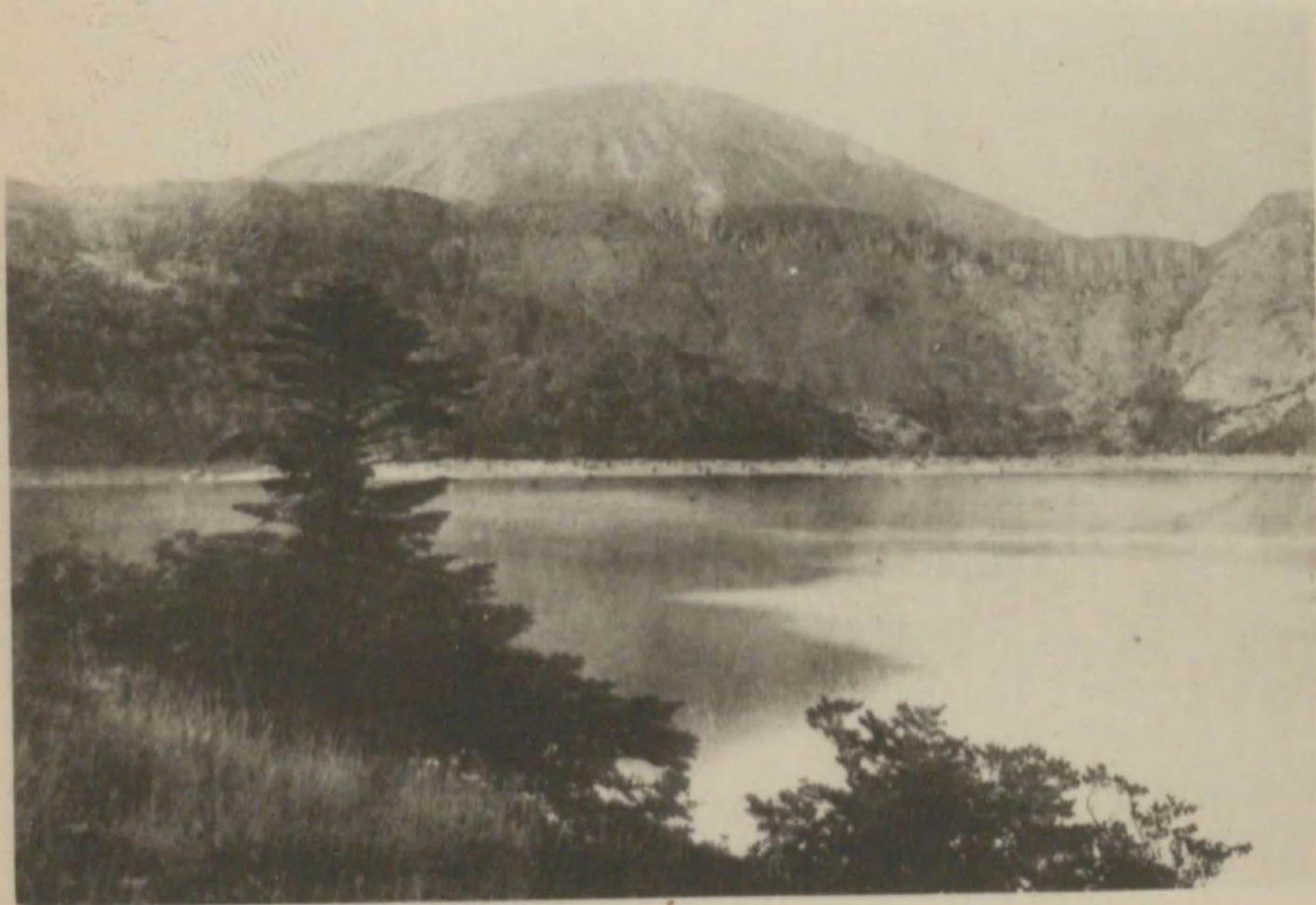


可愛山陵





吾平山の上陵



大波浪池



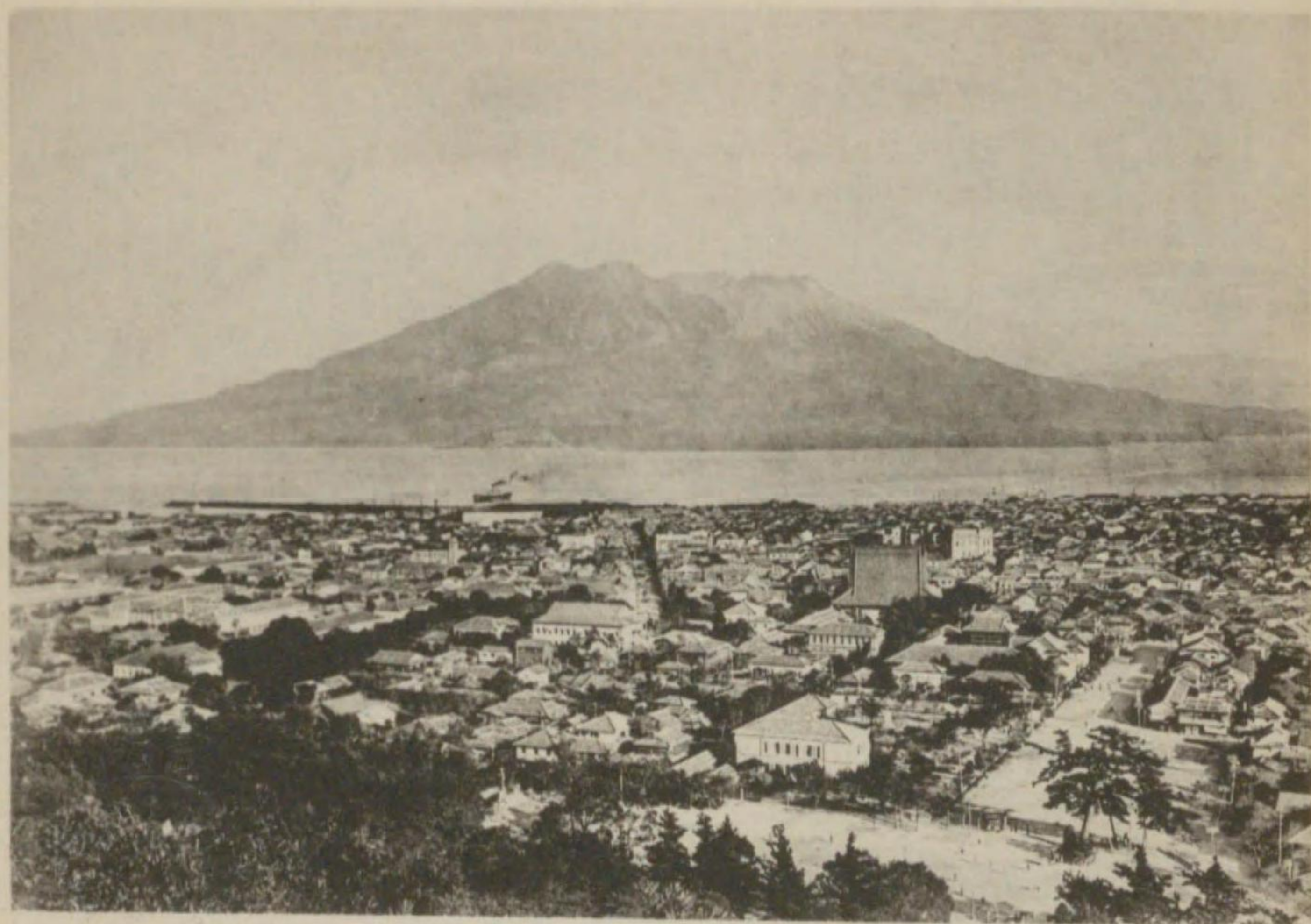


社 神 聞 枚



岳 聞 開



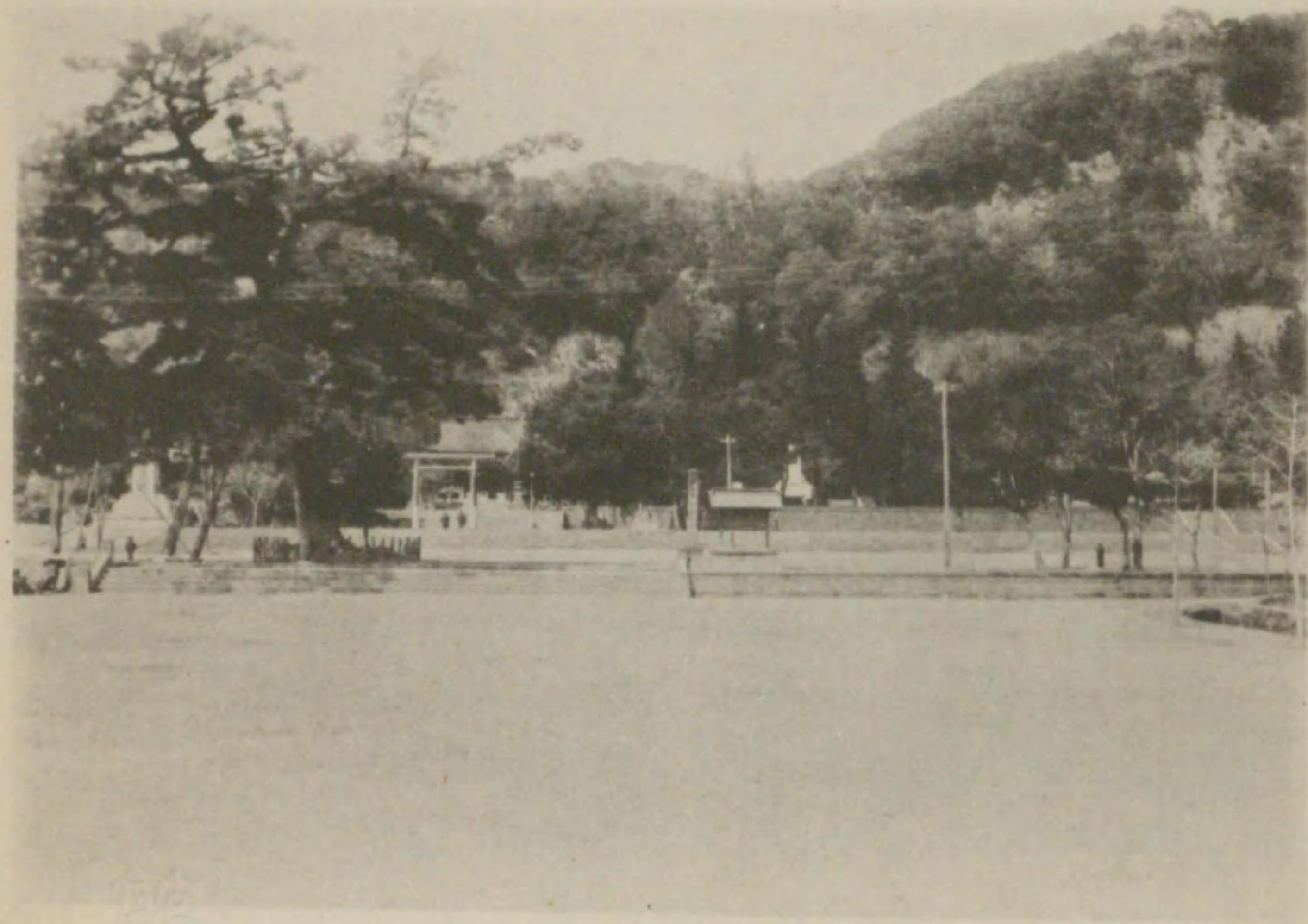


山城より見たる鹿兒島市全景



鹿兒島港



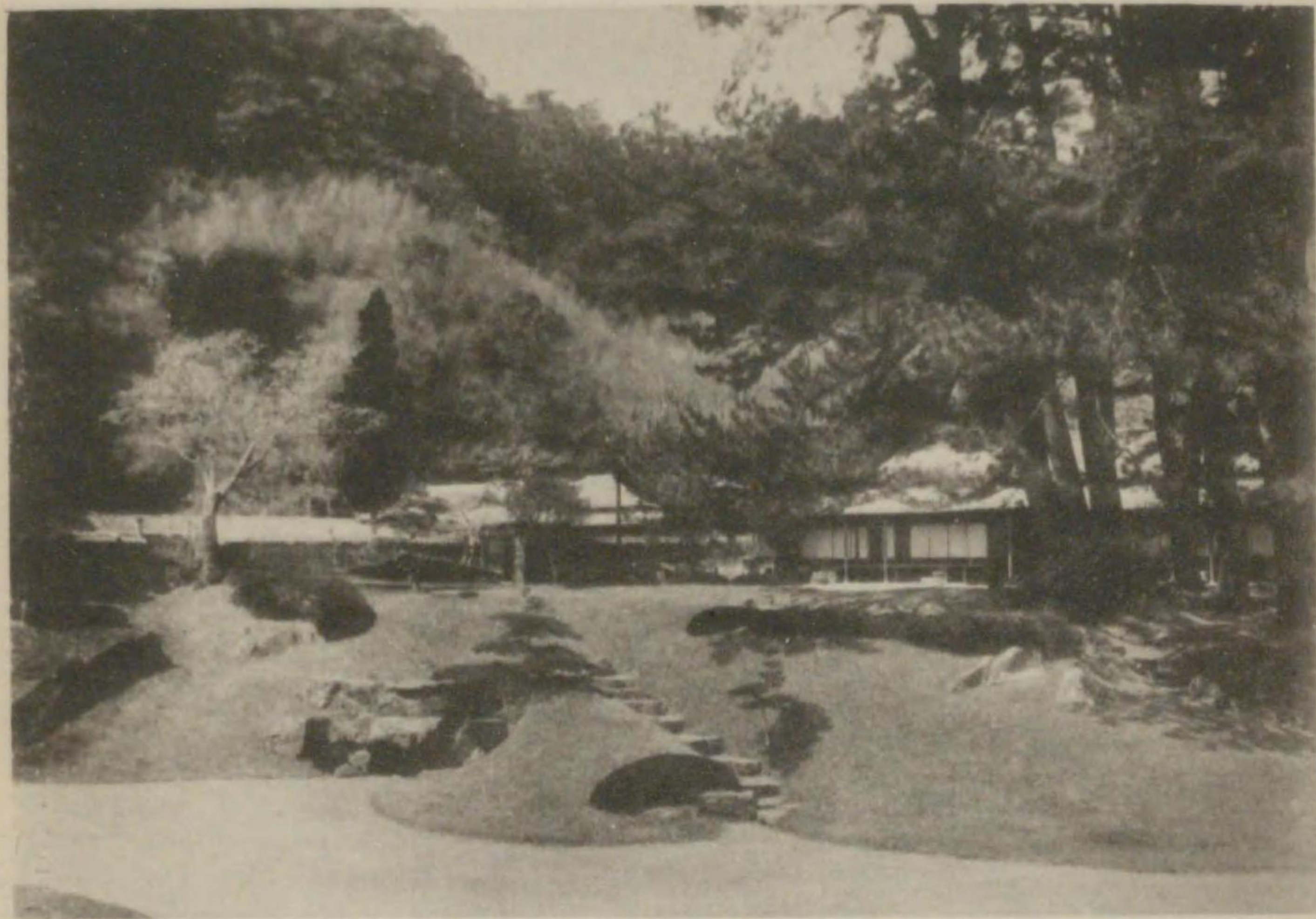


照國神社



鶴丸城趾





磯島津邸庭園



祇園の洲



吹上濱





本社旅行案内内部編纂(十月一日發行)

**最新 鹿兒島縣地圖**

實價金拾五錢  
送料四錢

本社獨特ノ編纂ニシテ各郡別彩色六色刷美麗地圖裏面ニ左ノ特色アル案内記ヲ附ス

- 1、史蹟、名勝、天然記念物各記、
- 2、遊覽地、溫泉、山岳登山案内記
- 3、縣内自動車發着一覧
- 4、市ヲ中心トセル縣内各地陸海路里程一覽、汽船汽車運賃表

市役所土木課實測(壹万分の一)

**增補 鹿兒島市街圖**

實價金貳拾錢  
送料四錢

▼市内の好案内圖 寸法 一尺九寸 舶來紙  
二尺八寸 石版四色刷

- 1、市内ノ道路細大遺漏ナク
- 2、一日遊覽、二日遊覽ノ別ヲ設ケ特色アル案内記ヲ附ス
- 3、市ヲ中心トセル縣内自動車發着表
- 4、主ナル官衙、學校、銀行、會社、所在地、電話番號表

**所 賣 發**

三九町石千東市島兒鹿

**社會式株刷印島兒鹿**

番四二九島 } 話電  
番二〇二一 }  
番〇六五六一 冊 福 替 振



眺望絶佳



親切第一

# 御旅館山城屋

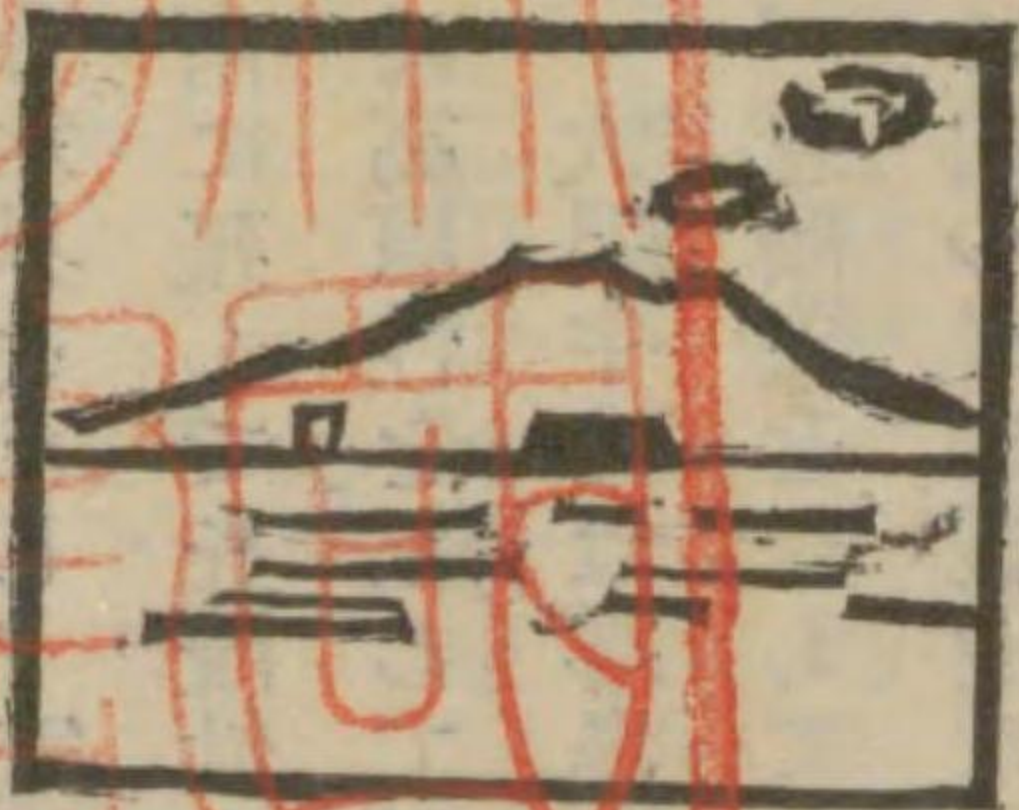
鹿兒島市築町朝日通

電話 電長三二九番  
四八五番

## 鹿兒島縣案内

### 前篇

#### 本縣の位置



門司市を距る南方へ二百有餘哩、九州の南端に突出した二大半島で形成され、北は矢嶽の險によつて熊本縣と界し、高千穂、韓國の靈峰によつて宮崎縣に接し、東は渺々たる碧水萬里の太平洋に臨み、西は天草灘の彼方吳越の天を望む。

大隅、薩摩の二大半島に擁せられた胎兒のやうな入江が巨水漫々の鹿兒島灣で、風波の靜かな迂餘曲折の海岸線に、白帆悠々と浮ぶ山紫水明の處錦江灣とは即ちこれである。



## ◆本縣の地勢

縣の北部は九州山脈の先端と、海拔一千七百米の霧島山を主峰とした霧島火山脈に屬する大小二十七個の火山群とで丘陵深壑、相交錯して、久しく鎖國の夢を守らしめる爲には恰好の天險である。

西部の薩摩半島は九州山脈の先端が延びて、紫尾山脈となり、出水の平野と川内平野の分水界をなし、冠岳の山脈が之と竝んで川内平野と、加治木國分の平野の分水界となり、南に延んで丘陵性台地性の複雑な地貌をなした金峰山脈が灣に沿うて急傾斜をなし、先端は高原性を呈して居る。

大隅半島は霧島山に續いて高隈山脈が、之もまた灣に沿うて分水界が著しく西に偏在し、急傾斜をなして走つて居るので、海岸には殆ど海岸平野がないけれども、東海岸の方面に向つては緩慢な傾斜をなして有明灣に入る。随つて此の方面には平野があり、耕地に利

用されて居る。

肝付川、志布志川、安樂川、菱田川等の河口一帯の地方がそれである。

縣下一般に廣漠たる平野に乏しくて、本縣第一の大河、川内川の流域でさへ、紫尾と冠の二山脈に蹙迫されて、川の太い割合に平野は廣くない。

## ◆面積及人口

本縣の面積は五百八十四方里、内薩摩國が二百三十七方里餘、大隅國が三百四十六方里餘、之を一市十二郡で二十二町と百二十二個村に別れ、人口百五十一萬三千四百十六人、戸數二十七萬二千七百三十五戸を擁し、一方里平均二千五百七十四人餘、これを全國の平均、二千二百四〇人に比すれば、平均を越ゆること三百三十人である。

今之を職業別に戸數を示すと

農業 一八九、〇二五戸

漁業 一一、二〇一戸



工業 一六、三九三  
商業交通業 二三、八九三戸  
其他 二八、六九七戸  
無職 一、八二六戸

(備考)

全國各府縣と比し

面積 一〇番 人口 一一番 密度 二九番

これ等の住民が

☒ 氣候 温暖

で雨量が多いといふ豊かな天恵を受けて居るといふ事は、誠に感謝の外はない。三面海に圍まれ、しかも其の間に鹿兒島灣を擁して居るので、氣温の變化がゆるやかで、所謂海洋性の氣候である。温暖なる上に濕潤であるが爲めに農作物の生育は非常に良好である。何といつても

◆ 本縣の産業

は農業が第一である。大正十五年度米の實收高は百六萬千三百八十八石といふ數字を示してゐる。豊かな天恵と、自然の地形とによつて、水産、林産、牧畜、養蠶等皆相當の産額を擧げて居る。

獨り工業のみが甚だしく遜色があるのは、地の利を得ぬ爲めで止むを得ぬ。今最近の産額を業別に擧ぐれば、

總産額	一八二、四九二、〇〇〇圓	(二十二番)
農産額	八二、八〇四、〇〇〇圓	(十三番)
工産額	五八、四二八、九五五圓	(三十七番)
水産額	一八、七一六、二七九圓	(七番)
林産額	八、六二五、〇〇〇圓	(六番)



産繭額	八、三三一、〇〇〇圓
畜産額	八、一七〇、〇〇〇圓 (八番)
鑛産額	二、四四〇、〇〇〇圓 (二十二番)

◎農産物

主として米で川内川流域の平野、肝屬平野に多く産し、川邊の盆地と伊佐盆地に良質のものを産する。縣でも米質の改良と生産の増收とを期し、深耕施肥法の改善、病虫害豫防驅除、乾燥、調製法の改良を熱心に指導して居る。

甘藷はまた縣民重要な食料品で、産額は全國の首位に居る本縣の風土によく適する爲めに殆ど無肥料耕作で、天候の害を受ける事が少くて、耕作が容易な所から縣下一般に栽培せられ、年産額一億四千四百八十萬貫(大正十四年)を出し、肝付平原と大島が有名である。

工藝作物として煙草がある。古から本縣の特産で銘葉を産するを以て知られ、國分、出水、指宿、垂水等が有名である。

朽木について全國第二位に居り、賠償額は一千百三十一萬九千圓(大正十四年度)に達して居る。

甘蔗は大島熊毛と、肝付郡指宿郡の一部に栽培し、砂糖の産額は台灣沖繩について全國第三位に居る。

工産物

第一に醸造業で、焼酎が最も多い、米と甘藷とが原料で、縣民一般に愛飲し、近頃では他府縣に多く移出する様になつて出る。鹿兒島市と加治木、加世田に大任掛の工場がある。

織物は主に大島紬と薩摩絨で、中にも大島紬は、全國一般に愛用されて居る。

焼物は豊公征韓役以來、日置郡下伊集院村の苗代川で製造して居たが、近年薩摩焼として需要が増したので本縣特産物として名高くなつた。平佐村の平佐焼、谷山の長太郎焼、加治木の龍門焼等が有名である。

此の外錫器や竹器があり、蒲生、伊作の製紙があり、日置谷山の瓦等がある。



### 水産物

三面海をめぐらし、海岸線が四百里にも亘り、至る所に島や暗礁が多いので、頗る漁利に富んで居る。

中にも有名なのはかつをで、静岡縣について全國第二位に居る。

大島と枕崎が最も多い。其の外いわし、ぶり、さば等、魚獲高が非常に多い。

### 林産物

本縣は山の多い上に地味、氣候が樹木の育生に適して居るけれども、其の割に發達して居ないのは遺憾であるが、縣でも植林事業を獎勵して其の發達をはかつて居る。用材、薪炭材、竹材等で、用材は蒲生の杉材、及屋久島の屋久杉が有名である。

### 養蠶

宮之城が最も盛である。肝付、日置、薩摩の諸郡に行はれ桑園七千三百七十町、飼育戸數が春蠶で六萬三千餘戸、夏秋蠶で五萬七千餘戸、掃立枚數が二十三萬一千六百枚である。

### 畜産

主として馬と牛と豚である。馬は北海道に次ぎ全國第二位に居り、牛は廣島、兵庫について第三位に居り、豚は沖繩に次で第二位に居る。明治四十二年に種畜場を始良郡敷根に設け、大正九年に伊敷村に種畜場の分場を新設した。

馬は野方、恒吉等に多く、牛は池田湖畔に産し、豚は主として大島である。

### 鑛産物

金が主である、大分、茨城に次ぎ全國第三位に居る、串木野、芹ヶ野、山ヶ野等が最も有名である。谷山の錫は産額の多い事と品質の良好で一時天下に名をなして居たが、今では見るかげもなくなつて居る。大島の硫黄島に硫黄も産するが、産額は極めて少い。

## 本縣の商業

大正四年には銀行が僅かに九ツ、資本金四百七十七萬四千圓であつたが大正十三年末に



中篇

イ、鹿兒島市附近

鹿兒島市は

どんな所か

といつたら「前には波靜かな錦江灣を湛へ、近く天を摩する櫻岳に相對し後には城山の新縁を負うて、一圓の白堊粉壁の市街が若々しい氣分を咬つて、懐しい南國情調を湛へた繪の様な所だ」といはふ。

我國西南端の都市として人口約十四萬を有し、尙ほ年々増加の趨勢を示した歴史に富む

都會である。

文治二年、島津忠久公が、薩、隅、日三州の太守として子々孫々相傳へ、代を重ねる二十九、年を閲する七百余年霜、其の間、幕府は治亂興亡幾度か變遷したけれども、島津氏七百年史は連綿として一貫し、確固不拔の威を示して、西南の雄藩として此の地に七十七萬石を領し、常に天下に重きをなして居た。

明治四年廢藩置縣の制が布かれ、尋で鹿兒島縣廳を設置し、明治二十二年六月、市制を布かれ、明治三十九年、鹿兒島港改修による埋立地を、洲崎町と命名して一町を増加し、四十四年、鹿兒島郡伊敷村の一部と西武田村の一部を編入し、大正九年十月更に伊敷村の一部、永吉、下伊敷(紙屋ヶ谷)を編入し、大正十一年一月から南林寺墓地を整理し、新に南林寺町を増設して、今では全市五十八町となつて居る。

藩祖忠久公が薩摩隼人の質實剛健な氣質に鎌倉武士の勇敢儉素の士風を加へられたので忠孝尙武の氣に富む薩摩士風の源泉をなして、會津熊本と共に三大



指宿線。 武 一 指 宿 哩 未成大正十五年度着手  
 南薩鐵道。 伊集院一 大崎 一八哩六 南薩方面  
 大隅鐵道。 古 江一 串良 一九哩六 南隅方面  
 薩南中央鐵道。 阿 多一 石垣 二一哩 阿多、川邊間五哩余開通  
 有明鐵道。 志布志一 串良 一〇哩 設立計畫中

海路、鹿兒島港を起点とし、主として大阪商船會社、九州汽船會社、灣内汽船會社、の船が其航行に任じて居る。

行先	所屬會社	賃金(三等)	所要時間	回数	出帆時刻
種子島 屋久島	九州汽船	西之表 二八〇錢 宮ノ浦 四一〇錢	二( )八	三 日 一 回	午前十時
大島を 經琉球	大阪商船	那覇 四〇四錢 名瀬 六〇四錢	三 一 九	三 日 一 回	午后五時

垂水 小根占	灣内汽船	垂水 四〇〇錢 小根占 一二〇錢	四一	二 每 回 日	午前八時 午后一時
揖川宿 山	灣内汽船	揖川宿 七八錢 山 八五錢	四四	二 每 回 日	午前八時 午后一時
古江	灣内汽船	古江 八〇錢	二	六 每 回 日	
櫻島 遊覽		袴腰		隨時 何 回 も	

陸路に於ても縣道、國道は自動車、馬車の定期發着があるので、旅行はどこへ行つても不自由はない。

航空界に於ても、米機、英機、亞機と、世界一周の飛行機が比の地を通過し、將來の航空界に於て、鹿兒島縣は其要地となるのではあるまいか。



は、銀行數十四、資本金三千二百九十七萬圓に上つた。

預金

六千七百二十八萬圓

貸出

七千二百八十四萬圓

貨物の集散は鹿兒島港を中心として、海運によつて從來の阪神地方及沖繩、大島の諸港、近く朝鮮、南滿洲等の諸港との貿易關係が密接になつて來たが、肥薩海岸線が開通し、鹿兒島港灣改修の曉には、南九州の貿易要港たる地位を占めて、商工業の發達を促す事であらう。

陸運も鹿兒島市を中心として、縣内、縣外に通ずる鐵路により市の兩端、鹿兒島、西鹿兒島の二驛から物資を吞吐し、之を鹿兒島港の海運と接觸せしめて、年と共に貨客の増加を見る。

會社

一八四

資本金

一億千九百九十五萬圓。

産業組合

一八八

加入人員

十二萬二千人。

### 交通

### 通

遠い鎖國の夢からさめた本縣は、新文化の輸入に何物をも焼き盡さねば止まぬ精進と努力とをはらつて來たので、今や縣下縱横に鐵路の敷設を見、どんな片田舎でも自動車の警笛を聞かぬ所はない。

### 鐵道は

鹿兒島本線。	門	司	鹿兒島	二三八哩	表九州方面
日豊線。	門	司	吉松	二八七哩	裏九州方面
川内線。	八	代	鹿兒島	九五哩	佐敷—水俣間工事中
宮之城線。	宮之城	—	川内町	哩	
山野線。	栗	野	—	山	野
志布志線。	都	城	—	志布志	二五哩 東隅方面
				一九哩	水俣迄延長



と稱せられ、島津家七百年の尙武の歴史を残したのである。或は元寇の國難に於ける島津久經公、或は豊太閤の外征に於ける義弘公、或は日清日露の兩役に於ける皇軍の主力の如き、單なる藩内の活動でなくて實に國家皇室と結びついた忠勇義烈の歴史、一として三州人の活動を見ない場面があらうか。

隨て薩藩の教育は此等の士風をうけて、實に日本のスバルタとも言ふべき特殊の教育が施されて來たのは、決して昨今の事ではない。郷中健兒の舎として今も尙ほ士風を養つて居る。

鹿兒島の三大事事として、曾我兄弟追悼の傘焼き、關ヶ原合戦に奮闘された義弘公の勇氣を偲ぶ妙圓寺詣り、當藩の赤穂でさへ行はれて居ない義士傳輪讀會等、質實剛健、篤厚辭讓の氣風は、華美を旨とし、人情紙の如き今日でも見るべきものがある。

前兵兒の歌

賴山陽

衣至<sub>レ</sub>軒袖至<sub>レ</sub>腕。腰間秋水鐵可<sub>レ</sub>斷。人觸斬<sub>レ</sub>人馬觸斬<sub>レ</sub>馬。十八結<sub>レ</sub>交健兒社。  
北客能來何以酬。彈丸硝藥是膳羞。客猶不<sub>三</sub>屬<sub>一</sub>。好以<sub>三</sub>寶刀<sub>一</sub>加<sub>三</sub>渠頭<sub>一</sub>。

民謡

聞いて恐ろし目で見て怖い、添うて優しい薩摩さん。

本當に鹿兒島に來た誰でもが、こうした感じを持つ事は事實であるらしい、何れもよく本縣氣質を物語つて居る。教育機關としては、

官立學校

第七高等學校造士館。山下町鶴丸城趾、明治三十四年三月創立

文科、理科、修業年限三ヶ年。



九州に於ける大商業都市として、活躍せんとするの氣勢を示すに至つた。縣下内地は勿論、大島、種子島の島々方面に對しての中心市場であるばかりでなく、沖繩諸島とは古から密接な取引が行はれてゐた。貿易港としても開港日尙ほ淺きにかゝはらず、己に一ヶ年一千万圓に達し、年々増加の模様である。出入の船舶も大型となつて行くので、現在の設備は其の要求に應ずる事が困難な爲め、大正十二年度から港内の改修に着手し、三千噸級の船舶四隻同時に横付けし得る設計を以て、目下工事進行中である。昭和七年完成の豫定であるといふ。築港完成の曉に於ける鹿兒島市商業界の繁榮は想像するにかたくない。

### 遊覽案内

◎島津公爵邸 鹿兒島縣から北方へ國道を辿つて進めば十五六町で磯に着く。鬱蒼たる磯山を負ひ、櫻岳（櫻岳）の秀麗を仰いで、白帆夢の如く浮ぶ錦江灣を見晴らす處が島津公爵邸である。

春は櫻雲たなびき、夏は新緑花の如き磯山に擁せられ、碧水に映する白帆の影のどかな

る處、眞に天下の絶勝である。

今を距る二百六十餘年、島津家十九代の祖、光久公が此所に別館を創建して仙巖園と名づけられた。其後寛文年中新一亭を造營されたが、其の落成の日、雙鶴東方から飛んで来て遂に庭上に下り、飲啄して暫くは樓上に止つて去らなかつたといふ。人々皆嘉瑞として喜鶴亭と名づけた。爾來島津家累代の別館となつて居たが、明治四年廢藩置縣の際本邸となし大いに修繕を加へて新に家屋を増築したのである。

◎鶴嶺神社 島津邸についですぐ西側にある。社はもと照國神社の境内にあつたが大正六年に今の場所に移轉されたものである。島津家累代の神靈を祀られたもので、社格は縣社である。

◎尚古集成館 鶴嶺神社の境内にある。これは當主公爵忠重公が齊彬、久光、忠義三公の偉蹟を中心として併せて島津家七百年の事蹟を不巧に傳へる爲めに、名君賢佐の事蹟と、歴代の美風とを顯彰すべき歴史的資料を蒐集して此所に陳列し、公衆の觀覽に供しや



鹿兒島中等學校ボーイスカウト

幕末に於ける藩主の聞えある齊彬公忠義公は、銳意資源の開発と軍備の充實とに努められ

## 鹿兒島市の産業

を發展せしむる爲めに、泰西文化の輸入吸收に營々として日もまた足らぬ有様であつたが、慶應元年忠義公は、新納刑部、五代友厚等を渡英せしめられ、マンチエスターブラッド會社から、紡績機械を購入せられた。機械は翌年鹿兒島に着き、三年、磯に工場を建築し事業に着手した。これが我國に於ける、洋式紡績工業の嚆矢である。

こうして他に先だつて創業はしたものゝ、工業都市として他にほこる迄には至らなかつた。けれども交通機關の發達と共に工業も漸時に多様になつて行く。大日本紡績株式會社鹿兒島工場をはじめ、薩摩興業株式會社、薩摩製絲株式會社、投産社、武鐵工所、肥料會社と煙突の數も日に増加して行く。

中にも織物業と肥料業は年産額何れも二百萬圓に及び、其の前途は頗る有望である。織

物は主として投産社から出来る。薩摩耕と、鹿兒島織物同業組合の六百有餘の工場で織出される大島紬で、肥料は骨粉油粕など、其の主なるものである。

其の外、薩摩燒、錫器は鹿兒島の名産で、竹器は特産の江南竹を利用して盛に製造される。

日本紡績株式會社の鹿兒島工場では、一年間に米綿六千俵、印度綿一万俵を使用し、製品は三幅全巾四千反、天竺木綿九千反で、大阪で加工して内地及支那、朝鮮、南滿洲方面へ輸出する。

製産高一ヶ月九百五十梱 四十番手四百七十四梱 二十六番手四百七十六梱  
機械、紡機、三万二千九百十二錘 撚絲機、八千四百錘ある。

## 港としての鹿兒島

が開港されたのは大正五年である、鹿兒島は古來地形上商業都市としての活動には不利の点が頗る多かつたけれども、時勢の進運に伴ひ、海運陸運、共に其の設備を促して、今や



鹿兒島高等農林學校。上荒田町、明治四十一年創立

農學科、林學科、養蠶科、農藝化學科、農學別科

◎縣立中等學校

第一師範學校 第一中學校

第二中學校

女子師範學校

第一高等女學校

第二高等女學校

商船水產學校

工業學校

◎市立中等學校

鹿兒島商業學校

女子興業學校

◎私立中等學校

三州商業學校

鹿兒島實業學校

博約鐵道學校

夜間中學校

鹿兒島中等學校

鹿兒島裁縫女學校

鶴嶺高等女學校

鹿兒島高等女學校

錦江高等女學校

實踐高等女學校

◎小學校 十校

◎學舍 十六

會文舍(平之町)

集成學舍(加治屋町)

二松學舍(加治屋町)

四方學舍(樋之口町)

協學舍(草牟田町)

自疆學舍(藥師町)

協志學舍(武町)

共和學舍(常盤町)

研明舍(下荒田町)

共研舍(高麗町)

興國學舍(長田町)

弘道學舍(池之上町)

共立學舍(池之上町)

弘友學舍(榮町)

共學舍(市外中郡宇村)

錦城學舍(易居町)

◎少年團

(小年團日本聯盟に加入せるもの) 二

鹿城少年團



うといふ主旨に基いて、残存した舊集成館を修築して、尙古集成館と名づけられたものである。陳列品は非常に多数で一々列記するの暇を得ないが、我薩藩史を語る物が頗る多く教育上多大の参考になる。(昭和二年十一月より市營として譲渡の筈)

舊集成館は今から七十年程前齊彬公が創始せられた武器の製作所で、鑄砲製鐵其の工藝品の製作等のすべて多年の抱負を實現されたものであつた。大正四年に至つて、五十七年間續けられた齊彬公の偉業は遂に廢絶されたが、公は其他にも舊藩時代に於て既に硝子製造法陶磁器、農工刀劍等、製造や、瓦斯燈、電氣燈の創始、地雷の製造までやつて居られたのである。殊に反射爐、熔鑄爐等を設けて製鐵工業を創始され、幕府が我國に始めて長崎に鐵工場を設けたといはれて居る四年前に製鐵事業は創始されて居たのである。

慶應二年の十一月からは忠義公が英國に購入された紡績機械が到着し、集成館に宏大な工場を設けて、我が國最初の洋式紡績工場を創立した。これ實に我が日本工業界に範を示した國家的の大計畫であつたのである。

其の機械の一部は今も無論此所に藏めてある。

◎三記念碑 齊彬公の創始せられた本邦最初の洋式形造船所、反射爐及び忠義公が創建された洋式紡績工場は實に國家的の大計畫であつたので、其の遺蹟を永久に記念するために大正十五年、新たに建てられたものである。

磯海岸、櫻岳に對して美しく建てられた三碑はとはに二公の偉功を物語つて居る。

◎磯の濱 磯の附近は所謂荒磯で、海岸は概ね斷崖絶壁をなして居るが、櫻島の瀬戸が閉塞されぬ以前に潮流が櫻島と鹿兒島の間から入つて瀬戸へ出て居たので、琉球入松の附近を盛に浸蝕して、其の土砂を漸次運搬して、磯の海岸の灣入の場所に堆積して、松が生へ、今の様な砂濱を作つたのである。附近は地形の關係上冬は非常に暖で、夏はまた海風が涼しく袂をはらふので、暑さが凌ぎ易い所から、四季共に市民遊覽の場所となつて居る。したがつて數軒の茶店が軒を並べ名物の兩串餅ぢやんぱで遊人の足を止めて居る。

◎琉球人松 島津邸の南方五町ばかりの所にある。

松は絶壁の上に頭をもたげた怪岩を擁して枝を張つて居る。昔琉球の貢船が入港した時



此の邊に船を浮べて使者の面々が盛に饗應せられた所である。此の松が丁度目標になつて居たといふので、今も尙ほ琉球人松と呼んで居る。

此の附近一帯は「キイレツチトリモチ」を産するので、天然記念物保存法により、採集を禁止する爲め、木標を立ててある植物學上に於ては重要視されて居る。

◎薩英戦争の臺場の跡 鹿兒島驛と磯の中間、驛から六七町も國道を北へ進めば稻荷川が丁度海に注ぐ所、左岸に松が鬱蒼と茂つた所に、明治十年の役の官軍戦没者の靈魂を弔ふ墓地がある。それを取りまはした。堤防に、昔時砲台が築かれてあつた。文久三年の薩英戦争には此の台場が先つさきに砲火をあげせかけられたが、薩軍は巧に應戦したのである。

文久三年七月二日正午、時の藩主忠義公から砲撃の命下り、藩兵は各自持場の台場から一齊に砲撃を開始したので、袴腰台場からの砲弾は敵艦バーサス號に多大の損害を與へ、敵艦は周章狼狽して備鎖を遺して逃れ去つたが、數時の後艦列を整へて再び押し寄せた。此の時祇園の洲の砲台は最も敵弾を蒙り、伍長税所清太之に死し、負傷者六名を出したが、敵の旗艦

ユリアス號は、我が砲弾に其の砲門を破られ、艦長副長共に戦死し、十三名の死者と五十三名の負傷者を出した。中にもレースホース號は祇園の洲の淺瀬に乗り上げて大いに狼狽したけれども我軍の砲門は多く激射に破れて用をなさなかつたので、辛くも敵は満潮に乗じて遁れ去つたのである。

戦後此の砲台から砲痕七十二個所を發見したといふ、如何に激戦であつたかがうかがはれる。

◎祇園の洲 台場の附近で、此の邊を祇園の洲といふのは、此の洲の入口に八坂神社

(祇園社)がある爲である。八坂神社は別に築町にもあつて、毎年七月二十五日神輿が當社に臨幸あつて、神官が道すがら神樂を奏し市坊の男女老弱が前後を圍んで供奉する。社頭に行つて、社祀の式をすませ再び市中をねり歩く市内の商店が主催する商榮講で、商賣繁昌を祈念するお祭り、六月燈と共に市民の心を浮立たせる夏の行事である。

此所は稻荷川の川口にあたりよせてはかへす、男波女波のさざめきに松籟の聲をきき、四季杖を曳く佳人が尠くない。遠く天保山を眺めると丹後の天橋立の様に見える。芝生



に腰を下して錦江灣上の眞帆片帆を見るのもあかぬ眺めだ。夏季は海水浴場として河童連の巢窟となる。

▲落霞紅未斂。海上山如染。平波一碧間。漁火乍千點。 五代五峰

◎浄光明寺 鹿兒島驛から西北へ五六町・城山の連山透進たる高所にある。市街竝に錦江灣を一眸に蒐むる景勝の地である。

藩祖忠久公が宣阿彌といふ人を鎌倉から伴つて來て此所に寺を御建立になつたのが開祖で、五代貞久公まで位牌を此の寺に安置され、信仰が厚かつた。明治二年の廢寺にも此寺だけは其の難を免れたけれども、著しく規模を縮少せられて、其の面影も見られぬ一小寺を残して居るばかりである。



浄光明寺の墓

◎丁丑役戦役者の墓 普通浄光明寺といへば此

の寺よりも、南洲翁以下十年戦役の戦死者の墓があり南洲翁を祀る南洲神社のあるを以て有名である。

高い石の階を上り盡すと、すぐ左に南洲翁の木像がある。これは東京の上野公園にある翁の銅像を作る時に先づ作つて見たもので、銅像が出来上つてから、山形縣庄内の人が戴き度いと申出たのを、當地で貰ひ受けたものである。

そこから正面を奥に進むと南洲翁以下の墓がある。

中央が南洲翁で、

左に 篠原國幹、村田新八、淵邊高照、別府景良、柱久武、河野通政、山倉知周、岩元恒成、山野田一輔

神宮司助左右衛門



左に 桐野利秋、永山盛弘、池上貞固、邊見十郎太、仁禮景通、貴島國彦、高城十次、平野正介、蒲生彦四郎、石塚胤元、松永高美、堀新次、村田三介、田代清武、中島廣厚、等が竝んで居る。

●南洲神社 墓について右手に折れるとすぐそれが南洲神社である。社は元南洲祠堂と言つて居たが、大正十一年六月二十八日から南洲神社となつた。毎年翁の戦死せられた九月二十四日に其の祭典を行ふ。

●教育参考館 南洲神社の傍にある。教育上参考になる南洲翁其他、本縣名士の遺物文書、筆跡、肖像等を陳列して公衆の觀覽に供して居る。

●城 山 南洲翁事志と違ひ七百の麾下を率ゐて故山に歸り、最後の孤壘を守つた比類稀なる英雄!!その末路を偲んで城山を訪ふ者、鬱蒼と茂る幾百年の老樟、梢を渡る松の嵐、無心の小禽に至る迄、昔時の情懷を物語りて低徊去る能はざらしむるものがある。今全山公園として園道が縦横に通じ、春は爛漫の櫻花に十四萬の市民を酔はしめ、夏は新緑花よりも美しく、秋は眞紅の紅葉に夕日のさす姿、冬は櫻岳の雪を眼の前に眺め、四

季折々の風光はあかぬ眺めである。

頂上には大正天皇竝に今上陛下が皇太子にましました時、御登臨遊ばされ、遺跡に記念樹が植ゑられ、外國貴賓の足跡も印されて居る。

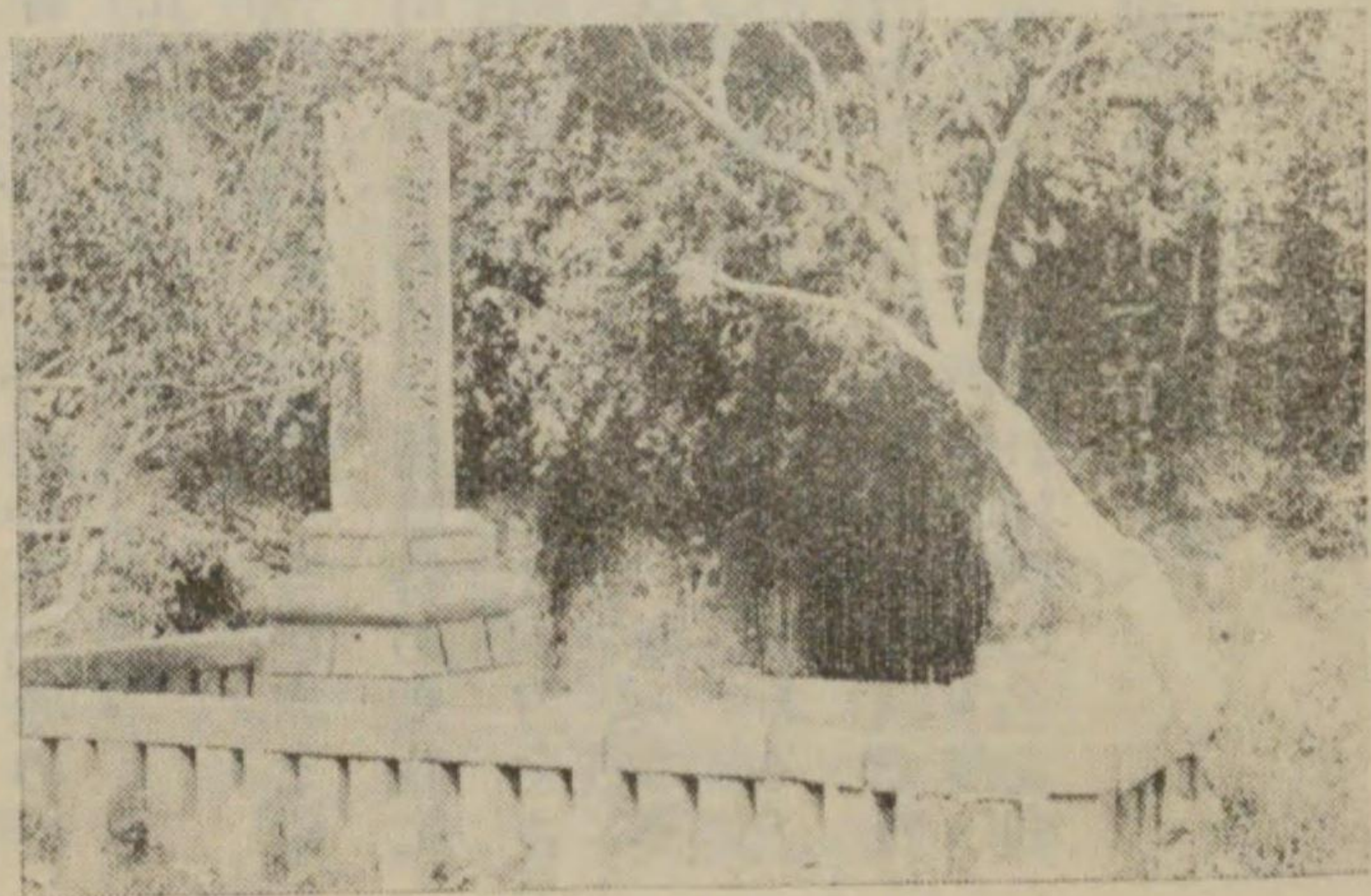
瀟洒な休息所からは鹿兒島市街を一目に瞰下すばかりでなく、南方遙かに大隅薩摩の二大半島の先端を望み雲煙模糊の間に開聞岳の艶姿を望むことが出来る。

(西郷南洲翁傳、鹿兒島縣教育會編纂發行、二十錢)

●岩崎谷の洞窟 城山を後の方へ下ると浸蝕された谷合がある。そこが岩崎谷で、其の麓の洞窟が官軍の背面攻撃に南洲翁の身邊が危くなつた時城山の嶺から下りて其の身を避けられた所である。

曠日の苦戦も遂に事志と違つて、戦破れて孤軍奮闘城山を守られたが、劍折れ彈丸盡き

西郷南洲翁洞窟中記念碑及洞窟

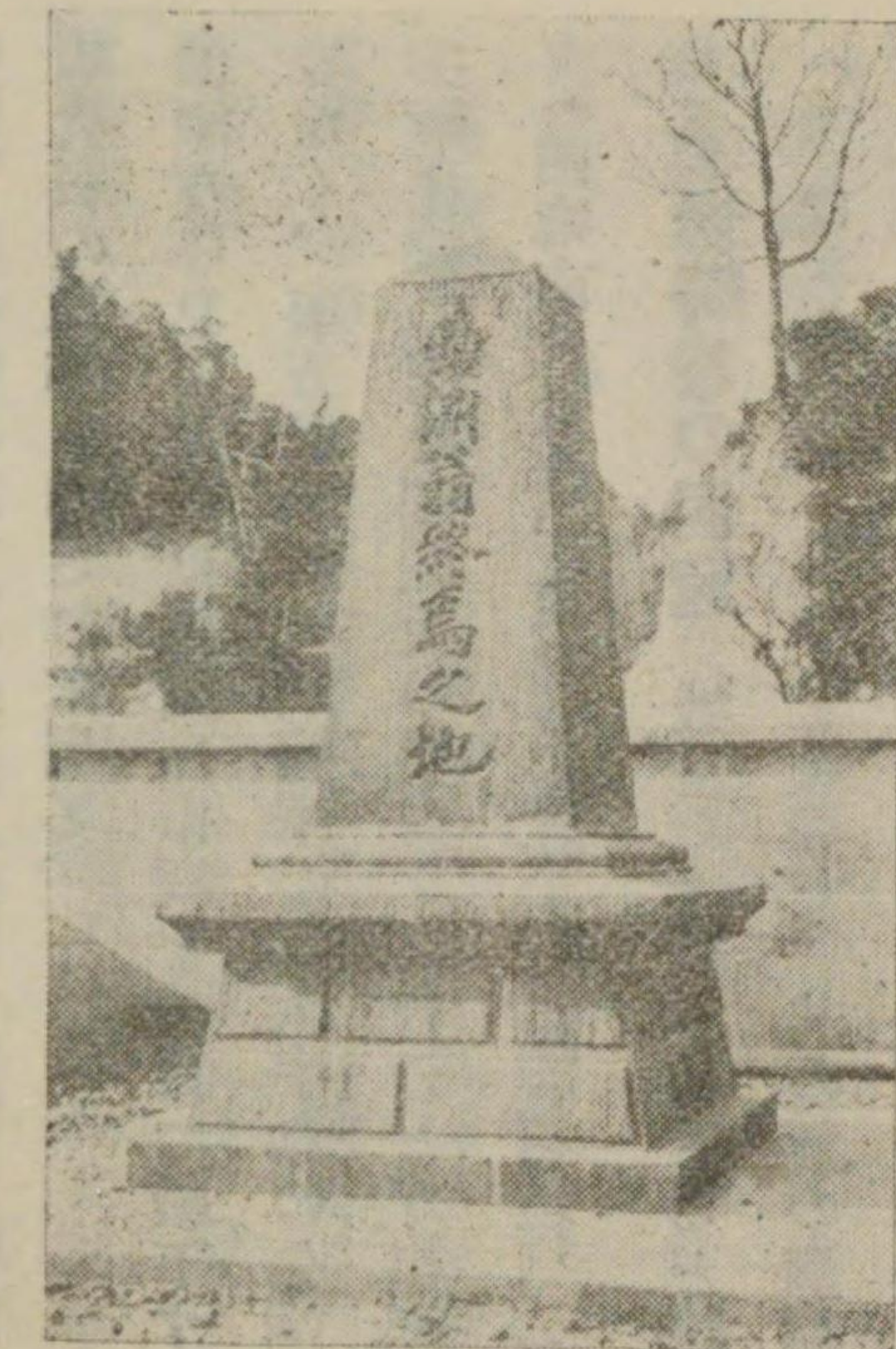




て多くの子弟を失つた翁は、洞窟を出でて數町進まれた時、流弾一閃、遂に翁の腰を貫いて其の場に倒れられた。側に居た別府晋介、涙をふるつて翁の首を刎ね、路わきに埋めさせた。其の場所が今の

◎南州翁終焉之地

で洞窟を距



南州翁終焉之地

はされる英雄の心事を思ふ時、誰か其の末路の哀寂を禁じ得るものがあらうぞ。

△ほんに思へば城山の、

花と散りたる一あらじ。

命短く名はながし、

君もののふのさくら島。

島村抱月

△孤軍奮闘破圍還

一百里程壘壁間

我劔已折我馬斃

秋風埋屍故郷山

作者不明

◎薩摩義士の記念碑

縣立病院と七高造士館との間、城山登山口にある將基の駒の様な記念碑がそれである。寶曆の昔、木曾川治水工事に、君命の重きと工事の中止すべからざるを察して、責任を負ひ、工事を斷行して、幾萬の民の塗炭を救ひ、從容として自刃し果てた總奉行平田正輔以下八十四名の功蹟を永く傳へんとして大正九年十一月に建設されたものである。毎年五月二十五日縣教育會の主催で官民合同の祭典が行はれる。

◎私學校の跡

現在の縣立病院がそれである。

南州翁が維新の元勳として與へられた二千石の賞典祿を抛ちて故山に歸臥しながらも、國家有用の材を養成して有事の場合に備へんとされた翁の私學校は禍福轉倒して遂に十年の戰爭を惹起するの素因を作つたのである。其の石堀に残された無數の彈痕が丁丑役官軍の發した小銃の彈痕で如何に激烈であつたかを偲ばしめる。



丁丑役笑話

官軍の一兵士戦半にして通じを催し、人無き凹地を選んで戦々恟々の用を辨じ終つて、あたりの草をかなぐり尻をふく。其草がイラクサであつたために激烈な疼痛を覚え殆ど身動きが出来なかつた。兵士歎して曰く「薩摩の草はえらい。」

●廳縣々舎 縣立病院のすぐ前、國道に沿ふて巍然と聳ゆる鐵筋コンクリートの大建物こそ百四十餘ヶ町村の中央縣政を掌る新築間のない縣廳々舎である。大正十二年八月十日工を起し、二十六ヶ月を費して大正十四年九月三十日に竣工し、全十月二十七日盛大な落成式が舉行されたのである。

(工事概要)

基礎及骨組は皆鐵筋コンクリートで、小屋組は鐵骨、屋根は瓦葺である。外部の壁は根石と玄關車寄は徳山産の花岡岩を使い、其他の壁及蚊腹等は人造石洗ひ出し塗りである。腰羽目及玄關廣間は大理石を用ひ、主要な室は絨氈敷で他の室内はリノリウム敷

き廊下は人造石研出しである。

工費 一一三三、三三九圓

廳舎建坪 六三九坪二一

全延坪 一五六二坪五六

議事堂建坪 二九〇坪九八

全延坪 四七八坪二七

●照國神社

後方に城山の翠綠を負うて、森嚴な四邊の境域に擁せられた所、島津家二十八代の英主齊彬公の靈を祀る別格官弊社、照國神社である。境内は幽邃閑雅な探勝園に續いて一小公園をなして居る。

大正六年十一月、戊申戰役五十年祭を行はるゝ際に當代忠重公が園内に、齊彬公、久光公、忠義公の銅像を建立されたので、永久に藩主の英明を物語つて居る。文久三年勅命あつて照國の神號を授けられ、權中納言從三位を贈られ、全年五月二十日神像着御あつて、城内大菊の間の假宮に坐まし、全年四月から神殿の造營が始まつて、元治元年甲子十二月に竣工、全月十五日に遷坐せられ、神領百石、島津久光、島津忠義父子から寄附せらる。明治二年十一月二十二日從一位を授けられ、明治三年十二月二十三日、勅使岩倉具視卿下



向せられて、御劍一振を奉納せらる。明治五年明治大帝御巡幸の折金幣を賜ふ。又十年西南役の兵火にかゝり、全十三年二月再び御劍を下納され、全十五年十二月。別格官幣社に列せらる。明治三十三年六月工費七萬五千圓を以て改築に着手し翌年正一位を追贈され四十二年四月社殿工竣え遷宮式あり。縣内市内の主なる年中行事は多く此の社頭に於て催されて居る。



三公の銅像

社殿の直左側

齊彬公

上の段東側

久光公

下の段東南隅

忠義公

### 齊彬公小傳

齊彬公は順聖院様といつて二十八代の太守である。文化六年四月二十八日の誕生父君は齊興公母君は賢章院殿といつて賢い方々であつた。嘉永、安政の國事多端の折に封を嗣ぎ一意専心西洋文化の輸入に力を傾け、人材を養ひ、絶倫の卓見一世を抜き、今尙ほ其の偉風を仰がれて居る。其御事蹟を擧ぐれば、

軍制の改革

電信機の設置

大砲の鑄造

寫眞術の實施

集成館の設立

瓦斯燈の設置

軍艦の製造

硝子製造業

日章旗の制定

理化學工藝

士氣の鼓舞

等殆ど枚擧に暇ない程であつた。文久二年までに鑄造された大砲の數は實に七百九十四門、薩藩の戰鬥力はそれが爲めに非常に偉大であつた。日清日露の兩役に帝國陸海軍の主力が殆ど薩摩にあつたのは、嘗て公が藩士を鼓舞獎勵された結果と言はれやう。惜むべし、安政五年七月十五日、幾多の大抱負を抱きながら御年五十歳在職わづか八年にして御本丸に於て薨せらる。

城山山麓、公の英靈は長へに鹿兒島人士の行末を見守る事であらう。

(島津齊彬公傳 鹿兒島縣教育會編纂發行一部二十五錢)



●興業館

照國神社のすぐ前に嚴かにひかゆる石造の家がそれである。鹿兒島縣の物産陳列所で、縣内の物産をはじめ、他府縣の名産をも参考品として陳列し、公衆の觀覽に供して居る。建物は明治十二年、渡邊縣令が廣く内外の物産を集めて公衆に觀せしめ、縣下工藝の發達を企圖された時、西本願寺の大谷光尊師が此の趣意を賛成して、金壹萬五千圓を寄附せられて出來たものである。主なる陳列品は、

- 薩摩燒 蠶糸類 硝子製品 染物
- 錫器 水産製造物 漆器類 漁船
- 竹器 農産製造物 油類 漁具
- 大島紬 工業用藥品 澱粉 蠟燭
- 薩摩緋 紙類 製茶 罐詰類

●縣立圖書館 興業館のすぐ前に三階の鐵筋コンクリート造で舊來の建物に比べると規模が極めて大きく、設備もまた理想的に出來て居る。

●西本願寺別院

旅館の階上、物見台 或は小高い所のどこからでも、すぐ眼には入

る大建物である。別院は明治九年、假説教所を石燈籠通りに設け、其後吳服町、新地、築町、金生町、東千石町と場所が轉じたが、明治十一年十月、紀州性應寺の本堂を移轉して本堂としたけれども、狹隘のため、明治二十四年工を起して六ヶ年の星霜を経て二十九年工費其の當時で十一萬五千八百八圓八十九錢七厘五毛を費して、今の壯大な大伽藍が出來たのである。

教區は鹿兒島、宮崎、沖繩の三縣にまたがり、百八十余の末寺を有し、一萬三千の門徒を有して居る。西本願寺別院の外尙ほ市内には左の寺々がある。

- 東本願寺別院 眞宗 新町
- 興正寺別院 眞宗 長田町
- 不斷光院 淨土宗 易居町
- 南洲寺 禪宗 南林寺町
- 高野山 眞言宗 長田町
- 日蓮宗教 日蓮宗 松原町
- 王寺別院



大中寺  
曹洞宗  
西千石町  
常樂院  
天台宗  
長田町  
淨光明寺  
時宗  
上龍尾町

◎松原神社 市内で最も繁華な天文館通りの停留所で電車を下りて、南の方へ進めば新しい町が開け、鐵筋コンクリートの電話交換局が巍然と聳へて居る。そのすぐ南隣が、市民に大中様と呼ばれて居る縣社松原神社である。此の場所は元、南林寺の跡であるが、明治初年廢寺の後は、島津家十五代の英主、貴久公の靈を祀り、松原神社と稱したのである。貴久公は三州麻の如く亂れて、島津家の基礎も動もすれば揺がうといふ時代に、伊作家の島津氏からはいつて藩主となり、父日新公が幼主を輔佐されたので、萬難を排して三州の風雲を一掃して、徳政を行ひ、島津家中興の業を樹てた稀世の英主である。照國神社と共に市民尊崇の的である。

◎新市街 松原神社から以南は、以前は南林寺の墓と稱して、随分廣い墓地であつたが、市の發展と共に、地勢上どうしても南方へ擴張せねばならぬ位置にあるので、大正

二年、縣令を以て埋葬を禁止し、大正八年、同墓地を廢止して新市街を計畫し、日一日と市街を形成して行くのである。

町名も南林寺町と命名された。松原神社の境内から、南方へ擴張して此所に公園を營み、運動場を設けて市民娛樂の場所として居る。

### 由緒墓

南林寺の墓は随分古くから鹿兒島市の墓地として幾千の靈魂を安んじて來た所だけに、月照上人をはじめ、賢士、碩儒、文人墨客、武術家などの名士が埋葬されてあるものが多かつたが、中には子孫の存在不明のものがあつて改葬の出來ないものが多かつたので縣では其等人人の靈魂を慰撫する爲めに、その祭祀者のないもの、又は希望ある者を收めて現在の南洲寺の前に改葬する事とした。墓數すべて四十三、人數四十五人分（親子合葬二組）今其の名をあぐれば

### ◎月照上人の墓

（南林寺町 南洲寺境内に在り）



相約投淵無後先。 豈圖波上再生緣。 回頭十有餘年夢。  
空隔幽明哭墓前。

西郷南洲

明治五年南洲翁が故山に歸つた時、追懷感慨の情を賦した詩である。上人は京都清水寺の住職であつたが、勤王の壮志を抱いて夙に南洲翁等の志士と結び、安政の大獄起るや身を以て逃れ苦心の果て入薩して南洲翁に倚つたが幕府の追捕は極めて急なので行くに所なく遂に相約して安政五年十一月十六日南洲翁と抱擁して三舟崎の沖合に投じた。行年四十六歳。墓碑の前に「靜溪院鏤水清月比兵」と彫つてある。(詳細別記)

赤塚源六眞成

揖宿五左右衛門永健

入佐助八兼友

伊地知愛四郎季壽

岩下半之助道英

小倉喜藤太知常

柏木源藤

川崎大乘坊祐中

清水源左右衛門盛之

贈從四位月照

兒玉梅庵利貞

兒玉庄右衛門利容

後醍院彦次郎眞柱

河野淨介通鑑

迫田太次右衛門利濟

末川久救

東郷長左衛門重尙

東郷四郎左衛門重張

東郷愛之進實古

二階堂右八郎行信

橋口杏菴兼喬

贈從四位橋口傳藏

橋口與助兼之

平田大監物宗乘

平瀬治右衛門武明

久永龍助貞昌

贈從五位戸次彦之助

宮原主水正正清

宮原清右衛門正近

宮下文蟻

森元高見貞與

森元高見貞謙

森元宗節

贈從四位森山新藏

贈從四位森山永治

藥丸刑部左衛門兼陳

藥丸刑部左衛門兼福

山元傳藏正誼

贈從五位山口直秀

山之内次郎重虎

藥丸半左衛門兼義

山田翠享

吉田大藏清盛

◎西郷隆盛翁誕生地

柿本寺停留所で電車を下りて南へ四町、甲突川の左岸に石堀

をめぐらした圓壇の上に立てられた石碑がそれである。

明治維新の鴻業を賛襄し、永世不滅の偉功を奏した絶世の英雄西郷隆盛翁誕生の地を、永遠に傳へんために立てられたものである。



碑文

西郷君以文政十年丁亥十二月七日生於鹿兒島城下加治屋町此處即君之宅趾也我輩與君同鄉里得其風采德音於見聞之際景仰欽慕不能自止恐歲月之久遺蹟或湮滅於是相謀建一碑以傳永遠庶幾後之生長此鄉者有所感發興起焉。

明治二十二年三月二十日建

◎大久保利通公誕生地

西郷隆盛翁誕生地から二町程甲突川を溯るとやつぱり左岸に石堀を廻らして圓壇の上に立てられてある。同じく明治維新の鴻業を賛襄し永世不滅の偉功を奏した大久保利通公誕生の地を永遠に傳へんとする爲めに立てられたものである。碑文は西郷隆盛翁に同じ。

◎乃木靜子夫人誕生地

西郷大久保二公の碑から甲突川に沿うて下ると武之橋があ

る。其の北の袂、新屋敷停留所から東南二町程、小路を奥に入るとそこに記念碑と銅像が建立してある。

▲いであまして歸ります日となしと聞く今日の御幸に逢ふぞ悲しき

と一首の辭世を残して大正元年九月十三日、明治天皇の御大葬に際して夫乃木將軍と共に雄々しい殉死をとげられた。日本婦人の龜鑑として、將烈婦の典型として乃木靜子夫人の節操を永く後世に傳へんものと、時の實業家村野山人翁が、其の私費百萬圓を投じて乃木神社及、此の夫人の誕生地に銅像を建立し、記念碑を立てられたのである。因に村野山人翁は鹿兒島の生れである。

乃木靜子夫人小傳

安政六年十一月二十七日、新屋敷町湯地家の第七番目に生る。

幼名をお七と呼び幼少の頃から雄々しい性質で兄弟の仲も至つて睦まじかつた。十三才の時、長兄定基氏が米國から歸國され、湯地家の人々は東京に引越された。二十一才の時、第一師團の聯隊長乃木中佐に嫁せらる。幼少時代からの父の教育と乃木將軍の感化



とにより、淑徳一世に殉で、良妻賢母として將軍を内助され、慈母として二子の教育を全うせられた。

質素を旨として慈惠の事業は率先して行はれた。日露戦争後、新宿御苑で黒木綿の紋付を着て竝居る貴婦人達をアツと言はせられた事など人のよく知る處である。大正元年九月十三日、五十四才を一期として従容夫と行動を共にされたのである。

◎玉里邸 伊敷行の電車に乗ると、甲突川を溯つて玉里の停留所に着く。此所から北へ四町、老松の緑に擁せられた幽邃な邸が見える。

天保六年、島津齊興公が西武田村に本松の別館から此所に移られ、玉里邸と命名されたのである。齊彬公が封を襲がれるに及んで、齊興公は此の邸に隱栖された。其の後齊興公が薨ぜられ、邸は家職のみで管理されて居たが、明治十年、丁丑役に兵火の厄に逢ひ、二の丸にあつた久光公の邸も同じく兵火を被つたので、久光公は此の邸を再築せられて、移居された。明治二十年十二月、久光公薨ぜられ、忠濟公が襲爵されたが、忠濟公は東京に移られたので、今では當代忠承公の別邸となつて居る。

前は廣々として眺望開け、後は城山の續きで愛宕山の峻を背ひ庭園はまた泉水木石の趣面白く、前方の眺望と背後の山と相まつて一層の風致を増して居る、殊に梅樹が多くて此の期節には一入の趣がある。

◎歩兵第三十六旅團と第四十五聯隊 玉里邸の西は廣々とした練兵場で其の西つゞきに歩兵第三十六旅團司令部と四十五聯隊とがある、四十五聯隊は明治三十一年三月二十四日宮中に於て、軍旗を拜受したので、此の日が軍旗祭日となつて居る。爾來此の光輝ある軍旗は幾多の實戦に大演習に守備に、常に奮闘して將卒の士氣を擧げ戦績を收めたのである。現今残つた竿頭の菊の御紋章と旗の緑の總とは燦として其の勳功を物語つて居る。

◎桂菴禪師の墓 伊敷の電車終点から北へ七八町の所にある。

禪師は周防國山口の人で、文明十年島津忠昌の聘に應じて鹿兒島に客遊し、島津氏の爲めに書を講じ三十年一日の如く、薩南文教の基礎を開かれた功績は寔に百世に傳ふべきものがある。



茅屋を背後にして石を繞らした中に苔蒸した石碑が立てゝある。此の場所は梅が淵と呼んで禪師が老を養ひし東歸庵の遺蹟であるといふ。

### 桂菴小傳

桂菴禪師は應永三十四年(紀元千八十七年)周防國山口に生れた。年九歳にして出家し、南禪寺の雙桂院に入つて古今の書を學誦し、精究常に怠らなかつた。

應仁元年四十九歳にして後土御門天皇の勅命を奉じて明國に渡り、諸儒を訪ふて程朱の新義を學び居る事七年にして文明五年、歸朝したけれども京都は尙ほ兵亂定まらずして入る事が出来なかつたので、肥後の菊地氏によつて居たが藩主島津忠昌、桂菴の儒學あるを聞いて之を聘し後桂樹院を建て、住持とならしめた。桂菴は程朱の説を傳へて儒名天下に鳴る。次で國老伊地知重貞と謀つて大學章句を刊行された。是れが我國に於ける朱子新註刊行の嚆矢である。

文龜二年伊敷村に茅庵を創し東歸庵と稱して爰に隱棲し尙ほ講學を怠らなかつた。永正五年六月十五日、齡八十二歳を以て桂樹院に入寂された。詩集一卷あり鳥陰雜著といふ。

よ。

### 鳥陰遺藁

桂菴

一二三山千萬峯

浮空積翠暮光濃

鳥陰絕景情誰畫

浦々烟枯船入松

### 和發鹿兒島之詩<sup>上</sup>

重陽菊後快晴天

數簇人家一抹煙

吟友相携此行好

江上何景不詩篇

(鳥陰集より)

國道は甲突川に沿ひて止り聯隊のある所から約一里河頭温泉(冷泉)を過ぎて更に約一里行くと鹿兒島電氣會社の發電所のある小山田に着く、小山田から縣道は分岐して郡山村をすぎ薩摩郡入來村に行く。郡山村には丹後局の墓並びに花尾神社があり丹後局を祀つてある。



◎武の岡 市の西方城山と相對して城山より高い百米内外の丘陵で眺望絶佳なる所で昭和二年の春武岡公園として施設した。其續きなる桃岡には近世歌人の泰斗、八田知紀翁の閑居の跡があり、常盤町の誕生地と共に記念碑を建てられてある。山谷翁の碑書並に故加治木翁の筆による宮内大臣渡邊千秋氏の碑文が、歌聖の文勳を物語つて居る。

〔八田知紀翁小傳〕

寛政十一年九月十五日、市内常盤町に生れ、幼にして皇道の衰微を慨き、文政八年二十七才にして上京された。香川景樹の門人となつて歌道を修められたが、其の才藻は忽ち現はれて、數多の門人中抜群の譽を得る様になつた。名所古蹟を探りて、自分の意の行くまゝに歌を詠じて居られたけれども、單なる花鳥風月を友とする歌人ではなしに常に古道の不振を慨き桃岡雜記を著して天覽に供せられた事もあつた。晩年學徳一世に高く文部、宮内の二省に仕へ、歌道御用掛を命ぜられ、明治六年九月二日、七十五才を一期として東京で亡くなられた。眞に我縣に於ける歌壇のほこりである。

翁の詠歌中よく人口に膾炙するものは、

▲吉野山霞の奥は知らねども

見ゆる限りは櫻なりけり。

▲いくそ度かき濁しても

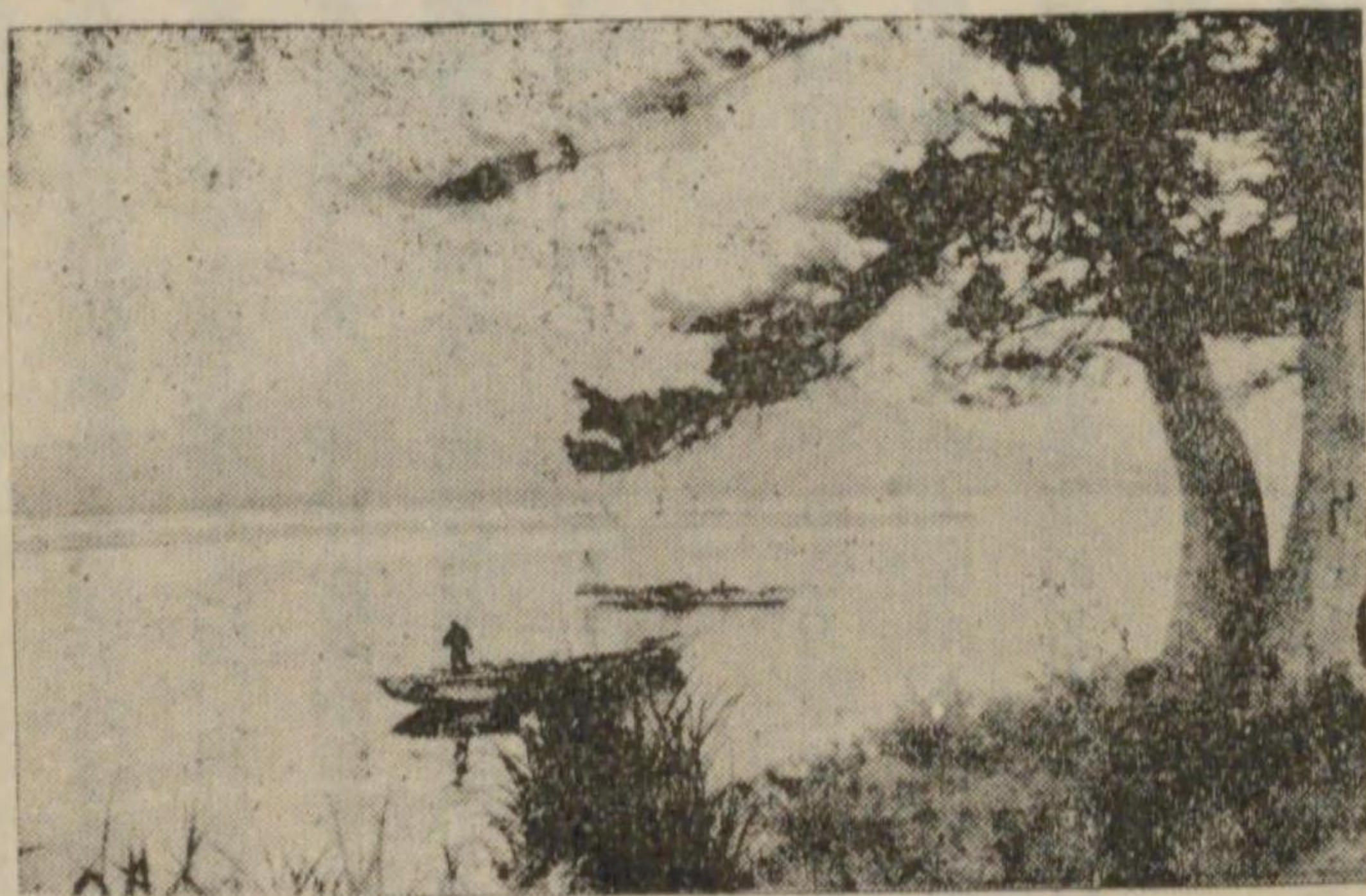
澄み返る水や御國の姿なるらん。

武岡の麓に西郷南洲翁が武の吉と稱して居住せられた宅趾がある。

◎天保山

武の橋電車停留所から甲突川右岸に沿ふて四五町下ればすぐそこである陸軍の演習地として、市民の遊覧地として、夏季の海水浴場として、春秋の運動場として市の一名勝地である。見た事のない人には小高い山としか思はれないが、此所は甲突川の

天保山甲突川





川床が上つて毎年氾濫する所から、天保の末年甲突川の浚渫をなし、此の川砂を以て潟を埋め、堤防を築いて出来たのが天保山である。當時植ゑた松は甲突川の岸と、海水浴場の附近に残存して居る。十數町歩の廣い芝生で、往昔齊彬公は此所を練兵場として、外國式の練兵をされ、海岸に近く砲臺を築いて防備に供して置かれたのである。はからずも文久三年英艦來寇に際して、應戰の第一發を放つた所で其の臺場の跡は今も尙ほ存じて居る。白砂青松の曲浦がつゞいて、松の嵐、しのび寄る波のさゝやきに和していつ見てもあかね眺である。

◎鴨池遊園地 鹿兒島市近郊唯一の清遊地で、鹿兒島電鐵會社の經營である。春秋とも鹿兒島縣聯合産馬會の競馬があり、秋は鹿兒島新聞社主催のオリンピック大會があつて青小年の血を湧かしめる。野球、庭球、蹴球、納涼花見大會と數萬の市民を集める場合の行事は大抵此所で行はれる。

入口に近く動物園も設けられ、南洋熱帯地方から、北方寒帯に至るまで各種類の動物を網羅してある。子供達の爲には電氣乘馬館、子供汽車、子供ボートも設備されてあるので晴れた日曜など、家族携帶で渚に沿うて白砂を踏むもよからうし、茶店に憩うて颯々の松籟濤聲に涼を納るゝもよからうし、五錢を投じて乗馬館子供汽車に愛兒の笑顔を樂み、珍禽異獸の滑稽な動作に腹をかゝゆるもまた一興。鹿兒島驛からは電車五區。

此所は市に續いた中郡宇村の區域になつて居る。山手の方唐湊温泉(冷泉)に近く私立の錦江高等女學校があり、郡元の海岸近く日本紡績會社の鹿兒島分工場や、赤十字社支部に屬する海濱院がある。

## 商店案内

山形屋呉服店 市の中央、櫻岳の雄姿と相對峙して巍然と天空を摩する宏壯美麗な五層樓こそは、神戸以西第一と稱せられる山形屋である。大店舗一ぱいに飾られた燈數一千五百、三萬燭光燦として煌き、其の嚴かな外觀に比して數千の華客を吞吐して居る。

鹿兒島市では有名な老舗で創始は今を去る百六十年前、鹿兒島は嚴重な鎖國の時代にあつて幼稚な商法の中に營業を續けて來たものだそらな。現在の建築は大正五年に竣工し、



大正六年六月、開祖から四代を経て資本金百万圓の株式會社に改め、大正十二年九月資本金を二百萬圓に増額したのである。

建築は全部鐵骨に鐵筋コンクリートを建て設備萬端遺憾のない建築である。

一番から十三番迄の賣場があつて、デパートメントストアだけに各種類の商品を網羅し洋品反物から焼物硝子製品竹器履物菓子玩具何でも一個所で買ふ事が出来る。

商品は全部確實な正札付であるが、これは同店明治二十七年來の習慣であるといふ。

●明治屋呉服店 市内で繁華な石燈籠の大通りの一角にある。現在の建物は明治四十五年に竣工し、既に十數年を経過したものである。同店は九州に於て最も早くデパートメントストアをはじめて時人の眼を驚かしたものであつた。山形屋と並んで商品の確實と低廉とを以て顧客に酬めて居る。

### 鹿兒島八景

(詩歌)

●南林寺晚鐘 かねの音も波にそ響く暮れ深きこの山寺は海近くじて

(日野正三位中納言輝光卿)

●洲崎落雁 無限長洲眼界寛。青松聳碧映波瀾。數萬雁々落來處。恰做天書雲篆看。

(相國寺前龍山天啓和尚)

●開聞暮雪 山いく重かさなる上にあらはれて夕べさやけき峰の白雪

(東園從三位中納言基長卿)

●南浦歸帆 茅屋成村南浦磯。沈烟浪片帆飛。漁翁亦是知其止。釣得遠山佳景歸。

(前等持觀溪堂承頤)

●櫻島秋月 秋毎の光りを花と月やすむ島は櫻の名にたてれども

(樋口從三位康照朝臣)

●大磯夕照 江山鐘愛大磯浦。映帶殘江勝畫圖。若使蘇仙人爰地。賞心須是換西海。

(即宗院龍品西堂)

●田之浦雨夜 打ちよする磯邊の波も靜にて夕へさひしき田の浦の雨

(失名)



◎多賀晴嵐

雲散晴嵐明萬波。日光相映海山阿。宮前滿目好風景。不盡家珍雅興名。

(卽宗院龍楚西堂)

◎谷山電車と谷山附近

鹿兒島電氣軌道株式會社の經營で、武の橋から谷山まで四哩である。其の間を、武之橋―騎射場―郡元―二軒茶屋―脇田―上汐屋―谷山と六區に區分して居る。武之橋から鴨池遊園地までは複線になつて居るが、それ以南は單線である。鴨池を過ぐるとやがて海岸に沿うて走る。蜿蜒とつゞく白砂青松の間に見え隠れする錦江灣の眞帆片帆も氣持い、眺めであるが、二軒茶屋、脇田の停留所の附近から、海岸に出ると、天保山、鴨池の海岸から續く曲浦に白砂が長々と續いて、ノタリノと打ち寄する小波もあかぬ眺めである。武の橋から三〇分内外で電車は谷山の終点に着く。

◎波の平

鴨池の遊園地を半里位谷山の方へ向つて進むと上鹽屋の部落に着く、こゝから二町程西方に丘陵が見える、松の緑が丘陵一帯を包んで朝日夕日に輝く錦江灣を一

眸に納めてさながら繪を見る様な所である。名刀波の平は天正元年大和國の住人橋口正國が此地に居住し代々刀匠を營んで鍛へたものである。正國後に行安と改む今日に至る迄一千餘年子孫代々業をついで名刀を鍛へて居る。彼の有名な三條小鍛冶宗近も正國に師事して練法の奥義を得て歸洛したと傳へられて居る。近代に於ても名匠の聞へまり、安政年間孝明天皇の勅を奉じ國主より献す此時大和介に任ず、上古行安上洛の際海上暴風に遇ひ佩刀を海に投じて風治まる因て時人行安居住の地を波平と名く。丘陵の東裾の老樹の木蔭に苔蒸す井戸が千古の靈泉を湛へて居る、この靈泉こそ名刀波の平を作る爲にのみ使用されたものだといふ。

▲劍打つ波の平より海見ればとぎすましたる色にこそあれ。

八田知紀

◎慈眼寺

谷山の終点で電車を下りて約半里、廣々とした田甫道を進むとそこである。切り立てた様な岩、折り重つた石を背にして冷い清水がポトリポトリと落ちて夏の山水もすがすがしいが、秋の紅葉はまた格別である。高尾から移植して泉水のほとり、巖の上稚樹老樹一枝交へて、四方からの觀客が賑ふ。



最近谷山町で少からぬ經費を投じ公園的設備をした。近く電車も此所近まで延長計画中である。

▲山水に散りて流れぬ紅葉ばは、しがらみかくる橋の上かな。

久光公

▲はし姫の瀧の白糸くりかけて、紅葉の錦波や織りけん。

諏訪兼利

◎御所が原 谷山の終点から伊作に通ずる縣道を西へ進むと凡そ二十町、

此所は後醍醐天皇第十六の皇子にまします征西將軍懷良親王が九州征討の爲め暫時の御所として定め給ふた居城の遺趾である。

建武の中興の御親政も尊氏の叛逆に破れて、天皇比叡山に遷幸されましたが、官軍の形勢日々に非なるを見て、皇子を諸道に遣し給ふの策を講ぜられ懷良親王は鎮西征討に従はせ給ふたのである。

延元二年綸旨を奉じて鎮西に向はせられ、四國に止る事三年にして興國三年五月一日山川港に御上陸になり、無二の忠臣谷山五郎入道隆信が早速馳せ參じ、親王を其の居城に迎へ奉つ

たが、つづいて各地に割據する豪族が官方に降つて官軍は大いに振ふ。中にも高山の城主肝付兼重、其子の義隆は三州に於ける無二の官方で、北朝に與した軍をなやます事が度々であった。

正平二年十一月、薩隅の地も憂ふるに足らずとして懷良親王は山川港を出帆して肥後の國へ御發向になつたが、其の間六ヶ年此の地にましましたのである。けれども星霜幾百年、其御遺蹟も草木の埋むる所となつて世人の頭を去つて居たが、大正十二年一月二十六日此の場所に記念碑を建立して親王の御威徳を長へに仰ぎ奉る事にしたのである。

現今谷山町で谷山神社建設計畫中である。

### ◎七ツが島

終点から南へ三十町、渚を去る程遠からぬ海中に、遠きは二町近きは半町置きに大小七個の大巖が点々と置かれて、枝ぶり面白い翠松をいたゞいたものあり、黒ずんだ肌を露はして居るものもある。干潮には歩いて渉る事が出来るが、満潮には舟か、泳ぐかでなければ行けない。

▲千早振神やとりけん七子の其石なごの成れる島はも

八田 知紀



註曰く、方俗に石ナゴ取の事を七つ子と云ふに因り戯れて云へるなり。

## 櫻島遊覽

▲我胸の燃ゆる思にくらぶれば煙は薄し櫻島山 平野國臣

「天に沖する様な大火柱を吐いて麗城市民を戦慄せしめた。」と聞いたら「あの優しい櫻島が」と何人も驚くであらう。

實際錦江灣の築山の様で、海拔千百三十八米、麗城山水の生命である。市の風景はこれがあるがために山海の絶勝を作る。市民はこれが爲に美味しい水菓子を四季とりどりに賞することが出来る。

登山熱が高潮されて、日に登山者を増して、學校生徒、青少年の團體、多い時には千人以上も登る日がある。裾野は十分に利用せられ、島民は市を相手に野菜果物を供給して生計を立てて居る。

枇杷、桃、梨、瓜、西瓜、柿、ムベ、蜜柑の果物類から、わらび、蒨、南瓜、甘藷、砂

糖きび、大根の野菜類 特に蜜柑と大根とは、島蜜柑、島大根しまでこんの名を以て知られて居る。

第二棧橋に行けば、遊覧客の爲めに發動船があり、和船があり、モーターボートがあつて、随時に發着がある島には鶴鳴館の出張所があり、他に旅館の設備もある。

登山するのには、武に上陸するのが最も便利である。登山口から頂上まで迷路は殆どなく、案内者なしでも安心して登れる。

櫻島は大正三年の噴火に瀬戸の海峡が接続してしまつたが周圍が約十里東西二ヶ村に分れ古里其他に温泉も湧出する。

(櫻島噴火略記) 傳説によれば、今を去る一千二百餘年前、和銅元年に一夜にして海

中より噴出したとある。其の後三十回を重ね、一回毎に高さを増して現在の高さにしたといふ事である。

文明八年九月と、安永八年十月と、大正三年一月十二日とが重なもので中にも大正三年一月は市民の殆ど全部が恐ろしい体験を持つて居る一月十日頃から、何回も地震を感じ、十一日には一時間數回午後になつて益々頻繁に震動するので、市民は如何なる變事が

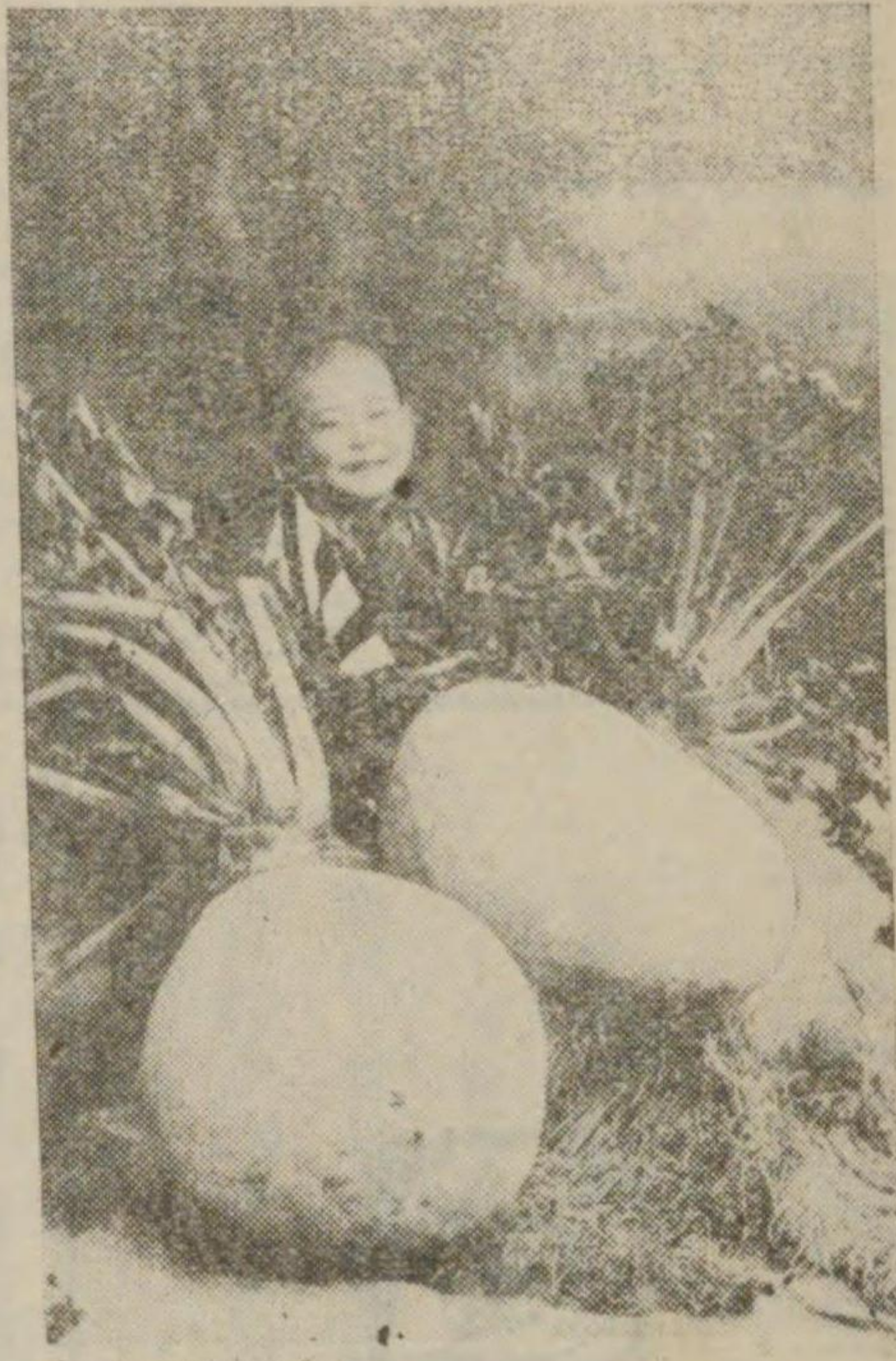


來るだらうと人心恟々で一夜を明かしたが、十二日朝からいよ／＼頻繁の度をまし午前  
十時五分。俄然!!一大音響と共に黒煙叢り出でて見る見る天に沖す。鳴動百雷の如く轟  
き地は絶間なく震動して大浪にゆらるゝ様で市民は殆ど生きた心地はなかつた。

海嘯、毒瓦斯、降石、流言區々で避難する者は國道を西へ西へと、先を争ひ流石に廣き  
國道筋も人で埋まる程であつた。夕刻、午后の六時、一大強震は石塀を崩し家を倒し地  
を割いて市民はいよ／＼恐惶したが、明けて十三日、噴煙、降灰、爆震毫も止まず、十  
三日夜、一大火柱が天に沖して其の物凄さは言語に盡されなかつた。

地震に逃げ、噴火に逃げ、流言に逃げ、火柱を見て走る。市中はひつそりとして所々に  
屯在する軍人と警官との外には人影はなかつた。

噴煙は二万尺の高さにあがり、遠くカムチャツカ迄降灰を見たといふ事である。流れ出  
づる熔岩は全島の百分の二十二の面積を占め、島内最も繁華であつた横山は全滅に歸  
し、元の渚から海中半里の遠き迄陸地を作つた、東の方面も殆ど同時に噴出し瀬戸の海  
峽は全く閉塞されて今では半島となつて居る。



十四日、十五日、大した變化はなかつたが、地震博士大森房吉氏の來鹿  
あつて、「危険なし」の一語に市民  
大 やうやく其の堵に安んじ、避難者も  
追々と歸宅を見る様になつた。

根 損害は實に莫大なもので、櫻島は東  
西を合せて熔岩と火災とで全滅に歸  
した大字が九ツ、鹿兒島市をはじめ  
垂水、牛根、百引、市成等の隣接村に甚だしい損害を與へたのである。此等罹災民は國  
庫よりの補助と江湖慈善家の同情により、各地に移住し特別なる保護を受けて各々生業  
につくを得たけれども、實に未曾有の天災であつた。

古に誰か言ひけん櫻島筑紫の海に富士を浮して。

細川 幽 齊



名に高き富士の根よりは低けれど下には立たぬ櫻島山。  
 月雲の見る眼のみかは櫻島波の花咲く夕べあけぼの。  
 夏ながら時雨て見ゆる櫻島波のぬれ衣着てやほすらん。  
 春にこそ櫻島さは言ひつらめ時雨る、今日は紅葉ならまし。

阿久根成磨  
 冷泉爲村  
 西行法師  
 島津龍伯

萬頃蒼波白島濱、中流向島一由旬、櫻窓隱座回頭見、宛是廬山面目眞

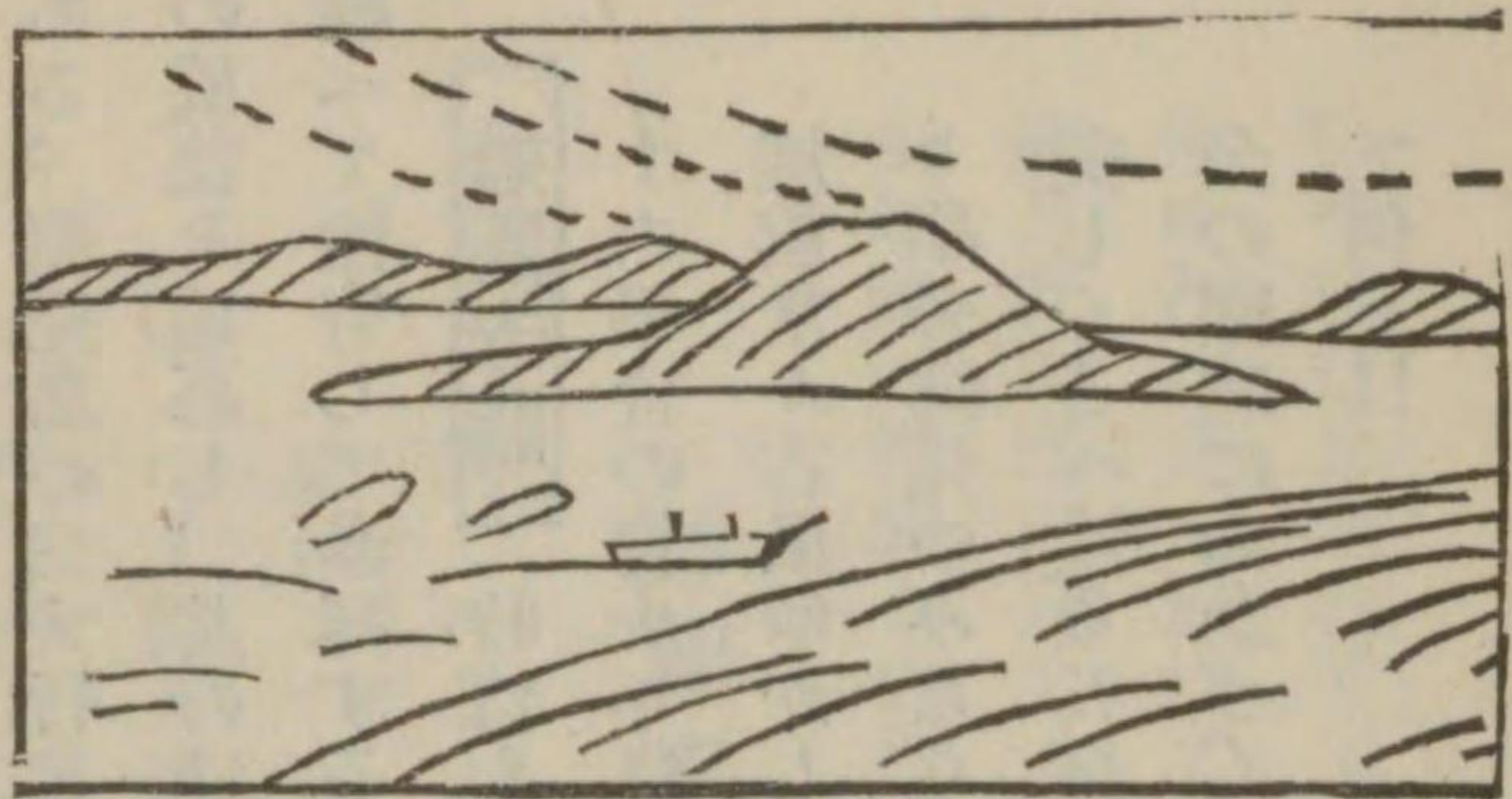
望向島賦詩  
 釋桂庵



## 二、鹿兒島本線附近

鹿兒島—西鹿兒島—饅頭石伊集院—東市來—湯之元—西市來—串木野—木場茶屋—久之城—川内町—上川内—草道—西方—牛之濱—阿隈根—折口—野田郷—高尾野—武元—出水—米之津

鹿兒島驛か西鹿兒島驛かで鹿兒島本線に乗込むと汽車は浸蝕された谷合を走つて三十分と経たぬ内に上伊集院村の饅頭石驛に着く驛から東方へ新道を上つて行く、左に折れて細い道を上ると左手に松林があるが、其の松林の中に饅頭の形をした石があるこゝから十數分で汽車は伊集院驛に着く。



## 伊集院町

伊集院町は日置郡の中心で元郡役所の所在地であつた。縣立中學校警察署等がある。



◎徳重神社 伊集院驛のすぐ左手こんもりと茂つた老樹の間に隠見する朱欄がそれである、もと法智山妙圓寺と稱して禪刹のあつた所であるが後、島津義弘公が命じて提菩寺とされた明治二年廢寺に逢ひ、公の神靈を奉祀して徳重神社として闔村の總廟としたのである。鹿兒島の三大行事の一として舊曆九月十四日、關ヶ原の戦に於て奮戦された義弘公の威徳を追慕し、其の武勇を偲ぶ爲めに前夜鹿兒島市内、健兒の舎生が堅甲を鎧ひ大刀を横へて徹宵して參拜する妙圓寺詣は即ち此の御社である。

妙圓寺詣

時恰も晩秋、舊曆九月の十四日、黄昏の風寒く身に浸む頃、鹿兒島市内十六學舎の青少年は甲冑の扮装に家傳の太刀をはき、少年は陣羽織に烏帽子の裝束で旌旗堂々古風ゆかしき、隊位を整へ、軍歌の聲勇ましく、伊集院さして出發する。獨り學舎健兒のみならず、市内十校の小學校兒童をはじめ、中等學校の生徒全部、月の美しくさへ渡る五里の竝木道を、殆ど不眠不休、困苦を忍び缺乏に耐へて參拜する。公の靈前にぬかづく時、響き渡る太鼓の音笛の音、青少年の胸に浸み渡るものは果して何ぞ!!

嗚呼義弘公逝いて三百年、其の絶倫なる忠勇義烈の暖き血潮は今尙ほ青少年健兒の四体にみなぎり渡つて居るのである。參拜を了へた健兒は直ちに歸途につく。満月既に西に落ちんとして、東の空ほのくくと白む頃歸り着くのである。鹿兒島の青少年達の精神と肉体とはこうして鍛鍊されて居るのである。

妙圓寺詣の歌

(池上蕉月作)

- 一、明くれどとざす雲くらく  
薄すすきかるかやそよがせて  
萬馬いなく聲高し
- 二、つゝ雷と轟けば  
劍光たらいなづま電とひらめきつ  
今や開けぬ關ヶ原
- 三、石田頻りにうながせど  
更てつカフに動かぬ島津勢  
鐵甲かたくよろふなり
- 四、名だたる敵の井伊、本田  
霧にまぎれてよせくるや



わが昌巖等まちふせて

五、東軍威望の恃みあり

二十餘萬の總勢の

六、戦今や酣の

松尾山をば駈け下り

七、前に後に支へ兼ね

精銳一千我れひとり

八、け立て、駒の行く所

西軍ためにきほひきて

九、家康いたく荒れ立ちて

關東勢をうちこぞり

一〇、かゝれ進めと維新公

勇む隼人の切先の

縦横無盡にかけ散す

西軍恩義によりて立つ

勝敗何れに決せんや

折りしもしこの小早川

刃かへすぞ恨めしき

大勢すでにくづるれど

猛虎ふぐうの威を振ふ

ふみしだかれぬ草もなく

なびくや敵の旗の色

自ら雌雄を決せんと

雲霞の如く攻めかくる

耳をつんざく雄たけびに

水もたまらぬ鋭さよ

一一、拂へば又も寄せ來り

剛は鬼神を挫けども

一二、運命何れ生か死か

ふんちん敵の中堅に

一三、譜代恩顧の將卒ら

鎧を削る鬨の聲

一四、篠を束ねて降る雨に

風猩く吹き巻きて

一五、なげど仆せど敵兵の

たばしる矢玉音すごく

一六、骸も染みて猖々緋

見るや敵兵且つ勇み

一七、賜ひし御旗振りかざし

よすれば又も切りまくり

我のくわせいを如何にせん

ここを先途とむち振ひ

活路を求めてかけこます

國家の存亡此の時と

天に轟き地に震ふ

横たふ屍、湧く血潮

修羅の巷の夫れなれや

重なり來る烏頭坂

危機は刻々迫るなり

御楯となりし豊久を

群りよする足早し

阿多長壽院かけ入りて



兵庫入道最後ぞと

一八 欺かれたる悔しさに

蠻並べて追ひ來しが

一九、牧田川沿ひ一筋に

駒の峠の夜にまぎれ

二〇、猷策遂に入れられず

始めて不覺とらしたる

二一、興亡すべて夢なれど

壯烈無比の薩摩武士

二二、無心の萬草今も尙

仰げば月色縹渺と

名乗る雄々しき老の果

息をもつがす忠吉等

返す我が餘威又猛し

行く行く敵をけ散らして

伊勢路さしてぞ落ち給ふ

六十餘年の生涯に

公の無念や嗚呼如何

敵にそびらを見せざりし

譽は永久に匂ふなり

勇士の血潮にしげるらん

うたゝ往時のなつかしや(終)

### 島津義弘公小傳

義弘公は貴久公の第二子で母は入來院重聰の女である。天文四年七月二十三日伊作城に生れ、幼名を四郎といつた。天正十五年八月、兄義久公に嗣子がなかつたので其後を承けて第十七代の藩主となられた、公は勇武絶倫、幾度も生死の途を往來して愈々其心膽を鍊られ、馬術は其の最も練達されたものであつた。神を敬し下を憐み、質素を以て民を率ゐ仁政を施し、國利民福を計られたが、公の一生は實に勇武の歴史で、豊太閤征韓の役には、石曼子しまんぷの勇名を異域に轟かされ、關ヶ原役には獅子奮迅の勇を示され奮闘激戦して薩州男子の意氣を示されたのである。元和五年七月二十一日、齡八十五を以て加治木の城に武勳赫々の生涯を終られたのである。

### ◎苗代川

伊集院驛からも行けるが、東市來驛からなら二十町にして下伊集院村の苗代川に着く。豊太閤の征韓役に於て、義弘公は其の威名を明軍の上に迄とゞろかさされたのであるが、其の時、鮮人を隨へて歸朝された。夫等の鮮人が窺業をよくしたので義弘公は之に土地を與へて此地に置かれ盛に窺業を奨励され所謂薩摩燒の元祖をなしたのである。



今でも窯業に従ふ者、二十餘戸あつて壺屋焼を製して居る。其の最も精巧なのを錦手と言つて貴重視されて居る。

此地に玉山神社と云ふのがあつて、慶長の頃人心安定の爲め建立し朝鮮開祖檀君廟より其靈を移し、更に皇祖天孫を併せ祀る、島津歴代の藩主尊崇せる所である。

◎市來温泉 東市來村 湯田

伊集院驛を發し、東市來驛を過ぎると湯之元驛に着く。驛から南へ三町、廣い田圃の中にすき通る様なきれいな湯が湧いて居る。疹癩、濕疹、リウマチス、神経痛、生殖器病、腺病、ヒステリー、痛風などに効がある。ラヂウムエマナチオン含有の含硫明礬泉、硫化アルカリ泉などがある。鹿兒島市から汽車で一時間賃金四十五錢、市に近い所から土曜日曜など浴客が多い。

◎鶴丸城 東市來驛數町、麓部落の上手丘陵で城山と云ふ、城内幾つにも分れ堀切がある、建武年間市來太郎左衛門時家所謂南朝に應じ當城に據り兵勢稍振つた、當時北朝に屬した島津氏、島津頼久をして當城を攻めしめたが八月城兵湯田に出撃し、其後度々戦

闘があつて、曆應三年八月島津貞久に攻められ市來時家降り、寛正三年市來久家又反し當城に據り、島津立久に攻められ久家其子忠家と共に逃亡し市來政家市來郡司となつてから六世久家に至つて宗統が絶えた。

◎港 湯之元を出ると汽車は海岸へ出る。そこは西市來の港である。

往古は鹿兒島から八里で丁度一日の行程であつたので、川内加世田方面へ行くのに此所で馬を代へた宿場で南薩地方の物資は多く西市來に集つたといふ。交通機關が備はつて以來は幾分其の賑ひを削がれたけれども、教育施設としては第二師範學校があり、産業としては日置煙草の代表的産地である。市來焼酎と港飴の賞味は忘れてはならぬ。

◎吹上濱の北の果 西市來驛の附近、松の間に隠見する砂濱がそれである。海岸に

立てば雪の様な白砂が遠く續いて、うねりくと押し寄せる波浪は雪山をくづして亂れ寄る。雄渾!!豪壯!!言語に絶するものがある。

南方遙に野間岳が雲煙模糊の間に僅かに其輪廓を描いて聳え、其の間十里の砂濱が續い



て、しかも渚には無数の翠松蜿蜒として樹枝を交して居る。鹿兒島縣第二師範學校は此附近にある。

●串木野 西市來驛から十數分で汽車は串木野驛に着く。陸路は二里、歩くのも興がある。

串木野村は西薩に於ける漁業地で、對馬や南鮮近海は言ふに及ばず、遠く巖手縣下の釜石方面までも出動して海の寶庫を開發しようとする努力して居る、海岸は翠松が長く連つて忍び寄する浪の美しさ、只白妙の布を引くかと疑はれる。海上近く風を孕んだ白帆は、漁どる漁夫の唄乗せて、櫓聲遠くまた近く、打ち寄する波の音に纏れつ解けつ海上を滑つて行く、海の寶が年には三十萬圓も掘り出されるが、本村はまた山にも寶を藏して居る。

三井の串木野金山は大仕掛の精煉所が串木野驛の北方四五町の所にあり、島津家の芹ヶ野金山も汽車の上からのぞかれる。

文部大臣として國家に重きをなした長谷場純孝氏は本村上名の生れである。

(長谷場純孝小傳)

長谷場純孝氏は串木野村上名の生れで、其の祖は藤原氏に出で、地方の名門である。代々串木野の地頭職として重きをなして居た。幼にして伶俐、學問を好んで明治四年、東京に出で、六年には警部となり、七年南洲翁に従つて鹿兒島に歸る。丁丑役に薩軍に加はり、一隊の長として苦戦したが、負傷して平定の後官軍に捕へられた。獄舎にある事三年、釋されて九州支那等を旅行して、政治に力を盡された。明治二十三年、薩摩外三郡の郡長となり、二十三年以後は鹿兒島第三區の衆議院議員として毎回當選されたが、遂に政友會の總務長となつた。衆議院議長となる事二回、遂に原内閣に入りて文部大臣として大いに功があつたが、大正三年三月十五日六十一歳を一期として逝かれた。

●川内町

串木野驛から、木場茶屋驛、隈之城驛と過ぎて川内町に着く、縣下第二の都會で鹿兒島



市を距る西北へ十三里、鐵路は三十二哩六分、約二時間を要する。縣下第一の巨流川内川流域の豊かな物産の集散地として日に發展して行く。町の眞中に川内川をはさんで、長さが百二十間もある大きな鐵の釣橋がかゝつて居る。太平橋といつて、明治三十三年頃、工費十八萬圓を費して今の橋にしたのである。

川内の町は、平佐村、東水引村、隈之城村の三個村の界にあつて、川の向側が東水引村で太平橋の通りを界にして北側は平佐村、南側が隈之城村で、本縣第二の都會であるにかゝらず未だ町制だに布かれないのは止むを得ない事ながら、甚だ残念な事である。

川内の町には縣立川内中學校、同高等女學校、私立川内女學校、川内區裁判所、稅務署其他諸官衙があり殷賑を極めて居る。

川内川の川口の南側は高江村で久見崎では對岸の京泊浦と數十町の川口をなし大小の船泊が出入する。

◎新田神社

川内町驛からは二十町西方、西水引村の中。太平橋を渡つて左に折れ、川に沿うて下ると、第一の鳥居が見える。こゝから八町の間

青々とした芝生に櫻の竝木がつゞいて第二の鳥居がある。七八十間ばかりの高い石の階を上り詰めた所にお社がある。

天孫瓊々杵尊を祀る國幣中社で、千年以上もなる様な老樟におほはれ、森嚴思はず襟を正さしめる。社前の石階を數段下ると左手に周圍四丈に餘る巨樟がある、其の幹に藥師の像が刻み込んである。これは今を去る三百有餘年、豊太閤征韓の役に出發する前に、阿多長壽院が楠の木で彫刻して此所に安置されたものであるといふ。

可愛山陵

新田神社のすぐ後である。天孫瓊々杵尊の御陵で、鬱々と茂つた老樟が一しほ神々しさをまして思はず襟を正さしめる。可愛山は神龜山、又は龜山ともいふ、山勢東西に亘つて周圍一里もある、其の形が恰も龜に似て居るといふのでこの名があるといふ。

陵は圓形で、上に磐石を被うて、二段に壇を築いて木柵をめぐらしてある。周圍六百八十六間もあるといふ。



明治七年太政官布告を以て山陵の位置を現在の所に確定する旨達せらる。

●國分寺の跡 可愛山陵を下つて東へ一〇町、川内町驛からは凡そ二十町、往古は境内もすい分廣かつたらしく、附近の人家に古式の墳墓が残存して居る。天正十五年、豊太閤西征に際し火を放つて焼失したが、後寛文九年、大守島津光久再建して眞言大乘院の末寺としたが其の時は境内も著しく縮少して僅に北方に偏在する様になつた。

而して寺趾は人家の宅地に變じ唯三十三間堂大堂等の名に依つて昔時の隆盛を知る事が出来る。

●大門趾 九禮橋から東に折れ、台に至る入口に光松といふ所がある。昔の國分寺の

大門の址であるといふが何の遺物も残存して居ない。

●三十三間堂趾 大堂小路の北の畑地で往古三十三間堂のあつた所として今も尙ほ其の名を存じて居る。

●礎石 元大堂と唱ふる地点にあつたが、現今は大小路了忍寺の庭に運んで手洗鉢となして居る。自然石で不正な三角形をなし、一邊の長さが四尺、地上の高さが三尺

五寸、中央の丸孔は直径二尺、深さ三寸で底部は水平である。此種の礎石は、奈良朝或は平安朝の初期に流行した寺塔の中心礎石であると云へば、恐らく國分寺創建の頃には大塔が建立せられて居た事を想像し得る。俗に「ウダウ」と呼ぶのは大堂ではなくて大塔ではないかと思はれる。

●古瓦 三十三間堂の附近の畑地に瓦片を夥しく埋没した所が數ヶ所ある。普通布目綱目の模様のものであるが間々蓮花紋、唐草模様のあるもの、又は鬼瓦等を掘出すことがある。

●石塔 天神馬場と横馬場との交叉した十字街頭の西南、井上興右衛門氏の宅地内にある。明治初年廢佛の際、之を突き倒して破却しやうとした所が、當時の家主が、之は自家の氏神であると主張して抗議したので、然らば道路からの通路を塞げと命じて横馬場通りからの通路を塞いで幸に其材石の破壊を免れた。其の後便宜中央に三重を置いて左右に二重づゝ都合三基に立竝べ毘沙門天の石像も傍に健立したといふ。



●川内川 川内川は川内町にとつては實に有難い川である。これあるが爲めに上下の運輸は遺憾なく行はれ、之あるがために沿岸の沃土を得て居る。

川内のナイル河とも言へるし、川内文化は川内川の餘惠ともいへよう。源は遠く日向、肥後の山中に發し、蜿蜒四十餘里、滔々として大隅を貫き薩摩に入る、其の間幾多の支流を合して水勢次第に大きくなり、川口から三里、川内の町までは大船を通じ、川内、宮之城間七里は米十石を積載する河舟を通じ、宮之城から六里川上の曾木の瀧までは六石を積載する河舟を通ずる事が出来る。川はまた頗る魚利に富み、鯉と鮎とを豊富に産する、川内に遊ぶ者は必ず鮮魚の賞味を忘れてはならぬ。

川内川下り、月夜の太平橋、七月十六日の精靈流しは川内川の名物である。

●平佐城跡 川内驛から北へ三、四町

一名諏訪之尾城といひ、城壁の高さは僅に四丈、周圍十八町に足らぬ山城である。東は原野に接し、三面は水田に臨んで居る。

天正十五年、豊太閤征西の折は平佐の地頭、桂神祇忠防の居城であつたが、豊太閤は大軍を率ゐて肥後の國から出水に出て、天正十五年四月二十五日には、本軍の大將小西行長、加藤嘉明、脇坂安治、九鬼嘉隆、先鋒軍を率ゐ、秀吉に先だつて川内川口の京泊に着いた。流を溯つて高江村猫嶽に陣を布いて四月二十八日から平佐城の總攻撃にかゝつたが、忠防は天性剛膽、少しも動せず、手勢わづかに三百を以て眼に餘る大軍を食ひ止め、敵をして一步も城に入れしめなかつたといふ。

國主島津義久、秀吉と和議を決し、忠防も止むなく君命を重じて城を下る。

川内ローマンス

◆船間の落日

多くの舟師を引き連れて吾田國笠狭岬を御出立になつた瓊々杵尊の舟が川内川口に着



いたのは秋の夕日が赤々と日本海の大海岸に沈む頃であつた。

尊は川口の舟間島にしばらく舟を御止めになつて四方の賊をお平げになり、そして民の有様と御覧になつて居られた。其のひま／＼に舟を川内川に浮べて川遊をなされ、中秋の月夜に限りなき興を起され山をお下りになる頃は夜半を過ぎて居た。かうした旅のおなぐさみも束の間尊の船頭をして居た方が重い病にかゝられ百方御手をつくされたが、其の甲斐もなく淋しい晩秋の夕暮におかれになられた。今までのおなぐさみも消えて淋しさは一入加はつたが、尊は御氣をとり直されて川上の方へ御出立になられた。船頭の死骸は舟間島にお葬りになられた。今の舟間神社がそれである。

川上へ御出になる途中尊はいろ／＼難儀をなさつたのである。丁度二里川上の小倉といふ所まで御出になると賊共が尊を欺いて三種の神器の一の御鏡をお奪ひ申さうとした。尊は御鏡を小高い岡にお埋めになられて其の難をお遁れになつた。此の岡を鏡野といつて小さいほこらが立つて村人は年々祭をかゞない、尊は其の賊共をお平げになり、川内平野に進まれ、四方の賊をお平げになつてそこに宮をお造營遊ばされたのである。

ある。

### 鳥 追 船

川内驛前の大通を一町、右側の小川のほとりにこんもりと茂つた森がある。鳥追の森といつて中に石碑が立てて歌が刻してある。

▲水鳥を追ひし跡とて名もくちす、残るしるしの鳥追の森

昔日暮長者といふ人が住んで居た。居城は今の川内小學校の上の小高い岡で日暮の岡といつて居る。奥方は柳御前といつて月姫の様な美しい方であつた。二人の間にはお北、花若といふ天使の様な兄弟があつた。極樂浄土の様な長者の家もいつしか黒雲に包まれて恐ろしい悪魔の住家となつた。長者の家に居る家來、横淵左近尉は稀代の悪漢であつたが心の優しい長者は此等悪魔の姦計を知らずに重く用ひて居たので、遂に柳御前を讒して遠ざけたのである。後には横淵の一味お熊が後妻として長者の家に入り込んだが、さしも天國の様な樂園も一朝にして夜叉王國と化し、幸福であつたお北



花若の兄弟は生瘡の絶間はなかつた。

其頃川内川域に水鳥が群れ集つて作物を荒すので百姓達は鳥追船を浮べ、鐘や太鼓を鳴らして鳥を追つて居た。悪魔の様なお熊は鳥追船を作つて兄弟を乗せ、川内川に鳥を追はせたのである。或日の事であつた。横淵、お熊の姦計にかゝつて長者の家を出された忠僕要之助と侍女お仙は鳥追に疲れて芝生に眠つて居た兄弟のいぢらしい姿を見て泣いた。そして命にかけても可憐な天使を救ふべく固く決心をしたのであつた。兄弟は母戀しさの思で繼母の怒も打ち忘れて母の實家を尋ねて母子三人は相擁していつ迄もいつ迄も泣いた二人は母に諭されて振り返り振り返り歸つて行く。これを知つてお熊に告げたのはお熊の連れて來た侍女であつたが、お熊は眞赤になつて怒り、形相變えて折檻した。二人はあまりの悲しさにしつかりと手を握り合つたまゝ川内川へザブンと飛び込んだ、そこは人の恐るゝ魔の淵であつた。

忠僕要之助とお仙は兄弟が悪魔にいちめられて居ると聞いて提灯をつけて迎ひに行つたが、其の時はもう遅かつた、天使の様な二人の姿はいつか冷い死髓となつて堅く手

を握り合つたまゝ川の瀬に浮んで居た。

たゞ青白い星がチラ／＼とまたたいて千鳥の聲が悲しそりに川下の方に聞ゆるばかりであつた。

こうした悲しい物語りによつて恐ろしい嵐は静まつた。長者の夢は醒めて柳御前は再び日暮の御殿に歸つたが、二人の魂は永久に歸らなかつた。そして西の空にまた／＼星に護られて靜かに靜かに眠つて居るのである。

### ◎西方の海岸

川内町を辭し、再び汽車中の人となる、上川内、草道（西水引村）

と過ぎて、二三十分の後、海岸に出て渚のほとりを走る。鹿兒島本線の絶勝の箇所である。奇石怪岩の上に立つ枝ぶりの面白い松、細かな白い砂がつゞいてジャブリ／＼と打ち寄する波のさゞめきも面白い。

遙かの沖には雲煙の間に海獣の背をあらはした様な鮑島が横はつて、其の彼方は所謂天草灘で、碧水萬里、吳越の天を望む。一景過ぐれば更に一景、こゝばかりは汽車の早いが怨まれる。





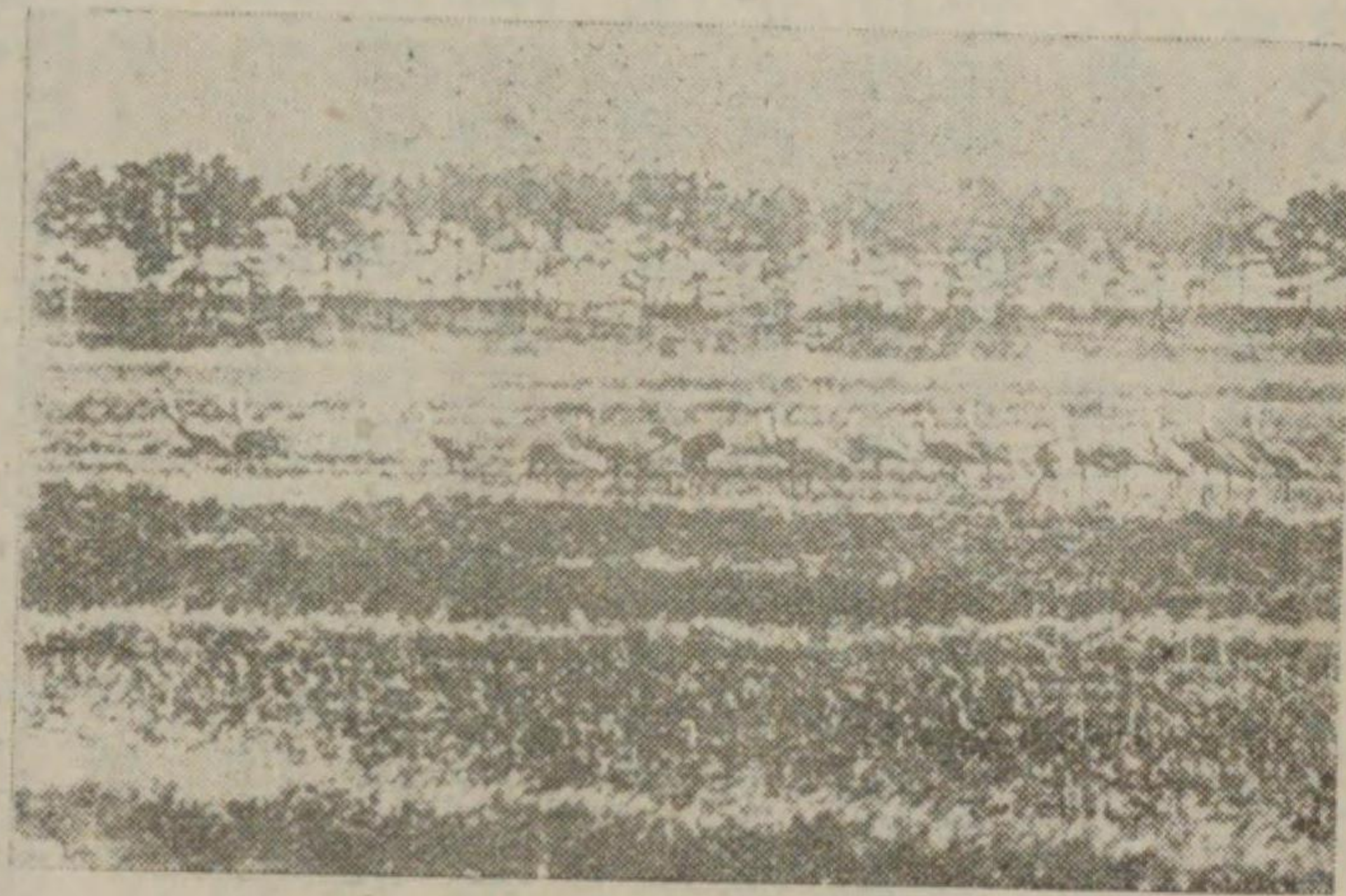


前面の廣々とした田圃に鶴群を眺められるので浴客は日にふえて行く。

◎鶴の名所 温泉場の前が所謂湯田圃

で、毎年十月の末頃から渡來し始めて、寒くなるにつれ、其の數を増して、多い時は二三百にも達し悠揚餌をあさる様は眞に天の美觀である。此の白衣長頸の珍客は汽車の上からも見られるし、旅館温泉場の階上座ながらにして見られるが、近づいても餘程の近い距離まで接近する事が出来る。大正十年三月内務省告示を以て天然記念物保存法により指定せられ禁獵區域となつて居る。

◎戸柱山 鐵路が開通し、鹿兒島、川



出近頂の所 水田各等 阿郡に種 久根の種 村毎に種 字年中 瀧秋來 田初觀天 同呈を然 郡春を記 野に呈を 田本物 村真邦と 荒里す 崎名鶴務 附鶴名務

内方面からの遊覧客が多くなつたので、阿久根町は此の山を開いて公園とした。足を一度此所に運べば阿久根港の全景を眼下に瞰下し、光礁五色の濱をすぐ下に眺め時の經つのも忘れてしまふ。

◎光礁 戸柱山の西、波留の濱から海上約三町、巖石累々の中に二個の巨岩が東

西に相對して居るが、之が時に光を放つといふので珍らしい。或は金鑛として發掘を試み或はダイヤモンドとして潜水夫を入れて探究したが結極は駄目に終つたといふ。

數ならぬ目にこそ見えぬ光瀨の光の中に神さますらん 樺山資紀

眼に見えぬ神の御影もうつるまで心の雲を磨き捨てや 全 八田知紀

わたつみの底の眞玉はしらねども此の光瀨や神のみたから 全 八田知紀

光瀨のひかる心を人とはば神の御たまと我はこたへん 全

◎五色の濱 光礁の西隣の海濱は日眩ゆいばかり浪に磨き上げられた五彩の眞砂數町

に亘りて一面に輝き、恰も錦繡を敷きつめた様である。



一名錦の濱とも云つて、遠望佳麗水清く波靜かな所、海水浴には恰好の場所で遊覽の客が絶へない。

◎大島 阿久根驛の西、海上僅に一里、周圍一里の小島で、全島皆老樹枝を交へ海風松の稍を鳴らして、さながら仙境にあるの思あらしめる。こゝから陸の方をふりかへれば五色の濱、光る礁、三日月形の眞砂が長く連りて銀波の徐に晒す渚には商家漁家櫛比して、浮橋を見る様である。今から二百五十年前に、藩主光久公に種子島から二頭の鹿を獻じたので、此の島に放たれ、其の後繁殖して數百頭となり、春日の神苑に見る様に人になれて居たが、丁丑役に官軍の爲に捕へられ、僅に其の影を止め、明治二十三年頃は三〇頭位に繁殖して居たけれどもまた村民に捕へられ残る二三頭も明治三十七年頃村民に捕へられてあたら名物も絶無となつてしまつた。其の後村有志相圖つて奈良から神鹿を申請けて此所に放ち、馬毛島からも購入して放つたので、漸次蕃殖するといふから鶴と共に將來海陸雙壁の名所となるであらう。遊覽者の爲めには列車と連絡の遊覽船を設けて顧客に酬むるのである。

◎下村湯 折口驛の北四五町の所にある。

此邊一帶は外洋に瀕し、半里に余る白濁が三日月形をなして南北に連る。遠淺で水清く波穩かな渚には無數の翠松蜿蜒として枝を交へ、綠影白砂に映る蒼海は緩かに銀波を送つて徐に白砂を晒す。

北方には愛宕の懸崖に起臥する老松が海波を蔽ふて紺碧を湛へて風光また明媚、海水浴場として好適地である。

◎黒の瀬戸 折口驛から縣道を北へ約一里半、三笠村の黒の濱港がある。東長島村の瀬戸との間に所謂黒の瀬戸を峽んで八代灣の咽喉を扼して居る。

長さ一里、近い所は三町、廣い所は十町に達し、内海と外洋とを通ずる潮の通路で、潮の満干には潮流の奔騰疾驅、さながら大河の奔流の様で常に渦を卷いて物凄い殊に「揖折」と呼ぶ所は兩岸最も逼つて潮流矢の如く、渦卷の轟々たる鳴音は兩岸に響き渡つて壯絶凄絶を極め、大船と雖も大渦の爲覆没をまぬがれぬので、往時は満干の極度を待つて航行して居たといふ。只今では航海の術開け隨時通行して居る。一日に十回の定期往復をなして



人畜を渡行せしめ縣道との連絡を圖り旅客に備へて居る。

▲一ぢや玄海灘二ぢや千々岩灘三ぢや薩摩の黒の瀬戸

### 野田村

野田村は地域が狭くて人口も亦多くないけれども、島津家五代の居城であつた木牟禮城の東南には、屋地と稱する所があるので、地形から考へて往時城郭内であつた事がうなづかれるし、驛の附近一帯、街衢の状況や壁塘の結構など今尙ほ區劃整然として壯大なるものがある。

縣道は本村の中樞を縫ふて、東西に貫通し、出水町と阿久根町の間中に位し、從來はたゞ交通路に當つて居るといふだけで稍寂寥の感があつたが、鐵路改通以後俄然として活氣を呈し、面目が一新された。

### 五廟社

驛の北方五町半、島津忠久公以下五代の墓所である。三間四方高さ四尺に石を疊み上げ、其の中央に五基の塔が整然列をなして石の玉垣を廻らし、崇巖を極めて居る。維新前は島津家から代參を遣され、祭典も甚だ壯嚴であつたといふ事であるが、今から四十年前、靈位を鹿兒島に移してから往時の觀はないといふけれども、老松古柏空を蓋ひ、縁蔭濃かなる處、神威自ら迫るを覺ゆる。石塔の銘には

島津家 元祖 忠久 公

二代 忠時 公

三代 久經 公

四代 忠宗 公

五代 貞久 公



### 局の松

五廟社から北へ二町半

◆舊記に曰く



『民部大輔惟宗廣言鎌倉より日州庄内に移居するや島津忠久公の御生母丹後局も共に下りて居住せらる後廣言と別れて木牟禮城に來り給ひ、局は忠久公の御偉勳を見給ひて今昔の感に堪へず喜びの記念に公の武運長久を永代に祈り奉らんとて山内寺の社傍城の東南隅に松を植ゑさせ給ひしと。』

之が即ち名代の御手植の松で周圍一丈八尺、高さ九丈三尺に達し、樹枝四方に垂れ、中にも一枝は地に杖つく様な姿をあらはして、比類のない恰好であつたが、村踊の邪魔になるといつて、地上九尺の所から切りすててしまつた。然し全体としての恰好は一枝の爲めに損ぜられず、一目見て由緒ありげに見え、自ら七百年の昔を偲ばしむるものがある。

●木牟禮城 野田郷驛の北方二十四五町の所にある。三笠村江内にはいるが、附近一帶に古蹟が甚だ多い、建久の昔、忠久公が薩隅日三州に封を受け、當國に下向され、忠時久經、忠宗、貞久に至るまで、五代の間居城であつたといはれる。

●荒崎新地 野田郷驛の北方一里、やはり三笠村にあつて、尾の島と荒崎との中央淺の海であつたのを、文久元年に島津公が築堤の工事を起され、四ヶ年の星霜を費して元

治元年六月竣工した一大土工で周圍一里に余る地域が作られたのである。

北部の堤塘は出水灣に瀕し、無數の青松蜿蜒として半圓を描き、濤聲松韻相和して夏も尙ほ暑さを忘れしむるものがある。南に紫尾の雄姿、北東に出水沿岸の風光と矢筈の峻嶺を望み、天草列島の遠影を八代灣に泛べ、西は瀬崎、野笠山連亘して風光頗る佳麗である。

新地の面積は三百余町歩もあり、沼澤が所々に介在して、鶴群の嗜餌が豊富にあるので、鶴群の根據的涉游地域をなして居る。阿久根に居ない時でも、此所は必ず居ない事はない。阿久根田甫と共に天然記念物に指定され禁獵區域である。

●鶴の名所 野田郷驛から北へ約十町、國道に接する田圃と高尾野驛の北方一里大字下水流の國道筋にある耕地整理區内の田圃とは、阿久根、荒崎と同じく鶴群が飛來して悠々餌を漁るので國道筋一帶の風景は時々異彩を放つて美觀を呈する。阿久根や荒崎に來るものが、求餌の爲めに轉々涉游するもので、天然記念物として保護されて居る事は同じである。



▲種子になりたや煙草の種子に植えて育て、本葉をかいで色のつくまで見とござる。

▲蠶育家千戸名の出た村で人情風俗上宮山(安來節)

### ◎出水町

出水郡の中心地で元郡役所の所在地であつた。東は隣村大川内村を過ぎて大口に至る縣道あり、南は宮之城、西は高尾野、野田方面に至り、北は米之津方面へ縣道が開けて、交通上の要路に當つて居る。

此の地は昔關ヶ原役に英武絶倫の驍名を天下にとゞろかした、山田昌巖翁が地頭として輕跳浮華の風を矯め、勤儉尙武の徳を奨め、しきりに士氣を鼓舞されたので、剛健廉恥の美德勃然として興り、所謂出水兵兒の氣質を造つたのである。翁の墓は出水驛を去る南方へ約二十町程の所にある。今尙ほ遠近の士其の徳を慕ひ、四時香華の絶ゆる事がない。大正六年の秋、有志が相はかつて翁の二百五十年祭を營むに際して其の功績を永遠に傳へ、

武士道精神の修養に資する爲め、出水青年會員勞力を寄附して頌徳碑を建て、道路を修理して面目を一新し壯嚴な祭典を舉行した。翁の創始になる兒請の儀式、大幟、小幟、山田樂、兵兒踊等、翁に因んだ勇ましい餘興を催して盛況を副へ、當時を偲ばしめたといふ。

### 兒請の式

寛永十四年島原の亂に當り、山田昌巖翁は天草近くの事なので、衆軍に先だつて出陣せられたが、出水の境目の大將には子息松之助を命ぜられた。松之助は當年十三歳、器量骨格人に越えて美しい少年であつた上にていと花やかに装ひ立て、第一陣に馬を進められたので、老も若きも路に出迎へてあはれ此の君の馬前に倒るゝを武門のほまれと勇み立つた。此の時、出水の壯士共の謡に

松様を小せきに乘せてイヨサ

歌でやらうもの本渡の迫門をイヨサ



石火矢を車にのせてイヨサ

城を攻めらうもの富岡の城をイヨサ。

戦終つて凱旋するや翁は衆を集めて出陣の勞を慰め盃を給ひ、主従和親の裏に一日を過されたが、末長く此の日を記念せんため兒請の次第を定めて、歸陣の儀式を行はれたのがはじめである。此の兒請の行列には次の歌が行進曲となるのである。

- 一、常盤なる松の緑も君が代も今こそ千歳の初めなりけり
  - 二、深綠色も變らぬ松が枝は今こそ千歳のはじめなりけり
  - 三、千代に八千代は経るともや變りやせまい君が治むる國ぢやほどに
  - 四、敵がやよせられたれどもはづしやせまい差した刀の役ぢやほどに
  - 五、若いは夢よ袖引かばなびけ引かるゝ程にさんべー／＼誰のおさしか見よ／＼
- 御盃は呑みたいね

### 山田昌巖翁の小傳

翁は其の先は桓武天皇で父有信の陣中に生れた。幼名は千代太郎といひ十才の春となるに及び、天來の氣象骨髓いよ／＼其の光を放ち、自然に具はる眞威に諸人の敬仰益々深く、其の名藩中に喧傳す此の年の春豊太閤天下の兵を起して海陸二道より九州へ攻め下つた。父有信五百騎の手勢を以てよく城を守り、遂に抜く事は出来なかつた。藩主島津義久天命の歸する所を察し、和を議するに及び止むを得ず開城し千代太郎十歳にして敵中に人質となつたが、毅然として大丈夫の道を踏み、怯めず臆せず苟も君父の事を忘れず、朝な夕な専念文武の道を勵まれた。

年を越えて千代太郎歸國を許されたが、やがて元服して彌九郎有榮と名乗り、天晴天下無双の男となり、愈々士道を磨いたので、夜光の名珠燦として光を放ち、三州武人の間に嶄然頭角を顯して、知るも知らぬも尊敬せぬはなかつた。

豊太閤文祿の師を起して朝鮮を征するに及び、彌九郎有榮十八才を以て此の役に従ひ雨と亂るゝ矢玉を犯し、勳功拔群。慶長四年二十二才にして財部の逆徒を只一戦にふみつぶし、明けて慶長五年秋九月の十四日、關ヶ原天下分目の合戦に逢ふ。有



榮雲霞の如き敵中を縦横無盡に荒れ廻り、百騎が一騎となるとも引くな進めと相勵まして鎬をけぶり火花を散して混戦半日、勝ちほこつた關東勢も其の鋒先に辟易し道を左右に開いて薩軍の前をさへぎる者はなつた。暴風一過、世は徳川の天下と靜まり、有榮出水の地頭となり、勵精治を圖り、民を撫し少年子弟の士氣を養ふ。

寛永十四年島原の起り、起討手の將板倉重昌利あらず、松平信綱下向翁は島津豊後久賀にしたがひ、またくうちに賊徒を平定す。明曆三年昌巖老祿の故を以て出水地頭を辭し、其子有盛後を襲いだけでも昌巖翁は老を養ふの傍武道を獎勵して休まなかつた。

寛文八年九月二日九十一の老齡を以て出水に没す。

◎湯川内温泉 出水町武本鹿倉山の中腹にある。武本驛より行けば一里清流の間にあつて幽邃な所である。しかし旅館の設備なく、只自炊の間貸があるのみで日用品の供給が不自由なるは惜しい事である。

上中下の三個所に浴槽があるが温度が稍低いので夏季の避暑には適當である。單純泉で胃腸病、疥癬、關節の疾患、皮膚病等に効がある。

### 米之津町

本縣最北の港である。陸には鐵路が熊本縣と本縣とを連ねんとして國道は鹿熊二縣を連ね、大口に至る縣道に分岐し、海には北部の要津米之津港を控へて海陸交通の要路に當つて居るので、旅客物資の集散が頗る活潑である。一時は寂寥を極めたけれども、新鹿兒島本線全通を目前にひかへた米之津町の將來は期して待つべきものがある。

港は驛から北方へ五町、明治三十三年四月に工を起し、越へて三十五年四月三十日に工を竣へた縣營築港で、近海唯一の良港といはれ、船舶は常に幅輻し旅客の出入貨物の集散が頗る活潑である。葦北、天草通ひの汽船、發動船も皆此の北に寄する。

後には矢筈の秀峯を負ひ、前面遙かに長島や天草の諸島が羅列し、西は葦、桂の小島を隔て、瀬崎、野笠山を望み、北は兩肥の諸峯が雲煙模糊の間隱見し、其の間白帆点々往



來して、風光の美なることまた言語に絶す。朝夕の潑漉たる鮮魚は。風光と相俟つて遊覽の顧客に酬るには十分である。

◎野間の關所 米の津港の東北約七町、此のあたり一帯を野間の原と呼んで居る。今から三百餘年前、島津義弘公が他國人の侵入を防ぐため、此所に國境の關所を設けて通行の人を檢めて居た。

寛政四年二月、寛政三奇人といはれた一人、高山彦九郎が薩摩に入らうとして此の關所で拒まれた。

彦九郎曰く「薩摩人いかにやいかに刈萱の、關も閉さぬ御代と知らずや。」  
關守曰く「刈萱の關も閉さぬ御代なれど、君の固めし野間さ知らずや。」

◎名護の浦 米之津驛の西南十町ばかり、廣瀬川の河口を挟んで米之津港と相對する

漁浦で北に八代灣を擁して遙かに長島列島と相對す南には翠松が遠く渚に連つて風光をさながら繪に書いた様である。車鰈は此の地の名産として早くから海内に知られて居たが、大正五年元の出水郡の經營で其の養殖をはかり、畜養池を設けて試畜した所、良好の成績を得たので、今では個人の經營に委ね、年々生鰈としても京阪地方に販出して相當の收益を擧げて居る。乾鰈として諸方へ販賣するのも頗る多い。

### 傳説

當部落は壽永の昔平家の一門壇の浦の藻屑と化して榮華の夢の哀を留めた時其の落人が密かに此の地に來て主家再興の謀を企て、再び平家の世とならぬ間は一切履物を用ひぬと誓つて部落民は悉く跣足で孤忠相繼ぐ幾百年世の變遷と共に今は古の風習も次第に變つて行つたとはいへ、今も尙ほ一種特異の言葉を存じて古の名残を止めて居る。



鹿兒島本線

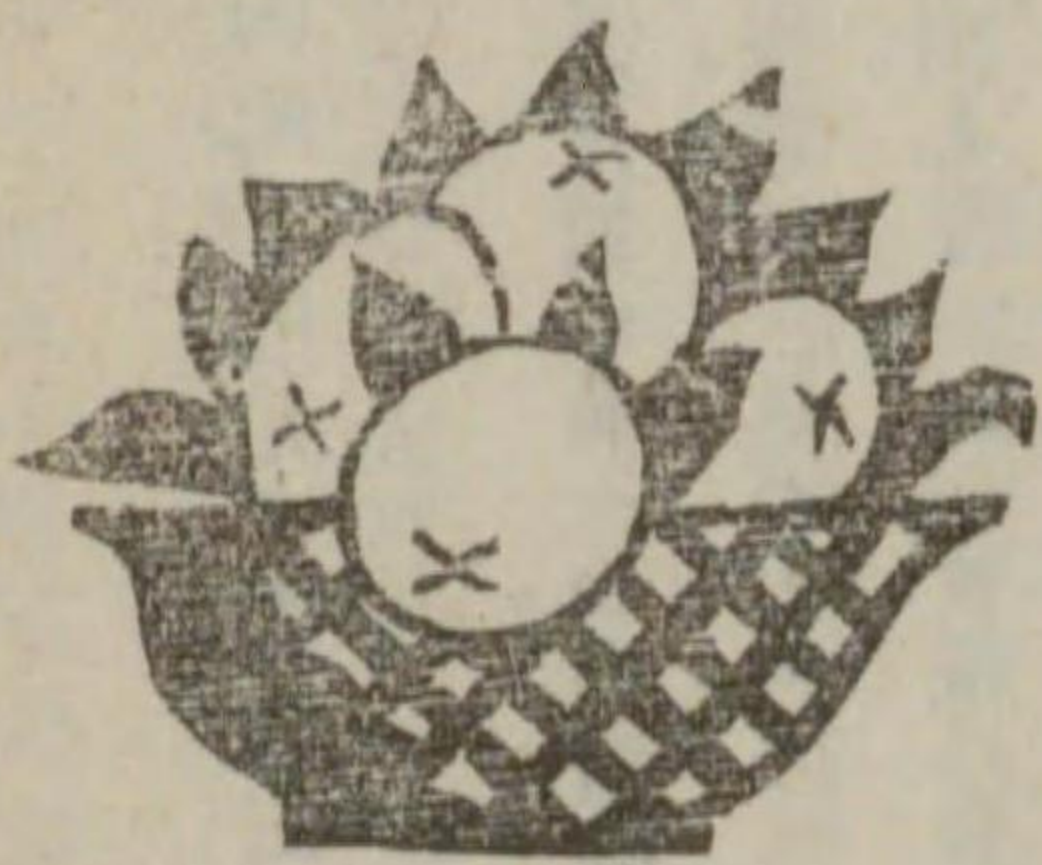
元肥薩海岸線の本縣最終驛は米之津驛であるが、昭和二年十月、いよいよ完全に竣工を告げ、二線により鹿熊兩縣が連絡され此方が鹿兒島本線となり、急行夜行の運轉を見ることゝなつた。古來、水俣方面と米之津とは極めて密接な關係があつた。「鹽は水俣から五穀は米之津から」と言ひ残された言葉は、水俣米之津方面の深い關係を象徴する言葉である。

沿線は八代灣に面して奇巖怪石が重疊し、綠色濃い若松が枝を翳して、渺茫とした蒼海雲煙の間に遠山を眺め、眼界の及ぶ限りは只水天に連つて、外洋の響が遠雷の様に聞かれる。

この豪壯な絶景を眺めて、頼は山陽でなくても、雲耶山耶吳耶越。と歌ひ出し度くなる。

水俣はまた本縣山野との間に、中部に於ける肥薩鐵道の連絡が大正十四年度から着手の豫定になつて居たが、政府の緊縮方針の爲め、遂に繰延の厄に逢ひ、其の結果昭和三年度から開始する事になつて居る。

本線開通の暁はまた更に北薩南肥の交通運輸が一層便利になり、沿線の産業開發を促進する事は言ふ迄もない。

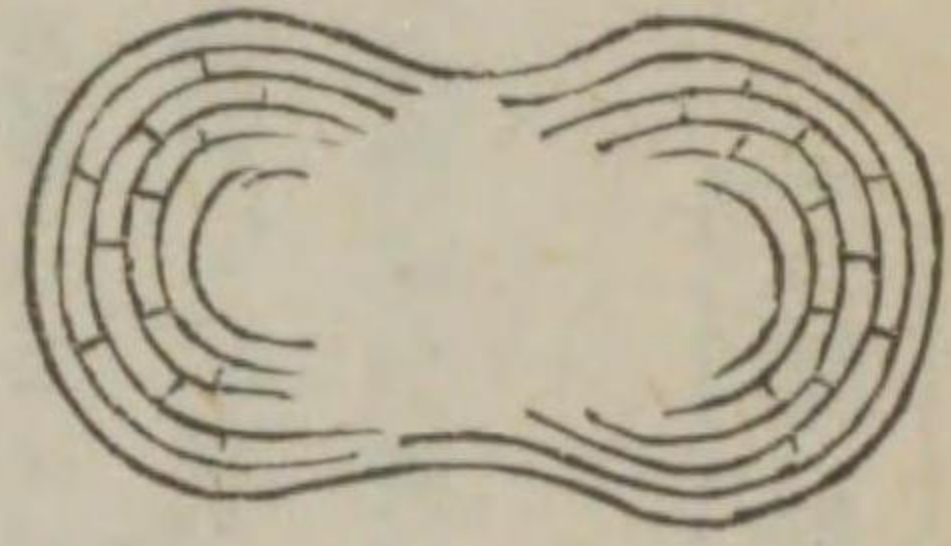




### 三、宮之城線附近

(川内町、宮之城間)

川内町―楠元―吉野山―樋脇―入來―山崎―宮之城



川内川の舟筏が唯一の交通機関であつた祁答院地方も駁々として進展する世運は、此の太古の俤を偲ぶ交通式で満足せず、川宮輕便鐵道の計劃となつたが實現を見ぬ間に、幾多の迂餘曲折があつて、遂に國鐵大川線の計劃を見、既に川内町、宮之城間の開通となつて汽笛の音を聞くに至る、關係地方の歡喜は久しく鐵路に恵まれなかつただけに其の喜もしたがつて大きいものである。

●藤川天神の梅 川内町驛から別れた汽車は十數分で楠本驛に着く。梅を見る爲めには驛で馬車をかる。陸路二里半、一時間餘で達する。藤川天神は萱原道眞を祀るお社で、二十餘間の石段を登り盡すと、老樹の枝を交へた中にお社がある。境内には道眞公自植の

梅と言ひ傳へらるゝ梅がある。枝先きが地上に垂れて根を生じ、次々に四方に延長されて數十株の様に見ゆるけれども其の本は一つであつたといふ今では何れが其の本株であるか區別は知るに由ないけれども、四段歩ばかりの面積に及び、普通の梅花と異つて重辨の淡紅色で、言ふに言はれぬ芳香を持つて居る。満開の頃は遠近の觀客前後相ついで賑ひを呈する。

●市比野温泉 楠本を出づれば次は吉野山。霞の奥に尙ほあるかと思はせる櫻のないのか憾みである。こゝから十四五分で樋脇驛に着く驛から一里行けば温泉場に着く。どこでも、温泉場といふと狭く屈曲な谷底が多いが、此處だけは前は一面廣々とした田圃で氣持のよい所である。春夏秋冬、滾々として湧出する湯は底まで見え透いて氣持がよゝ。旅館、下宿數知れず散在して浴客の便をはかつて居る。

殊に夏季にならば朝は一面霧につままれて着物などシットリとなる。市比野の霧はたしかに名物である。湯はラヂウムエマナチオン含有の弱重碳酸アルカリ泉でリウマチス、神經痛、子宮病、腸胃加答兒、脚氣、皮膚病等に効がある。



樋脇驛から永利村田崎まで縣道が通じて居る。

●副田温泉 入來驛の東二町、四面山で圍まれ、東には愛宕山の屏顔あり、西北には紫尾の靈峯を雲煙縹渺の間に望み、南に湯の山横はつて、春の櫻、秋の紅葉、一段の眺めがある。湯に浸つて一日の疲れを休め、刻々と變り行く夕の景色を見る。眞赤な夕焼が遠く後光をさす、やがて消える。城山の上に満月がヌツと顔を出す。濡れたタオルを片手に湯の町を電燈に照されながらブラ／＼歩く、男!!女!!何だか夢の國をさまよふて居る様な氣持になる。

殊に浴客の爲めに公設運動場が設備され、テニス、野球、何でも出来るので、保養地としては恰好の場所である。

紅葉湯、種田湯、打込湯、綱代湯、樓湯、紫垣湯等に別れて居るが、紅葉、種田の兩湯はラチウムエマナチン含有の含鐵鹽類泉で他は鹽類泉である。何れも痲氣痲癩、胃腸病腫物、皮膚病、神經痛、リウマチス等に効がある。

●砂石温泉 入來驛から東へ三里自動車で二十分、蘭牟田村砂石に着く。奇峰怪岩の

間を綴つて流れる砂石川の兩岸に沿うて湧出する。夏季の避暑地としては理想的の場所である。無色無臭、透明のアルカリ性單純泉で、リウマチス、胃病、生殖器病、皮膚病、痛風、腺病、重病後の回復期に効がある。

●蘭牟田池 砂石温泉から一里、扇形をした周圍凡そ一里の湖で、水面は海拔三百九十五米、火口湖で東方の火口壁が第二次の噴火で飯盛山を作り山に堰かれて池となつたのだといふ。

池の中に小島がある、泥炭から成つて低い松がたくさん生へて居るが、風に從つて浮いて位置を變ずるものも珍らしい眺めである。呼んで浮島といつて居る。

多數の鴨が清らかな水面に浮いて居る様は、靜寂な眺めである。

蘭牟田村の北隣は大村で其のまた北に接して黒木村がある。

●山崎橋 山崎驛の西方二十町、北薩の名邑川内町と那答院地方とを連絡する縣下第一の長い鐵筋コンクリートの橋で、大正十三年秋、縣の直營で着手し、工費七万二千圓を費した、延長七十八間經間六間十三連、有効幅三間で一年有餘の日子を費して大正十四



年十月竣工したものである。

◎宮之城町 本縣に於ける第一の蠶業地である。海拔三千五百尺の雄峰紫尾山を背景とし、川内川を帶として那答院地方の一大中心地として知られた名邑である。

嘉永五年三月、久光公の二男、島津圖書久治此地に、一万五千七百石を領して居たが、外艦の渡來や尊王攘夷の騒ぎで、國內をあげて、軍備を嚴にしはじめたので、那答院に於ても久治公が一萬二千兩を投じて文武の館を建設し文を盈進館、武を嚴翼館と稱したが、今は文のみ跡を止めて居る今の盈進小學校が其の盈進館の跡である。宇都宮平一、和泉邦彦、子爵大浦兼武氏等の人材を出したのは、全く此の文武館の賜である。

元來本町は諸種の原科豊富なるに加へて水利の便に富み、原動力を得るのに都合がよいし、燃料の供給裕なため工業發展の要素に富んで居る。

縣立宮之城農蠶學校がある。

縣道を東に進めば佐志村があり、豊公薩摩征伐の際島津歳久公陣營の跡が見られ、更に東北に進めば、大正十一年四月一日、新しく生れ出でた求名村がある。小村であるけれど

も各種の生産に富んで居る。

求名の東隣は永野村で、伊佐、始良、薩摩、三郡の界で、永野金山がある。

宮之城から川内川を溯れば鶴田村がある。林産物の豊富な所である。

◎轟の瀧 宮之城驛から七八町、宮之城橋の上流數町の所にある。

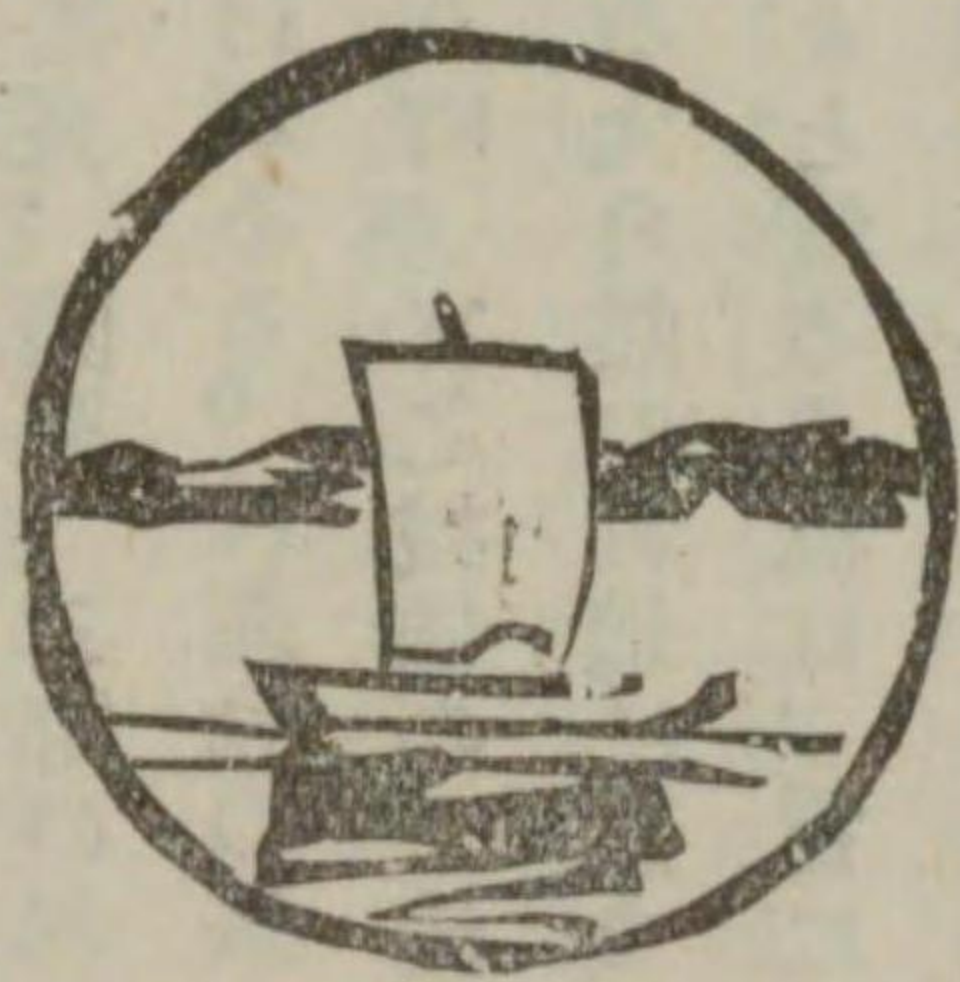
瀧といふよりも一種の激流である大自然の創造に恵まれて兩兩遠く開けて、奇岩大盤石の點綴した間を奔瀑岩を打つて滔々と流る様は、實に雄大と言はるか豪壯と言はるか、横幅十五六間、長さ六七町、其急流斜に、上下の高低相反する二十餘度、激浪は雷と轟き雪とくだけ舟を下せば矢の様に下つて行く。熟練の者でなければ轉覆させる事が多い。昔は瀑の下までは漕船を通はせるけれども、それ以上其の便を得なかつた爲め、宮之城領主島津久通、舟船の運送を謀り石を斫り岩を崩したけれども、水勢壯大で其の効がなかつた。天保年中、藩吏相議し、更に大巖石を碎いて遂に瀑の上流六里、曾木の瀧迄、舟船往來の自由を得たのである。

狂瀾山の如き本轟の眞直中に一葉の扁舟に乗り込んで、虎狼の様な大巖亂立の間を、奔



雷とどろき白浪怒濤の逆巻く中を突いて下航する時の壯觀は到底筆舌のよく盡し得る所ではない。

孤舟の轟下りも壯觀であるが、近頃は健康そらな若者達が赤銅色の裸体を毎日の如く轟の岩上にあらはし、泳いで下る壯觀が見られる舟でさへ熟練な船頭でなければ危険である。それを泳いで下るといふ事は絶大な決斷力と大膽さが無ければ到底行はれぬ事である。



#### 四、南薩鐵道附近

(伊集院、加世田、大崎間)

伊集院―昆沙門―日置―吉利―永吉―吹上―伊作  
入來―北多布施―南多布施―阿多―加世田―大崎



伊集院で國鐵鹿島本線に別れて南薩鐵道に乗込む。ゆるぎ出したらと思ふとすぐ大田トンネルに入る。トンネルを出て、昆沙門驛を過ぐる頃から南薩の山々が指呼の間に入る。

眼界が開けて廣い田圃に出るところが日置驛である。

#### 日置村

本村は島津金吾歳久の孫 常久の封ぜられた所で、子孫承襲して明治の維新まで及んだのである。



驛の東方數町の所に桂山寺の遺趾がある、こゝに歳久等の墳墓がある。海岸には帆の港下口浦がある。初代忠久公着船の跡と言はれて居る。

本村は瓦の特産地で、日置瓦と言ひ村内に出る粘土を材料として焼いて居る。驛の附近の田圃の中に平家の低い家があるのは其の工場である。

◎吹上の濱 日置驛を出ると吉利村に在る吉利驛永吉村の永吉驛を過ぎて伊作町の中に在る吹上驛に着く。日置より海岸一帯に白砂が見え出す。所謂吹上の濱で、西市來の海岸を北の果として、遠く万世町の小湊まで續く十里の砂濱である。吉利、永吉と過ぎて松原の風景が最も優れた所に吹上驛が出来て居る。雪の如く積み重なつた濱丘には節くれだつた小松が限りなく生へて居るが、この松こそは幾百年を経た老松であるけれども伸びるにつれて砂に吹き卷かれ、根本に堆積する白砂のために幹を埋められて僅に其の梢を残し埋れぬ者も海風に強く吹きたわめられて枝ぶりは實に面白い恰好となつて居る。

波靜かな日は、ジャブリ／＼と打ち寄する浪の音、美妙的な松風の音に和して身は早や詩中の人となる。綿の様なやわらかい白砂をふんにで渚に立てば、蒼海萬里 碧空に連り、甌島の連山は海獸が脊をあらはした様に雲煙模糊の間にわづかに其の輪廓をあらはして走る。往來の帆船は波の間に翻り、夕陽斜に銀波を照す頃など眞に形容に絶するものがある。たしかに大自然に恵まれた本縣のほこりである。

「正木葛卷十雜部に曰く」

薩摩國の娘の作りける由いひ傳へたる歌

吹上の濱の眞砂に埋れて老木ながらの小松原かな。

右の歌雲の上に聞えし時叡威の餘り讀ませ給へる大御歌或は(後西天皇なりといふ)

思ひきや筑紫の海の果までも和歌の浦浪かゝるべしとは。

西遊記續編に曰く

諸國に吹上の濱といふは數多あり海風荒き遠淺の濱に白砂を吹上る地をいづかたにても吹上と付るなるべし。就中すぐれたるは薩州西南の濱の吹上なり其海元より限なき大洋にて風



荒ければ白砂をうづ高く吹上又はを吹ちらす故に其砂の高低さだまらず殊に濱長く數十里を  
一目に望む。潔白の海上にて白砂一點の塵もなく風景不双なり此の吹上の濱の蟹小女によめ  
るとて、むかしより彼地にて名高き和歌あり

吹上の松は眞砂に埋れて老木ながらの小松原かな

是は三藐院殿（近衛信輔卿）の坊津へ左遷ましまし暫く滞在をばせし時此和歌聞台てかんぜ  
させ給ひしとぞ

▲春風や砂吹うづむ小松原

梅

船

## 伊作町

吹上を出づれば汽車はやがて伊作驛に着く。伊作町は、島津伊作家代々の城下で、驛の  
東北にある龜丸城趾が其の居城の跡である。龜丸城は、聳立六十尋、周廻二十五町、攻守  
要害の天嶮で、本丸城頭に忠良公、義久公、義弘公等の誕生の跡があり、石を以て表はさ  
れて居る。湯之浦にはまた海藏院の跡があるが、こゝは日新公が幼時勤學せられた所で、

附近に日新公の實父善久公、母堂常盤の墳墓がある。

町民は自立の氣象に富み、幼にして鹿兒島市に出で、商店に雇はれて粉骨の功を積むが  
長ずれば各地を行商して資を蒐め、全国各地に成功して居るものが多い。

◎千本樟 伊作驛の東北にはまた大汝八幡神社がある、本町の鎮守で大巳貴命を祀  
る。島津家代々これを尊崇されたといふ。其の南に數十株の老樟が鬱蒼と枝を翳して居  
る。千本樟といつて、大巳貴命が降臨された時、携帯し給ふた杖が芽を出したものだとい  
ふ。翠葉陰森と地を蔽ふて居るが、其の本は同一であつたといふ。見る人皆驚嘆の眼を  
見張る。

## 伊作温泉 伊作驛から十八町

後に山をひかへ、清らかな流がある、風光また極めて佳い夏季の涼、冬季の暖、共に好  
適の地である。旅館の設備も浴室の設備も遜色なく整うて、自炊逗留も意のままである。  
一浴して窓に立てば肢體が利暢して氣も心も爽かなるを覺ゆる。豪壯雄大な吹上に對し、  
靜寂幽邃な薩南の仙境である。



大正湯、柳湯、鎌田湯、緑湯、松崎湯、新湯、黒川湯、株式湯等あるが、大正湯と、柳湯がラヂウムエマナチオン含有の含鐵硫黄泉で他は皆硫黄泉である。リウマチス、胃腸病創傷、腫物、皮膚病、神経痛などの諸病を治する。緑湯は大きな池を圍んで客室が建てられ設備もよく風流客が多い、伊作驛から左に田布施村に在る金峯山を仰ぎ見つゝ入來驛を過ぎ、北多布施驛を過ぎて日置郡隨一の廣い田布施田畝を通りぬけると模範部落と稱へられた尾下部落に接したる南多布施驛に着く。夫れから神代に因める阿多驛を過ぎ、南薩唯一の大河萬之瀬川の鐵橋を渡りて川邊郡に入り加世田驛に着く。阿多驛からは薩南中央鐵道が分岐して川邊に行つて居る。

#### 加世田町

加世田町は薩南の名邑で鹿兒島を去る十里、南薩鐵道第一期の終点である。交通上の要路に當り、太古の所謂吾田で天孫瓊々杵尊の皇居を定め給ふた地である。西南には山霞紫にとろんだ長屋の靈山が聳へ、萬ノ瀬川の清流は万古の嘯きを奏で神祕の影を潜めて流れ

る。

縣立加世田高等女學校、及び加世田農學校をはじめ、南薩鐵道株式會社、萬瀬水電株式會社、南薩銀行等學校、諸官衙及び商工業の諸機關がそなはつて殷賑を呈して居る。

◎竹田神社 往昔は龍護山日新寺と稱する禪刹で忠良公の菩提寺であつた。明治二年廢寺の際に公の靈位を奉祀したのである。社殿は明治六年の造營で其後大正に入り大改造をなした。陰森たる老樹壯麗な殿宇を擁して神苑の風致極めて閑雅幽邃である。七月二十三日には武者踊を奉納して公の英靈を慰めて居る。所謂加世田踊で、壯士數百人隊伍を整へ、金鼓節奏して實に勇壯であるが、特に忠良公及貴久公を背景として居るので一入の床しさを感ぜさせる。

歌曲は兒童歌十章、二才歌三章から成つて居る。

此の日には鹿兒島市内健兒の舍生が朝早く出發し、伊作峠を越えて參詣し、踊の終演を待ちて馳せ歸り、精神と身体とを鍛練する習慣であつたが、一時此の壯舉も止められて居たが、由緒ある行事として漸次復活しつゝある。



見歌

- 一、君が恵は清瀧川の流の末も澄む御代なれや。民も豊にサンサあるいはサ、嵐静けき此の時よ。
- 一、松はもとより常盤の色よ、梅は匂ひよ柳は緑、花は紅いサンサあるいはサアラ  
ン嵐静けき此の時よ。
- 一、幾久し二葉の松も千代の緑も今年より、色も増りて常盤木の、松と竹とのすぐなる御代は代々を経るとも盡せじな。
- 一、いつ見ても小鹽の山も千代の緑、今年より色も増りて常盤木の松と竹との直なる御代は、代々ふるとも盡せじな。
- 一、春は先づ咲く梅の花、まねく尾花に誘はれて、行けど果なき武藏野は。
- 一、夏は澤邊に飛ぶ螢、いと心あこがれて、行けど果なき武藏野は。
- 一、月ひとえんと命のうちの、またもや君にあは島の神。

二才歌

- 一、増す花あらば我をもすてよ、別れしなどのなさけ散らすな。
- 一、君は局きん(ぬ)袖なき君にあふてよしなや逢ふよしないよの君様。
- 一、君は眞菰草、よしなき君に逢ふてよしなや逢うよしないよの君様。
- 一、エイ／＼若竹の世々の末までの君様イヨコノ誠に千歳経るサ谷の流に龜遊ぶ御代は變らで長久安穩じや。
- 一、エイ／＼千歳を経て鳴くや雛鶴の君様イヨコノ誠に治まりて谷の流に龜遊ぶ御代は治まる長久安穩ぢや。
- 一、露程も情かけざる若衆様、何の名残の惜しかるゝ惜しかるとよ、何のナナソレハナナ、ソレハナナナナ、名残の惜しかるゝ世の中にツンツクロハで、やしほもつものは、二葉がなさけソイソレハツイツイのツイソレハ、蛤のしをおもひそめし其夜は金の扇もたまらぬ、ましてもしはれ竹のあしる者の數やのふ、



サンサナ有七ハン八か、フンフン再びサンソロヨ、カンカン枯木にハン花が、  
サン咲きサンソロヨもとのつなを頼むぞ、サアエイサラ、サアエイサラサエイ  
サラ々と引かば行け引かずば此氣は行かざらぬ、ドコテナ、ソレハ寄せかけ  
たれどもナ、恥やカキヤセマイ、ソレハサア、サヒタサヒタソレハこふすくた  
ひのナ役ぢやも程に／＼な、エイエイオー

### 日新公小傳

忠良公は明應元年伊作家第九代善久の嫡男として伊作城に生る。母君は當時賢婦人の譽高かつた常盤の御前である。七藏にして伊作海藏院に入り住僧頼増に就いて學び十五にして亡父の後を襲いで伊作家十代の主となる。天資聰明、膚智雄略、而も大才あつて、其の嫡男虎壽丸は島津家十四代の太守勝久公の養子となつて第十五代の太守となる。即ち松原神社に祀られてある貴久公である。幼主を佐けて國亂を平定し、島津家中興の基を開かれたが、晩年には老を加世田に養ひ、常に子弟を集め

て文武の道を獎勵せしめ、有名なイロハ歌を作つて大いに武士道を鼓吹された。當時薩摩に朱子學が流行し、幾多の人材を輩出したのは實に忠良公の獎勵宜しきを得たがためである。

永祿十一年戊辰十二月十三日加世田に其生涯を終られた。大正六年、其の功を録し從三位を追贈せられ、全年十一月二十三日に三百五十年祭を營み、莊嚴な奉告祭を施行した。

●日新公の墓 竹田神社の神苑内にある。墓のある所はもと常潤院の境内で、今は竹田神社の境内に屬して居る。常潤院の傍に「御影堂」があつたが、今は其の礎石が残つて居る。其の手前に日新公の湯浴されて居たといふ石が残つて居る。墓には殉死者中條次郎左衛門、滿留郷右衛門兩士の墓がある。

●別府城の跡 現今の加世田尋常高等小學校である。加世田城とも稱し、建久の頃、別府五郎平正明の居城であつたが、天文年間、薩州家の居城となり、天文八年正月忠良公が之を陥れ、加世田地方を平定されて此の城を居城とされたのである。本丸は今の加世田校



の講堂で、二の丸は現今畑地となり、三の丸は今の加世田校正門で、三壘から成る薩南唯一の要害である。

城の對岸に忠良公の居館の跡がある。今は民有宅地となつて居る。

また今の鴻巣馬場に高さ一丈四尺三寸の四重の塔があり、碑面には「地藏尊」の彫刻と日新公の和歌一首「一切のつみも消えなむ彌陀地藏、四十九の身の四十八願。」と刻してある。日新公が戦死者の靈を祀る爲に建立されたものである。

●竹屋ケ尾 加世田驛の南一里、内山田にある

### 神代記に

天孫瓊々杵尊高千穂峰より吾田國に來り國神の女木花咲耶姫に幸す。妊むあり、尊疑ふて宣はく天神の子と雖も一夜にして孕ましむるを得んやと、姫慙恨して無戸室むつむろを作り火を放ちて其中に産む即ち火闌降命彦火々出見尊、火明命にして母子共に恙無し。とあるのは、實に此地で、絶頂の平地こそ無戸室の遺趾であるといふ。其の附近に董竹林きんちく

がある。傳へ曰ふ當時三皇子の臍帯を截るに竹刀を以てし、其竹刀を棄てたのが芽を出してこの竹叢となつたのだと。竹屋の名稱もこれから起つたのだといふ、其の西北の丘麓が天孫瓊々杵尊が都し給ふた笠狭宮の遺蹟であるといはれて居る。

●萬瀬川 源を知覧川邊伊作の山中に發し、加世田町と阿多村との間を流れ、田布施村で海に入る。薩南の巨流であるが、川の太い割に舟運の便がなくてわづかに川口から一里加世田町川畑迄しか溯る事が出来ない。往古は益山、唐仁原、小湊の邊を流れて居たといふ事であるが、亨和三年に川筋を直して現今の様になつたといふ事である。川は溪谷の間を流れて至る所に瀧を造り、奇岩怪石の絶勝をつくつて居る。

●新川 萬瀬川が海に入る邊を新川と言つて清麗の勝地である。潮が満ちた時は海水逆流して蘆洲荻嶼を没し青松の砂丘をめぐつて數個の浮島を現出し、潮が退けば水色澄み渡つて水柵の縦横する所、漁艇が時々砂に膠し、新川の漁家が之に臨んで、漁る漁夫の櫓聲も悠々として松吹く風の音に和して譬へ様がない。其の上此の邊は河魚に富み、一度網を投すれば、銀色の鱗をひるがへして鮮魚がビクに滿つ。夏季には小舟を浮べて涼を入



れ、月を賞するもよし、潮干に貝族を漁るもよし。

河海に相合する邊は所謂吹上で白砂青松が遠くつゞいていつ迄見てもあかぬ眺である。

加世田驛から大崎行の汽車に乗れば十數分で大崎驛に着く、此所から徒歩で十數町下ればそこが新川である。

●河添の絶勝 加世田驛から萬瀬川の上流に向つて凡そ一里溯る、阿多村花瀬にある萬瀬川の中流で、此の邊から上流は河身水石の奇景が甚だ多いが中でも河添の附近は豊前の耶馬溪に似て、兩岸は絶壁をなし、奇岸怪石重疊して其の間を曲流する河水は急流矢の如く、岩をくゞり石にふれて雪と碎け、水煙日光に映じて七彩の虹をあらはす。加ふるに河底は皆龜の甲の形に穿たれて、一面壘を敷きつめた様になつて美觀を盡して居るので、春は兩岸の躑躅を賞し夏は鮎の魚獲が多い所から、文人雅客は言ふ迄もなく、避暑遊覽の客が絶へない。

此所に萬瀬水電株式會社の發電所がある。

## 川邊町

川邊町は萬瀬川の支流が幾つも相合つて田地がよく開け、良質の米を産することを以て知られて居る。鹿兒島市を去る八里、薩南の中部で、四方山に擁せられた一大盆地で南薩地方では樞要の生産地、商業地である。縣立川邊中學校をはじめ、村立實科高等女學校等がある。久しく恵まれなかつた鐵路も薩南中央鐵道が阿多驛から分岐して町内を通過し、知覽まで開整中であつたが、昭和二年六月一日から阿多、川邊間五哩六十四鎖九十五節三の開通を見た。

縣道はまた四通八達し東は鹿兒島及喜入方面に通じ、西南は加世田方面、及び隣村勝目村を過ぎて枕崎町に通ずる線がある。

●松轟の瀑 加世田驛から二里足らず、川邊に至る縣道の側にあるので、河添を溯ること半里、水石の奇觀が最も壯大である。

十數條の流れが六尋乃至二十尋の絶壁を飛下し轟々の音は百雷の一時に轟くが如く、見



る者をして壯絶快絶を叫ばしむ。

●瀬瀨尾の瀑 野崎の山中にある一の瀑二の瀑三の瀑から成り、高さが二十丈、幅二丈餘、東南北の三方は山に圍まれ樹木が繁茂して瀑の下は水が淺く、わづかに膝を没するに過ぎない。附近は一面垣岩で、こゝから眺望すれば、落ち來る水はくだけて雪の様に散る。夏季の避暑には恰好の所である。

歌人八田知紀翁門人等と此所に遊んで此の瀑を見て大いに嘆賞され、師弟の間に歌が詠まれたといふ。

▲木かくれの瀑の白絲君ならで誰世の中に引出すらん

肥後元藏

▲引かずとも自ら世に顯れん千尋にあまる瀑の白絲

八田知紀

### ●蟹ヶ地獄

萬之瀬の本流に沿うて更に溯れば川邊町と知覧の界近くにある。

川邊町小野から知覧村轟に至る約半里の間は道路も非常に峻峻で、麓川の清流を脚下數尋の谿谷に瞰め、迂餘曲折して溯れば所謂蟹ヶ地獄、手斧が瀑、轟の瀑などあるが、其の

中でも蟹が地獄が最も奇觀で碧水巨岩に激しては玉屑を飛ばし、林壑を震はせる。もしも蟹が流れにつれて下らうものなら、忽ち粉碎して死するといふので此の名がある河添と共に薩南の奇勝である。

### ◆萬世町

加世田町の西隣りである。元東加世田村と稱へたが、大正十四年町制實施と共に改名した。薩南屈指の商業地である店舗櫛比して殷盛を極めて居る。随分久しい昔から海外發展の氣象に富んで、室町將軍の頃など、支那朝鮮方面と貿易して居たらしく、町内の舊家には彼の地の捺印した書類や、貿易品など今尙ほ存じて居るといふ事である。現に町内の青年は小學校卒業後は決して故郷に戀々として居ない。

加世田驛から分れた支線が同町の大崎驛まで敷かれてある。

### ◎竹屋神社

加世田驛を出ると左手の丘陵にある、彦火々出見尊、火蘭降命、火明命を奉祀する。此の地が天孫瓊々杵尊の笠狭宮の遺趾であると傳へられて居る。社格は縣社



である。

### 笠砂村

◎大浦潟 大崎驛から西方二里、笠砂村（元西加世田村）に屬して居る。

潮の干満が緩で、危険がなく、干潮の時は一里餘の干潟を生じ貝族、海苔が非常に多いので、夏季は潮干に出でて貝を漁り、冬はまた水禽が群集するので、狩獵には恰好の場所である。灣内に恵美須島、雙子島、戀島などいふ岩嶼がある。何れも翠松をいただいて、点々と孤立し 風光賞すべきものがある。往時、日新公が此の地を御通りになつて歌が詠ぜられた。

▲旅人の時雨にぬれし大浦潟笠松もあり笠石もあり。

當時の笠松は枯死してないが、沖の新田の老松は自ら笠形をなして風致佳良な所から今之を笠松と呼んで居る。

◎片浦港 （大浦から二里半、加世田から六里四町）

野間岳の東の麓で港口に楯羽島、竹島の二島が双び崎つて風を防ぐによい。港の入込が約半里、大船數百艘を繋ぐ事が出来るので、縣内屈指の良港である。浦頭には無數の白帆が細浪を蹶り、白砂が遠くつゞいて、何だか神話にでもありそうな海邊である。

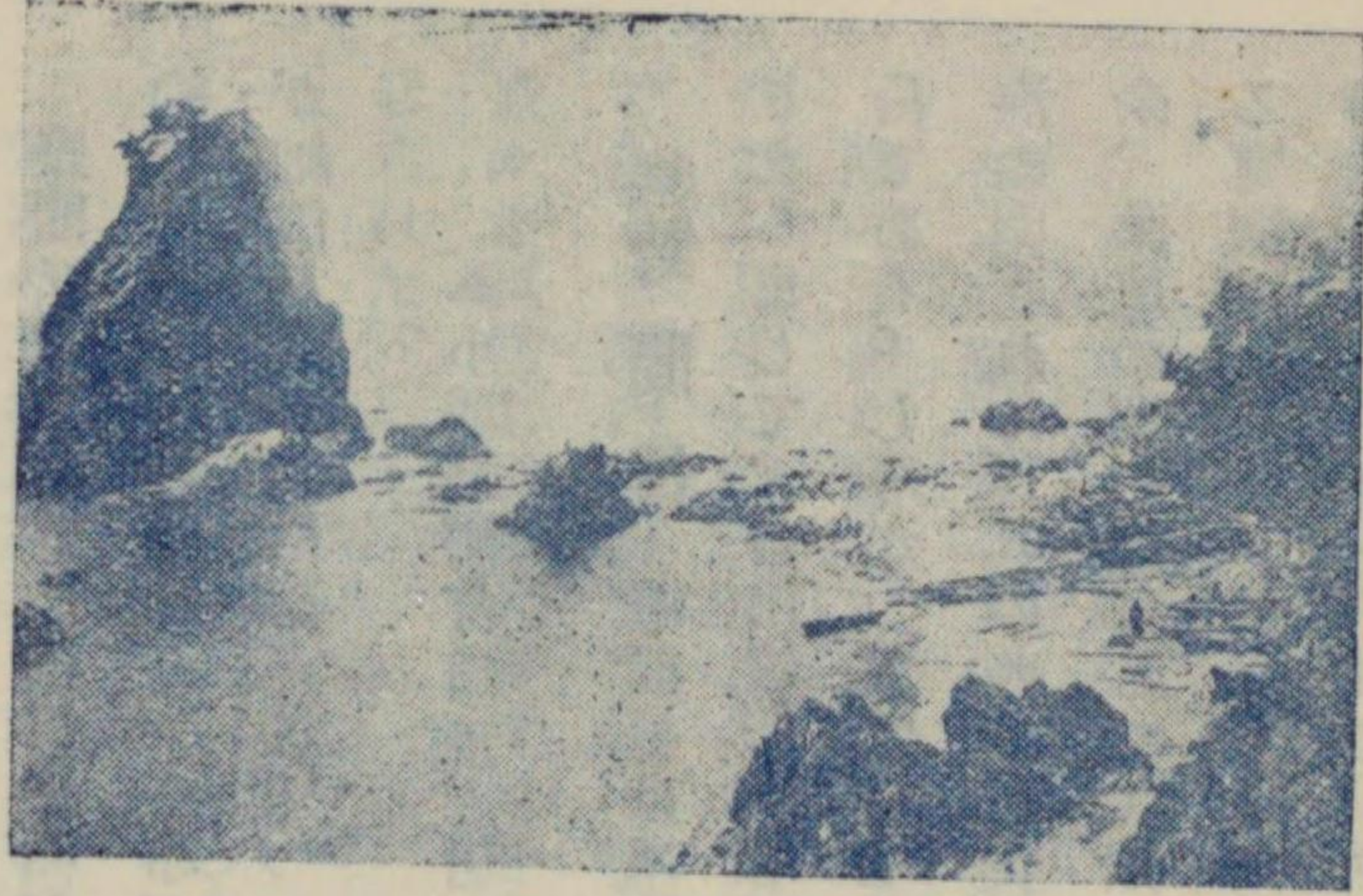
▲小浦島岬片浦港、唐の船さへ來て繋ぐ。

（民謡）

### ◎野間岳

野間岳は所謂神代記にある長屋の竹島で、天孫瓊々杵尊が高千穂に天降りまして、吾田の笠狭岬に至り長屋の竹島に登りましましきとあるのは即ち此の野間岳である。したがつて此の地は神代に於て皇居のあつた所である事は勿論である。三方は海に圍まれて、其の西方に突出する嘴の様な野間崎が其の笠狭岬で、高千穂を去る三十里余、薩摩の西の端になつて居る。登山は片浦からが最も便利で、道程一里、八合目迄は頗る寛緩であるが、八合目から突然急峻になり、加ふるに怪岩奇石が累々と横はつて居る。頂上の眺望はまた格別で、浩々とした氣が養はれる、八合目の所に野間神社を奉祀して





ある。

瓊々杵尊、木花開耶姫、彦火火出見尊、火闌降命、火明命を祀る。本村は此の如く神代に由緒深い所であるが、舊名西加世田村といつて居たのを吾田の笠狭岬とある所から名も舊名を改めて笠砂村と呼んで居る。片浦から更に二里、野間岬の先端に近く野間池と云ふ所がある。

野 間 岬  
枕 崎 町

加世田驛から五里半、自動車の便がある。

薩南第一の港で南薩線第二期の終点となつて居るが、未だ工事は着手してない。今から二百年程以前までは人口千人足らずの淋しい漁村であつたそうだが、其の頃、森彌兵衛といふ人が紀州から鯉

節の製法を傳へたために、従來生肉のまま用ひて來た鯉を製造する様になつたので、鯉漁業に大變動を來し、其の發展を促され、人口も年々に増加して今の枕崎市街を造つたといふ。

大正三年九月縣營で築港を起工し、工費十八萬圓を投じて大正七年、竣成し港としての設備が整つた。其の上資本金の多い漁業組合があり、枕崎造船所、無線電信の計劃、或は鹿兒島測候所の支所などが出來、漁業に必要な設備が大いに整つて來た。かつを船との間に通信する爲めに、軍用鳩の拂下をなし、百數十羽の傳書鳩を飼育して通信の用に供して居るが、結果は良好だと聞く。人口二萬五千、大正十二年六月九日、舊名東南方村を改めて枕崎町と呼ぶ事になつた。

街巷頗る殷盛で、前は果しなき大洋にのぞみ、硫黃島、竹島、黒島など波上微茫の間に望むのみで他は一面渺々たる荒海である。

港から三四町の沖に立神岩と云ふ三十間もある様な怪岩が天を突いて聳え立つて居る。

無限の寶庫



「かつをつれつれ一万五千」

と目出度い歌が次から次へと歌ひはやされて長閑な春の漁村は、にぎやかな空氣がたゞよふて来る。櫻が咲き、つゝじが咲いて都は花見で人の心もうき立つ頃から、秋ももうふけた十一月の末頃まで、漁夫たちは板子一枚の下に地獄をひかへて、勇ましい雄々しい海上のはたらき。それは本當に筆や言葉にあらはす事の出来ない程盛なものであるが、世間の人たちは此の勇ましい大奮闘を知る人は少い。

果しない寶の庫の鍵を握つた漁夫たちは、赤銅色の顔に、もゆる様な望みをかゞやかせながら、米鹽、薪炭、水、其他の食物を一切用意して、石油、氷など必要品をすべて積み終ると、勇みに勇んでエンジンの音も心地よく山の如く群集する見送人に送られて、港を出でて餌をとゝのへる方へと急ぐ。鯉船にとつて最も大切なのは餌である。餌は生きた鰯を使用するのであるが、餌を積み終ると直ちに目的地へ向つて急ぐのである。

逆巻く波は山の様に押し寄せて、何時如何なる目に逢ふかわからないが、そらいふ

心細さを慰めてくれるものは、一刻一刻と目の前に開けて行く自然の眺めである。空の色、水の色夕日の照りはへた島影、あかつきの海景色、彼等は思はず歌ひ出さずには居られない。

鳥も通はぬ八丈が島に、 やらるゝ其身はいとはねど、

後に残せるつまや子は、 どうして其の日を送るやら。

鯉のたくさん居る海上には、鯉どりといふ鳥がきつと飛んで居るので、船長は船を指圖しながら双眼鏡を片手に廣々とした海の上を、一羽の鳥でも見逃さじと眼を丸くして見つめて居る。船員も皆氣を張りつめて今や髪の毛でつく程のすきもない。

魚群!! 鯉!!

骨鳴り肉おどる漁夫は直ちに用意に取かゝる。餌は櫻花が風に散る様に海中へ撒かれる。日頃鍛ひし腕はいよゝゝためされるのだ。船の中は見る見る鯉の山が出来る。よくつれる時になると一つの船に一秒に五六尾の割で、四五分間に三千匹以上もつれる事がある。



大島の寶島を中心にして、かぎりない寶庫はこうして漁夫たちの鍵によつて開かれるのである。一航海に數千の鰹を得て、勇みに勇んで港をさして歸つて來る。鰹を食べ鰹節を食べる人は多いが、こうした漁夫たちの勇ましい骨折は世間の人はあまり知らない。

◎耳取峠 枕崎港から二里。峠は平垣で海陸數十里の美景を双眸に收むる所である。中にも開聞岳が東方に屹立して、其の山脚は直に海に入り打ち寄する怒濤に洗はれて宛然白い輪廓をとつた様である。それについて白砂青松の長汀曲浦が蜿蜒とつゞいて、其の向は二十里の彼方に大隅半島の先端が遠く海中に翠黛をあらはして居る。南方は碧水萬里の蒼海で白帆点々と出沒し、海!!陸!!數十里の間に美しい景色を一目に眺められる。中にも開聞岳を望む場所としては、地の地が縣下第一である一体此の勝地にこうした奇しき名前をつけたのは何故か。冬季になれば西北風がはげしく吹き上げて行人の耳鼻を吹き切る様だといふ事である。

耳取峠は冬の事、其他の季節には實に見惚れ峠である。冬でも絶勝に見惚れた旅客に

は、耳はとられても氣がつかぬ位である。一名筆捨山といつて居る。一代の歌人八田知紀翁が此の絶景を物せんとして意に充ちた作が出來ずに遂に筆を捨て、嘆じたといふ事である

### 坊之津 (西南方村)

伊勢の津と、博多の津と合せて我が國の三津といはれ、風景はまた獨り薩南の絶景たるのみならず、實に天下の絶勝である。

おしむべし交通機關の不備と、偏隅にあつて地の利を得ないためにあまり知る者はなし。橘南谿の西遊記に讚嘆して海内無双とし、天の橋立や嚴島を凌賀すること遙なりといつて居る。

此の地は九州の南端で、硫球、支那、其他南洋の諸島と交通するには極めて恰好な地にあるために奈良大和の昔から、海外に通商互市する者は、皆此の港に來たものである。往時遺唐使や留學生は此の地を日本最後の地として支那に渡り、歸路にはまた此地を日本最初の地として、其の山河をなつかしんで居たといふ事である。當時は此港を唐港とも呼んで、海には



船舶輻輳し、陸には商店軒を連ね、高樓臺を並べて繁華な町であつたそうだが、慶長年間徳川幕府が肥前長崎を貿易港と定めたために、其の繁榮を奪はれて、今では淋しい漁村となつて居る。けれども天然の良港だと山水の秀麗とは長崎と雖も奪ふ事は出来ない。港口は食ひ違つた岬が突出して天然の防波堤をなして居るので、如何なる波風でも港内は至つて靜かで對岸の山は影を倒寫し、四面には怪岩奇石相連りて、其の奇絶な風景は、唐繪の山水を見る様である。殊に奇なるは港口にある雙劍石である。兩岩相竝んで一つは高さ七丈餘、周圍百間もあり一つは高さ五丈、圍りは六七十間で其の間五六間満潮の時は其の間を舟が往來する。恰も兩劍を建てた様な恰好であるのでこゝ呼んで居る。

▲御劍の形なせれば是も又國を守りの神ならずやは

八田 知紀

▲回峰回岸極ニ奇幽一

靈勝古來甲ニ薩州一

面海背レ山民戸古

故尋ニ耆老一問ニ琉球一

丸山 雲平

▲頼めども蟹の子だにも見えぬかな如何はすべき唐の港に。

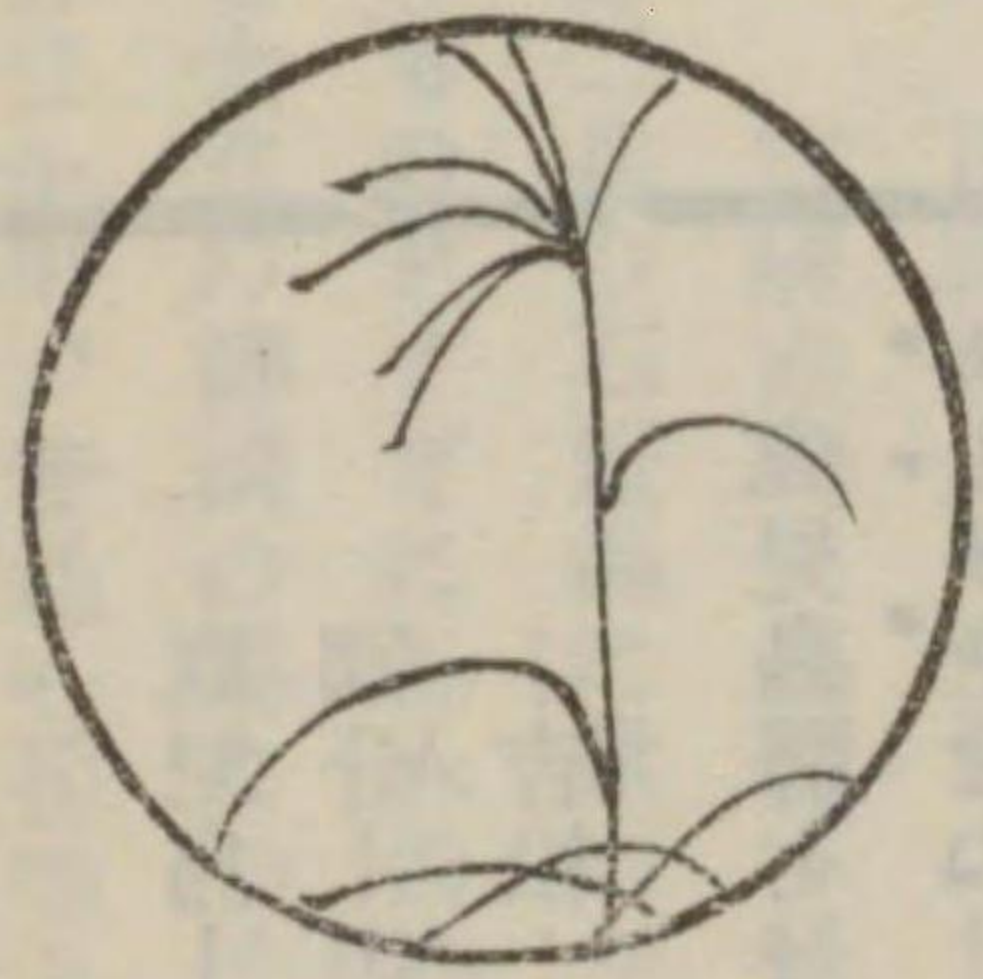
### ◎泊

#### 浦

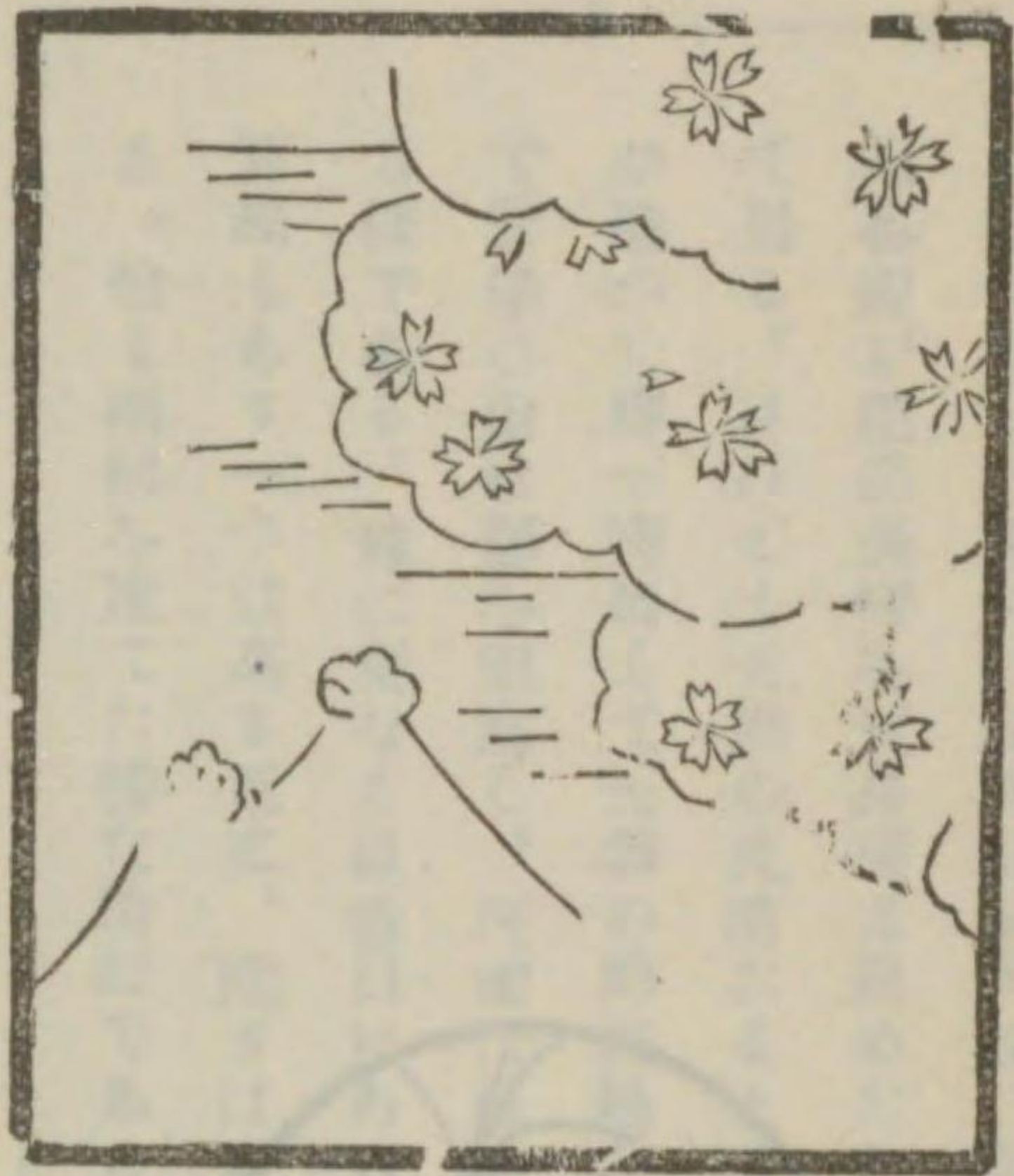
坊の津港の北半里の所にある。此所もまた良港で、景風また佳良である。坊の津港よりは港が稍狭い。三方は山に圍まれ、西は丸木崎或は宮崎といふ、嘴が左右から突出して海港を押蔽して居る、此の嘴にも洞窟がある、東西に透明して居る。

### ◎久志港

泊から二里海岸に戸口が聚落していゝ港である。此所は浄土眞宗が九州へひろがつた苗床ともいふべき所で宗教上からは見のがしてならぬ所である。







五、鹿兒島本線附近 (舊)

鹿兒島  
吉松間

鹿兒島—龍ヶ水—重富—帖佐—加治木—  
國分—表木山—嘉例川—牧園—横川—栗野  
—吉松……………熊本縣へ

鹿兒島驛を發して上り列車に乗り込めば、鳥越トンネルをぬけて磯の濱に出る。鳥津公爵邸を左に見下し、海をへだてて鳥芙蓉を眺めながら、汽車は斷岩絶壁の下を通り、幾つかのトンネルを出ると龍ヶ水驛に着く。驛の北東十町ばかりの所が南洲翁と月照上人の入水場所である。

南洲翁と月照上人

月照上人は京都清水寺の住職であつたが勤王の大志を抱いて、早くから南洲翁等の志士と結んで居たが、安政大獄に辛くも遁れて下關海峡を渡り、博多を経て苦慘の

末入薩して南洲翁に倚つたが、幕府の追捕が急で進退谷まり、安政五年十一月十六日の黎明、南洲翁と相擁して海に投ぜられたが、翁は漸く蘇生し、上人は遂に歸らなかつた。時に上人は年四十六才であつた。辞世に曰く、

▲曇りなき心の月の薩摩湯、沖の波間にやがて入りぬる。

▲大君の爲には何かおしからん、薩摩のせとに身は沈むとも。

明治五年、南洲翁冠を掛けて故山にかへり、慕參感慨の詩に。

▲相約投淵無後先 豈圖波上再生緣

回頭十有餘年夢 空隔幽明哭墓前

筑前の志士平野次郎は墓前二基の石燈籠に歌つた。

▲長らへば兎に角命あるものをすぎにし人の心短かき。

▲長らふも死ぬるも同じ大君の御國の爲につくす心は。

◎平松神社 重富驛から南方三十町、普通心岳寺といつて島津金吾歳久公を祀る。文  
緣元年壬辰七月十八日島津左衛門歳久入道自刃の地である。第十六代の太守義久公慶長四



年一寺を創建して心岳寺といつて居たが、明治二年の廢寺に逢ひ一社を立て、平松神社といふ様になつた。

歳久公は貴久公の第四子で天性深沈、智謀あり、剛毅にして果斷、屢々、武功があつた。毎年舊曆の七月十七日の眞夜中が祭典で其の夜は鹿兒島からの參拜者が殆ど終夜三里の國道を華やかに彩どるのである。

### 帖 佐 村

#### ●寺師の梅

(帖佐驛からは二里半 蒲生から北へ半里)

藤川天神の梅と日向の月知梅と合せて三州の三梅といはれ、枝が地上に垂れて其所に根を生じ、次々に延長して一反歩ばかりとなつて居る。満開は普通の梅より稍早く、其の頃になると遠近の客が袂を連ねて、淋しい民家の庭が賑ひを呈する。こゝから岡一つ越せば山田村である。

#### ◎米山薬師

(寺師から一里半 帖佐驛からは二〇町)

#### ▲帖佐で名所は米山薬師、前は白帆の走り船

何十丈と高い崖の上に薬師堂が安置してある。越後の米山薬師に似て居る所から米山薬師と呼んで居る。二町ばかりの高い石段を登り盡せば、頂は平坦になつて居て、數里の間を一眸に收め、本當に歌の如く、錦江灣を走る眞帆片帆、松原のまにまに見え隠れする人家別府川の鐵橋を渡る汽車何れを見ても氣持がよい。

此所を下れば、雞林八道を風靡し、明軍の膽を寒からしめた將略卓越の猛將島津義弘公が安居された屋敷の跡がある。

#### ◎古帖佐屋敷

義弘公の屋敷の西北隣りにある。

此所は昔星山仲次といふ者が陶工をなした跡である。仲次は元朝鮫人で金鮮といふ者であつたが、文祿四年、豊太閤の征韓役に際し、島津義弘公が歸朝の時其家族と共に歸化した者である。朝鮮の星山といふ所で陶工を営んで居た所から星山を姓として星山仲次と名付けられたのである。義弘公は仲次の技を賞し祿を厚くし、士に列して盛に製造せしめて



愛翫されたといふ。所謂古帖佐焼で現今帖佐村、蒲生、加治木あたりの舊家には藏して居る者があるといふ。當時のかま場の跡が残つて居る。慶長年間には更に多くの陶工を従へて串木野に居らしめられたが、後伊集院の苗代川に居らしめて所謂薩摩焼の元祖をなしたのである。

義弘公が加治木に移られるに及んで、金海もまた之に従つて加治木に來たが、其の後裔が今に龍門司焼を製して居る。

### 浦生村

帖佐驛から西へ二里行くと蒲生に着く。

本村は製紙と杉材を以て縣下に名をなして居る、製紙は伊作と共に縣下では其の産額が最も多く、杉は村内到る所の山々をおほふて、皆山!! 皆杉!! と本村を評した言葉を思ふとなるほどとなづかれる。

本村の南は鹿兒島郡の吉田村に接して居る。

◎日本一の大樟 蒲生町の西北にこんもりと茂つた森がある、縣社八幡神社で、殿の右側に雲を凌いで立つ巨楠こそは日本一の稱ある大樟で、根本が十二丈五尺、地上五尺の所で七丈三尺八寸高さが十五間、樹齡八百年以上にもなるといふ。して見ると平安時代の半頃から既に生育して居たわけである。

### 加治木町

鹿兒島以北に於ける名邑で、元始良郡役所のあつた所である。柅木といひ柅城といふは、傳説に於て蛭兒命の乗り給ふた天磐楠船が漂着した所で、其の木から芽が出て大木になつたといふので、以前は柅木と書いて居たといふ。縣立加治木中學校。加治木工業學校町



蒲生の大楠

社



立高等女學校をはじめ、區裁判所、稅務署、銀行、會社等があり、殷賑を極めて居る。鐵路開通後は町の賑ひが稍衰へたといはれて居るが、尙北隅第一の都會たるを失はぬ。

加治木驛のすぐ前に四面絶壁で、平地から孤立する數十丈の山が見える、藏王岳といふのであるが、普通天王寺山と呼んで居る。

●精矛神社 天王寺山の東方を日本山と呼んで、精矛嚴健雄命（島津義弘）を祀る縣社、精矛神社がある。此所は島津義弘公が帖佐から此の地に移住して、花を愛で月を賞して老を樂んで居られたが、元和五年、八十五歳の高齡を以て薨ぜられたのである。

●龍門瀧 日本山の西北にある。高さ三十餘尋で昔、唐人が加治木に入船した頃、甚だ此の瀧を賞して常に此に遊んだが、唐土の龍門瀧を見る心地がするといつて此の瀧をも龍門瀧と名づけたといふ事である。

●文之和尙の墓 安國寺の墓地内に二畝ばかり玉垣の内に墓碑が建立してある。和尙は一翁の弟子で一翁は桂庵禪師の高足月諸の門人である。義弘公が其の儒學に精しい事を知つて、國分の正興寺と此の安國寺の住持となされた。慶長四年、公に従つて上洛して

藩邸に居られたが後水尾天皇の詔により、宮中に四書新註を講ずるの榮譽を得た人である。

### 文之和尙小傳

文之和尙は名を玄昌といひ、文之は其の字である號は南浦といふ。日向の南、外の浦に住んで居られたからである。又瀬雲、狂雲等の別號がある。父は河内國の人で亂を避けて日向の國福島に至り、里人の女を娶つて文之を生んだ。文之幼にして群童に異り、六歳で福島延命寺の住職天澤に従つて僧となつた。天澤は之を法華を授けたが、文之を神童として、我力及ばずとなして同國龍源寺の一翁に託した。文之は薙髮して玄昌と稱し十五才で京に上り、東福寺に留まること十餘年博く内外の兩典を綜べ深く蘊奥を極めて歸省した。時に一翁は既に老衰して事を執る事が出来なかつたので文之を薦めて龍源寺の住職となした。これ實に天正九年十二月である。後大隅國昌林寺や正壽寺に轉じた。時に島津義久公が文之の儒學あるを聞いて國



分の正興寺及安國寺の住持として寵遇日に厚かつた。慶長四年上洛して名譽を禁延に得、翌五年家久公に従つて歸藩し正興寺に住したが、全八年家康の命により筑前國禪光寺の住職となり又相模の國建長寺に移る。全九年二月、家久公に招かれて藩に歸つたが、十六年に大龍寺に移り、元和六年九月晦日、六十六才を一期として入寂した。

其の著書には南浦文集等がある。

加治木驛からトンネルをくぐると國分の平野に出で西國分村に在る國分驛に着く。

### 西國分村

#### 官幣大社鹿兒島神宮

國分驛から西北八町、老樟が鬱蒼と枝を交へて碧瓦朱欄を擁して思はず襟を正さしむるものがある。彦火々出見尊を祀る。世に國分八幡といふのは此のお社である。神代の昔

彦火々出見尊の高千穂宮の跡であるといひ傳へられ、尊が海神から得給ふたといふ千珠、満珠が神藏に納めてあるといふ事である。明治四年、國幣中社に、全七年官幣中社に、全二十八年官幣大社に列せらる。

●奈才木社 神宮の東一町ばかりの所にある。神代記に「伊弉諾伊弉丹命の御子姪子が三才にして足が立たないので、天磐樟船に乗せて波の間に間に流された」とあるが其の船が此所に漂着して、磐樟船から芽が出て樟の大木になつたといふが、現今では其の大木は枯死して其のくち株のみが残つて居る。

願事をさのみ聞げん社こそ果は歎の杜と成るらめ。

如何にせん歎の杜は繁れども木の間の月の隠無き世を。

打絶て枯ぬき聞し木の本の如何で歎の杜なるらむ。

枯にける人の心の秋風に果は歎の杜と言の葉。

哀とも思ひもぞ知る我戀を歎の杜の神に祈らむ。

讚岐

橋俊宗女

清原元輔

藤原秀茂



杜雨歎の杜に逢ずして君が待つ夜は過ぎにけるかな。  
子規飽かぬ歎の杜に来ていとごも聲を惜みつるかな。

顯季  
俊頼

◎隼人塚 國分驛の南三町、汽車の上からも眺められるが、鐵路のすぐ南側の田圃の小高い塚がそれである。由來三州の地は日本民族發祥の地であるが其後豪族が各地に割據して、帝都が大和に還つて次來は政令行はれず、叛亂が相次で起り、或は天皇の御親征があり、或は皇子の征討があられたが、人皇第四十三代、元明天皇の和銅元年七月十一日五重塔三基と四天王の石像を建立して熊襲の死靈を慰籍する爲めに供養を行はれ、越えて十二年元正天皇の養老四年二月隼人が叛したので、大伴宿禰旅人、巨勢朝臣眞人をして平定せしめられたが、熊襲の靈と合せて隼人の魂靈を祀られ、放生會を行はれたといふ事である。

塚は其放生會の大路にあつて八月十五日、鹿兒島神宮濱殿神幸の時駐輦の所であるといふ。現在は

### 石塔婆及四天王の石像

田圃二畝三步の一丘上に存在

#### 四天王の石像

一軀は岳の牛腹に埋没、半身露出  
一軀は岳上に立ち高さ七尺  
一軀は鹿兒島市加藤好熊氏の庭園にあつたものを縣に譲り受け大正十四年十二月十三日岳上左側に立つ

#### 石塔婆三基

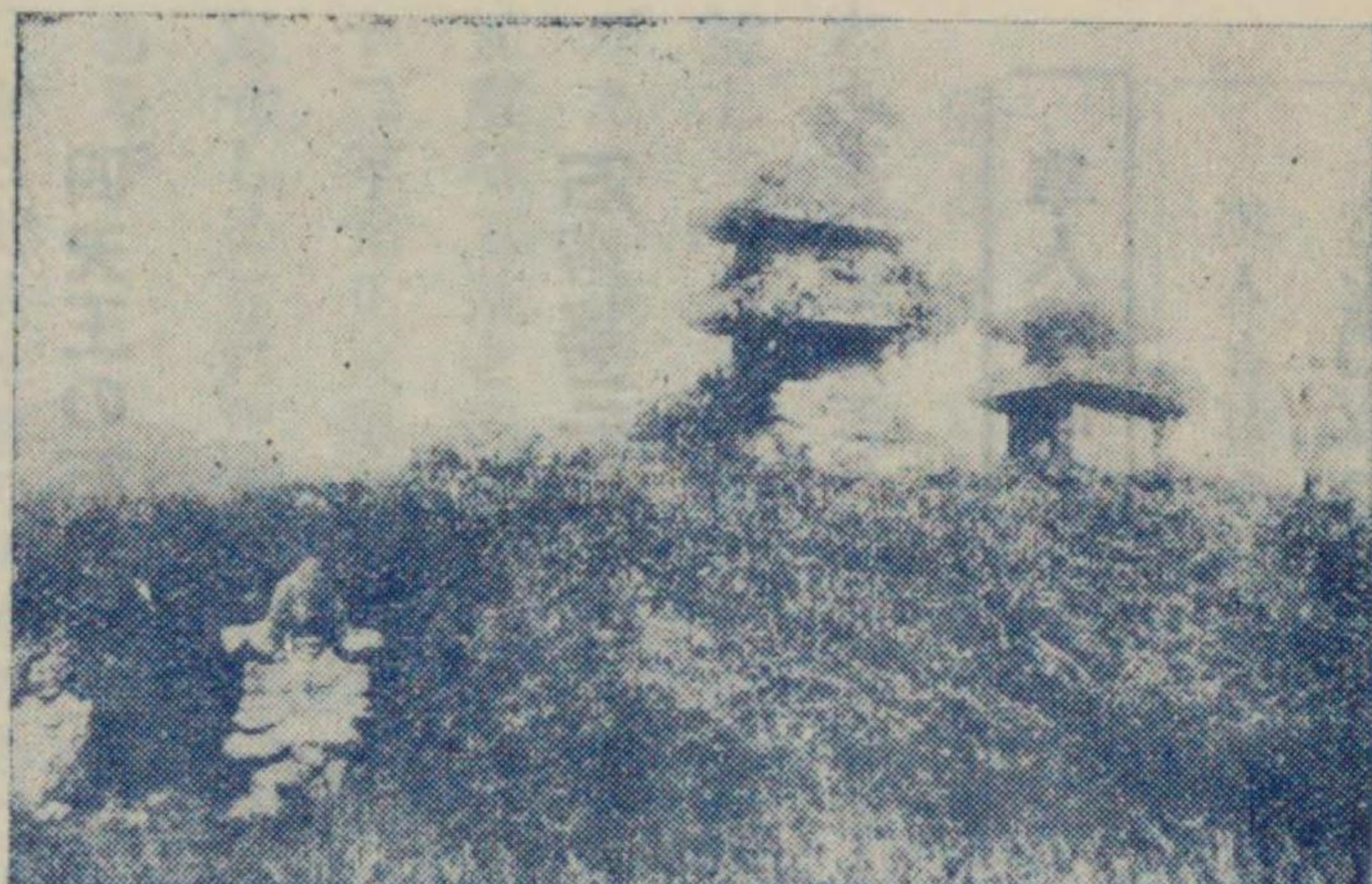
一基は台石のみ  
大、高さ一丈四寸 小、高さ九尺

大正十年三月三日史蹟保存地として指定されたものである。

### 隼人略記

隼人と言へば世人は往々蠻族の様に考へて居る。それは其の氣質が勇敢な爲めで止むを得ない事だが、決して大和民族次外の蠻民ではない其祖は瓊々杵尊の第二の皇





始皇の靈を養ふ荒正  
 郡御の供をす廢史  
 西國分村の石塔を當もる  
 分國分村の石塔を當もる  
 停分國分村の石塔を當もる  
 車場を石塔を當もる  
 傍に石塔を當もる  
 在に石塔を當もる  
 天明元及に石塔を當もる  
 族人集及に石塔を當もる  
 給せさ器に足に定指てし

も上古隼人の勇敢なる氣質の遺風である事がうなづかれる。

子火闌降尊から出て居る。はじめ三州に限  
 つて住して居たが神武天皇の御東征にした  
 がつて大和にうつり、朝廷の藩屏となつて  
 居た。後に残る者は稍性質の不従順な者が  
 多かつたために帝都を遠くはなれ、皇化を  
 拒む様になつたのである。

熊襲が叛いた事は隼人の子孫として吾々の  
 残念に思ふ点であるが、隼人の性質は單純  
 潔白で進むべき道を授けたらたしかに盡忠  
 報國の誠を致す素質がある。皇國三千年の  
 歴史隼人の活動しない舞台があらうか。し  
 かもそれが多く尙武の歴史であるのを見て

◎日當山温泉

國分驛から北へ十五町、新川の岸で、鹿兒島市から、鐵路一時間汽車  
 賃は往復九十錢で便利な爲めに客が非常に多い。殊に一日で往復が出来てゆつくり湯治が  
 出来るので便利である。

明治、延齡、木房、新木房の四つに別れ、明治湯はアルカリ性鹽類泉で他は皆アルカリ  
 性炭酸泉である。痲氣痲癢、婦人生殖器病の加答兒、腸加答兒等に効がある。

國分驛から南へ約三十町濱之市に着く、此所は島津龍伯公時代富隈城のあつた所で、最  
 近温泉も湧出して居る。

國分驛から東へ一里新川を渡つて行くと國分町に着く。

◆國分町

國分町は國分地方七ヶ村の中央で最も殷賑を極めて居る。國分煙草の主産地で、煙草專  
 賣支局の出張所があり、又縣立高等女學校がある。

昔の國分郷が今別れて國分町、東國分村、西國分村の三つになつて居る。國分町の其の



中央で、大正十五年十月十五日町制を實施したのである。

東は清水村に接し、北は東襲山につゞいて居る。

國道は東國分の南部を東に走り、高千穂館で名高い敷根村を過ぎ、密柑と酢の醸造地として名高い福山村を過ぎて、宮崎縣都之城の方へつゞいて居る。

◎隼人城 國分町役場の北十町ばかりの高地である、上古は大隅隼人の居城であつた。城中に大なる巖洞があつて長袋といつて居る隼人の酋長が居所であつたといふ。

◎大隅國分寺跡 天平十三年、聖武天皇が勅して國毎に國分寺を創建し給ふた時に大隅國に出來た國分寺の跡で、天文次前は圓通山國分寺といひ、天台宗の伽藍であつたが、數百歳の星霜を経て全く荒廢に歸して居たものを天文年中に中興され、太平小國分寺といつて宗洞宗となつた。其の時一度は荒廢に及んだが、元祿四年、更に興して明治二年の廢寺に及ぶ。遺物として存するものは。

◎石塔壹基。(高さ一丈五尺七寸。康治元年土戌十一月六日と刻す)

◎石碑壹基。(縦横徑各一尺一寸幅一尺、永祿五壬戌大願主淵脇安純と刻)

◎礎石壹基。(徑一尺一寸五分)

◎仁王石像壹軀。(高さ三尺二寸破壊した胴以上のもの)

◎布目瓦。(共同墓中地に多數散在して居る。)

大正十年三月三日史蹟名勝天然記念物保存法により、内務大臣から史蹟として指定したものである。

### ◎官幣大社霧島神宮

東襲山村にある。

國分驛からの方が便利である。行程六里自動車馬車の便がある。

國分驛から北方へだん／＼上り坂になつて居るが、左程急でもないけれども六里の道程を盡した頃は海拔千六百尺の高所に來て居る。進めば進む程、言ふに言はれぬ神々しさを覺ゆるが、第一の鳥居のあたりから、老樹が鬱蒼と枝を交へ、千代を経たと思はれる様な老杉が轟々と並び立つた中に神巖なる宏壯な御社殿が隱見して、森嚴靈氣自ら人に迫るもの



がある。

正殿	正殿瓊々杵尊。彥火々出見尊。鷓鴣草葺不合尊。神武天皇
東殿	國常立尊。高皇產靈。伊弉諾尊尊。天照大神
南殿	大汝命。國狹槌命。惶根尊。神皇靈尊。
	伊弉冊尊。素盞鳴尊。勝速日命。

神殿は所謂天孫降臨の高千穂峰の西麓になつて居るので、噴火の際に再三再四火災にかゝり、現在の御社は今から二百十餘年前正徳五年、第二十一代の太守島津吉貴公の建立に係り、朱色金光、神代ながらの老木に圍まれて實に縣下第一の名社である。祭典は九月十九日、遠近の参拜者で非常な賑ひを呈する。神宮の神域整理も目下着々として準備が進められつゝある。大正十年に御買上になつた今の旅館や賣店が軒を並べて居るあたり、民家の大分が移轉され、旅館も近く下手に移轉する事になつたので、新しく社務所も出来るだらうし、道路も神宮下から烏帽子岳の中腹を走り、丸尾に通ずる新設縣道が工事を急ぎつゝあるので、やがては垣々の自動車道路が出来て頗る便利になるだらう。

▲花はきり島煙草はこくぶ、もえて上るは櫻島

▲野薔薇可愛や躑躅も可愛、燃ゆる高千穂わしが胸

### 天孫降臨の靈峰

所謂高千穂峰の事であるが、普通高千穂峰と韓國岳の兩峰を霧島山といつて居る。高千穂は東岳ともいひ、韓國を西岳ともいつて其の間凡そ一里日向大隅の二國にまたがり、高千穂は一五七四米の活火山で、韓國は一七〇〇米の休火山である。

霧島山は何時見てもいゝ春は躑躅、冬は雪、秋の紅葉、何れおとらぬ雄渾の美を添へないものはないけれども、わけても夏季、下界が炎帝の猛威に喘いで居る時、濃霧海の様な清氣満山の此の地を跋涉するのは、實にたとへ様のない爽快さである。

過ぐる年長くも英氣に富ませ給ふ秩父宮殿下が御健脚を高千穂の秀峰に進めさせられて以來、霧島登山者が頗る激増して來た。おまけに近年登山熱が高潮され、女子供迄で登山



するものが非常に多い。

天孫降臨の由緒深き靈峰の鬱氣を吸ふも亦意義ある事である。

登山は高千穂、大浪池、韓國岳の順序となるが、登山道路は數年前の兎の道でなく、登山者の急激に多くなつた結果、自ら擴げられ、其の上、紛らはしい分岐点には一々町寧な指道標を建て、あるので、案内者なしでも安心して登山が出来る様になつて居る。

頂上からの眺めは、またとても素的で、南九州の群山はことごとく脚下にひざまづいて靈氣骨に徹し、思はず敬虔の念に打たれる。

大隅薩摩の二大半島はいふ迄もなく、渺々たる青海の果、水平線に沿うて種子島屋久島が殆ど水天渺々の彼方にのぞかれる。登り着いた所が所謂馬の背越で左は直に噴火口右は千双の谷底で一步をあやまれば生きながらにして灼熱地獄に陥ち込む、慄然身に粟を生ぜしむる様な所である。馬背越を過ぎると天の逆矛のある所に着く。

雲にそびゆる高千穂の、高根おろしに草も木も  
なびき伏しけん大御代を、仰ぐ今日こそ樂しけれ。

萬世動きなき皇室の基が、皇國文明が、國威が、此の地に發祥したかと思ふ時、吾人の感慨や果して如何。

更にまた二十有餘の温泉は淡々として湧き出づるので、霧島山に一段の價值をつける。動的に金剛杖をふるつて高峰を攀るもよし、靜的に湧泉に浴して保養するもまた一興。

◎韓國岳 霧島山中の最高峯で、有名な大浪池がすぐ脚下に澄んで、神龍蟠潜するといはれる傳説も何だか事實の様な氣がする。其の場所、其の水の色、其の深さを想像した時、何だか神秘的の靈氣に打たれずには居られぬ。

一ツや二ツ三ツや四ツ、十にも足らぬ幼兒が  
賽の河原に石を積み、一ツ積んでは父のため

二ツ積んでは母のため。……

チリンチリンと鈴を振りながら唄つて歩く順禮の唄にある賽の河原は、韓國岳の北の裾にある。菜の花の一面咲き亂れた春の野がいつでも見られるが、それは菜の花でなくて、硫黄が砂に結晶したものである。地中から吹き出す硫氣に箱をおほひ砂をおほふて結晶せ